
MBNG FirstGeneration

中の人は男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

M B N G F i r s t G e n e r a t i o n

【Nコード】

N 5 3 8 7 D

【作者名】

中の人は男

【あらすじ】

気がついたら俺は見覚えのない、不思議な場所にいた。そこにいた人物に話を聞くと、どうやら俺は救世主としてこの世界に召喚されたらしい。と言う事はアレか？つまり、これから英雄としてのモテモテ人生開始って事か？よっしゃ！人生始まったな！と思っていたら俺の体はとんでもない事になっていた。何の嫌がらせだ

プロローグ（前書き）

このお話はあるネットゲが元ネタです。元ネタ知ってれば少しは面白く見れるかも

プロローグ

深い眠りから無理矢理起こされた

正にそんな感じの気分だった

まるで頭の中に濃霧が渦巻いているみたいだ

その頭を抱えながら、うつすらと目を開けてみる
よく磨かれているのか、チリ一つ落ちていない真っ白い床が広がっ
ている

さらに視点を動かしてみると、その床の端が見えた
どうやらこの床は円形になっているようだが……
いや待て、何かおかしいぞ

床の端から視点を上にあげてみる

なんだあれ

てつきり壁かと思っていたが、壁じゃない

ありゃ空だ

だるさを感じる体を引きずって部屋の隅まで行ってみる

床の端の向こうへ手を伸ばしてみる

何もなし

床の端から顔を出して下を見てみた

床の下に………地面がない？

周りを見渡してみた

柱が一本もないし、上から吊している様子もない

じゃあ何か？

この部屋は宙に浮いてるってのか？

いや、これを部屋と言っていていいものか

柱もなければ壁もない。屋根だってもちろんない

こんなのは部屋って言わないんだよこの野郎

かと言って、他の適切な言葉も見つからない
ステージとでも言うか？

ああ、混乱してきた

冷静に状況を整理してみよう

えーっと、俺はさっきまで……………

あれ？さっきまで何をしてたんだ？

ヤバい

思い出せん

まさか記憶喪失？

いやそんなマンガみたいな事起きるわけがない

現にホラ、自分の名前は覚えているさ

俺の名前は……………

思い出せん！

「くそっ！何だよこの状況！」

イラついた俺は思いっきり床を殴りつけた

カッコいいと思って

するとその床が回転扉のように勢いよく回り、俺のアゴに直撃した

「うわべら！」

変な悲鳴を上げてひっくり返った

倒れこんだまま、空をじっと見つめた

なんか鳥飛んでる

ホント、意味わかんない空間だ

あ、わかった。これきつと夢だ

夢に違いない

それならこんな空に浮いてるステージの説明もつくぞ

しかし、変な夢を見たもんだなあ

そんな事を考えていると、頭の方で何か妙な物音がした
なんというか、キラキラっていう音つつーか、ピカピカって音つ
ーか

とにかく、何か光ってる感じの音がする

起き上がってそちらの方へ顔を向けた

光の粒子が周辺から集まっている

妙に冷静な気分でその光の集まりを眺めていると、それが形になっ
てきた

下の方から徐々に形作られてきて……ありや、人の形になってきて
るぞ

光が晴れ、完全に人が出てきた

どうやら女性のようだが

銀の髪を頭の横で二つに束ね、大きい青い目をしている

ムダに肌を露出するデザインになっている黒いチャイナドレスから

は白い肌が見え、首には……首輪!?

いや違う。首輪じゃないな、ありやトルクか?

まったく、ビツクリさせやがる

座り込んだままでその女性をボーっと見ていると、急に俺に話しか
けてきた

「こんにちは」

「えっ? あ、ああ。こんにちは」

妙に自然にされた挨拶になんか慌てた

「貴方が来るのを待っていました」

「待っていた? 一体何を……?」

こんな人は俺の知り合いにはいないはず。と言っても記憶がはつき
りしないが

人に待たれる心当たりもない……

はっ！まさかこれが噂の美人局という奴かッ！？
どうするッ！？この状況、どう切り抜けるかッ！

勝手なことを考えていると、目の前の女性は微笑みながら手を差し出してきた

とりあえず「あ、ども」とか言いながらその手をとり、立ち上がるん？なんか妙に背の高い女だな？立ち上がったのに、俺が見上げる形になってるぞ

ともかく、さつきから疑問に思っていた事を聞いてみた

「一体ここはどこなんだ？なんか妙な場所みたいだが」

「ここは生と死の間。落ち着いて聞いてください。この世界に貴方を呼んだのは私です」

「・・・はあ？」

「そもそも貴方を異世界から呼んだ理由はただ一つ。この世界を救って欲しいのです」

「・・・」

「今この世界は一見平和そのものに見えますが、水面下ではそうではありません」

「魔界からの魔族達が地上を我が物にしようと攻め込んでくるつもりなのです」

「・・・」

「現に今でも地上には魔族の尖兵が蔓延っていて、人々に危害を与えています」

「・・・」

「お願いです！救世主として魔族と戦い、この世界を救ってください！」

「病院行け」

「ええっ！？」

「いや、冗談とかで言ってるんじゃないんですよ！

本当に世界は破滅の危機にさらされているんです！」

俺の発言に顔を真っ赤にして反論してきた

グレート、この女マジヤベーよ。ホント病院につれてくべきだぞコイツ

「お前な、大の男を捕まえて何言ってるんだよ
そんな話信じるわけねーだろ」

「へえ・・・今、大の男って言いましたね？」

ヤベー女がニヤリと笑った

「言ったがどうした」

「これを見てもそう言えますか？」

そう言くとヤベー女は鏡を取り出した

鏡が一体どうしたっていうん・・・

ん？なんか俺の映ってるべき場所にいない少女が立ってるぞ？

目を動かしてみた。同じように向こうも動かす

手を上げてみる。向こうも上げた

ううむ、妙にモノマネが上手い少女がいるなあ・・・

なんて感じに考えてる俺は楽観的な男なのだろうか？

やっぱ、普通に考えると・・・

「な、なんじゃこりゃあああああ！！！」

信じられない現実を見せられて思わず叫んだ

「な、何これ！？そっぴやなんかさっきから声が妙に高いと思った
ら・・・」

「そっぴや」

「さらに、なんかアンタ背が高いなとか思ってたら、そっちが高い
わけじゃない

俺が縮んでるんじゃないか！」

「そっぴや」

「なんでこんな体になってんだよ！」

俺が平静を失って問い詰めると、冷静な声で答えが返ってきた

「貴方の肉体ごとこの世界に召喚するわけにはいかなかったのです。だから魂のみを呼び寄せ、体はこちらで用意しました」

「なんで救世主の魂を入れる体が少女なんだよ！」

用意するなら強そうなイケメンとかにしとけよ！」

「戦闘向きの体がこれしか作れなくて・・・」

「ウソつけこのヤロー！ってかこれ戦闘用なワケねーだろ！」

「今すぐだ！今すぐこの体から解放しろ！」

取り乱して俺が詰寄ると、目の前の女は軽やかに一步後ろに飛び、距離を開けた

「まずはその体と環境になれる為に普通に生活を行ってください。これからテイルコネイルという村に貴方を送ります。

その村長にはもう話をつけてあるので、色々と教えてくれるですよ」

「話聞けよ！」

「そんなに心配しなくても大丈夫です。私は貴方をいつも見守っています・・・」

「ブツ殺すぞー！」

目の前の女が静かに手を上げた

すると俺の足元に光の粒子が集まり、そこから俺の体を消していった。マズい、何か方法はないか！？

奴に一矢報いる方法はッ！

「ま、待て！」

「何ですか？」

「まだアンタの名前を聞いてないぞ！何て言うんだ！」

「ああ、申し送れました。私の名はナオ。マリオッタ。ブラデイリ。ナオと呼んでくださって結構です」

「そうか・・・わかったよブラデイリ！」

「なっ!?!」

よっしや！ざまあみろ！あえて逆らってやったぜ！
これで奴に一矢報いる事ができたッ！

そんなこんなで俺は田舎の村へと落とされた

冷静に考えたら、あんまり一矢報いてやったことにならないような
・・・？

いやそんな事はない。ブラデイリのダメージはきつとでかかったハズだ

こうしてこんな体にされた俺の村での生活が始まった

人間いきなり環境を押し付けられたら動揺して適応できないかと思
っていたが

意外にも妙なぐらいなじんでいった

普通ならここで面白い事件とかバシバシ起こるモンなんだが、そん
な面白い事は起きなかった

毎日朝起きてメシ食ったりバイトしたり人と喋ったりと、平穩無事
な生活だった

と言っても、村の外は妙にオオカミとかウロついてて危険だったの
で、金を貯めて剣を買ったりした

なんか学校で魔法とか教えてたのでそれを習って、炎とか雷とか氷
とか出せるようになった

だんだん体にも慣れてくると、意外な事実気がついた

ある日、凶悪な魔族の戦士と死闘を・・・じゃなくて、いつも通り
にバイトで配達していると

落ちている石につまづいて思いつきりコケた

誰だこんなとこに石置いたボケは。張り倒してやる

正面からモロにこけたので、きつとすりむいてるだろうなーとか考
えながら足を見たら、かすり傷一つ負っていない

しかもコケた時、全然痛みを感じなかった

もしやと思い、バイトが終わった後にちょっと剣で指先を切ってみよう

なんて考えてみたが、おっかないのでやめといた

だって、痛かったら困るじゃん

なんて考えてたらとがった木の枝に引つ掛けてケガした

傷口を見てみると・・・少し血は出たものの、すぐに止まった

なるほど、確かに戦闘向きの体だ。異常なほどの再生能力がある

ブラデイリの言っていた事は本当だったのか。ムカつく

この体質に気付いても、生活は対して変化せず、普通の日々が流れた
あの夢を見るまでは

あの夢は確か・・・この体質に気付いてから4日ぐらい経ってから
か

黒夢

変な夢を見た
なんか背中に真っ黒い翼が生えてる奴が「こっちおいでー」とか言
つてる夢だ

俺の名前は中の人は男

この名前に誰も疑問を抱かないから不思議だ
どうでもいい事だが俺は異世界からこの世界に来たらしい
異世界からここに来るのは特に珍しいことじゃない
噂ではこの世界の住人の約98%は異世界からの旅人らしい
変な世界だよな

普段俺はバイトとかして暮らしている

異世界の住人だから別に食わなくても死にゃあしないんだが
服とか買うために金は必要だから一応金を稼いでる

ちなみにその金で買った服はセーラー服のようなものだ

名前の通り、俺は頭の中は男なんだが外見は女だ
別に性同一性障害とかそういうものじゃなくて、異世界とかいう所
にいる俺は男だったらしい

その影響で頭の中は男のようだ

しかし頭の中は男なのにセーラー服を買うとはどういう事だろう
考えられる可能性としては、俺はその異世界では水兵か何かで、そ
の水兵の服に似ている服を本能的に買ってしまった
もしくはただのド変態だった

おそらく前者の方だろう

一人でそんな事を考えていると、白い鳥が手紙を届けに来た
この世界では通信方法として鳥を使っている

鳥を使えばどれだけ離れた所にいる人にも手紙を届けることができる
手紙を見てみると村長からのものだった

内容は「イヤリングを届けて欲しい」というものだった

しかしイヤリングか

あの村長には似合わないものだな

村長というのは俺がよくいる村で村長をやっているダンカンという
老人だ

結構気さくな老人で、皆から慕われている

ただ、少々俺と気が合わない「ある人物」と親しいらしいってのが
どうも

「ある人物」については後々話していこう

手紙によるとイヤリングは、このティルコネイルの北にある

シドスネッターとかいう雪原に落としてしまったらしい

しかし北に雪原があるとは初耳だ

あまり寒い所には行きたくないところだが、村長からの依頼
仕方がない

釣堀で釣りをしよう

釣りの道具は雑貨屋に売られているので雑貨屋を訪ねる

雑貨屋に入ると金髪で色白の青年がこちらに気付いた

「ああ、中の人は男さん。いらっしやい」

雑貨屋の主人、マルコムだ

マルコムは若いながらも雑貨屋を経営しているしつかりした青年だ
他にも特徴があるけれど、特に重要なキャラじゃないので省略しよう

「今僕に対して失礼な事考えませんでした？」

「え、考えてないよ」

「ああそう」

カンのいい奴だ

「そんな事より釣竿欲しいんだけど」

「釣竿ですね。最近入荷したんですけど旅の人に妙に売れるんですよね」

そういうとマルコムは釣竿を取り出した

「お、いい釣竿だな。釣具の事とかよく知らないけど」

「そうでしょう。これはいい釣竿ですよ。釣具の事とかよく知りませんが」

変な会話をしながら釣竿を購入

「しかしこの釣竿どこから取り出したんだ？」

むしろこの店に商品置いてあるスペースとかあるように見えないんだが」

「細かい事気にしてるとハゲますよ」

「ハゲてたまるか」

川で釣りを始めてみる

釣り糸を垂らしてその場に座り込む

キレイな水が川を流れている

空には青空が広がり、水の流れる音がかすかに聞こえる

たまに爽やかな風がふき、近くの木から葉っぱのかすれる音が聞こえる

「ああ、平和だなあ」

「いえ、平和じゃないですよ」

「!?!」

気がつくとも俺は真っ白い空間にいた

円形のステージのような所に立っていて、何故か白い鳥が飛び回っている

さっき聞こえた声、そしてこの場所は。

ステージの中心がキラキラと輝きだした

その光の中からチャイナドレスを着た白髪の女性がクルクル回転しながら現れる

「ブラデイリか」

ナオ「マリオッタ」ブラデイリ

これがこの白髪の名前だ

最初に会ったとき、「ナオ」と呼べと言われたので「ブラデイリ」と呼んでいる

特に意味はない。ただの嫌がらせだ

ブラデイリは俺のように異世界から来た者を導く役目をしている

案内人が必要なくらい異世界からの旅行者は多いのだ

しかもその異世界からの旅行者全員に「貴方だけは特別です」みたいな事を言い

いいように扱おうとしているようだ

そういう俺も一度「特別」と言われたのだが、そこに気づき、この女には心を許していない

一体何を企んでいるのだろう

タレ目で肌が白く、無駄に乳がでかく、常に肌を露出する服を着ている

これがブラデイリの特徴だ

いかにも男が望みそうな典型的な外見をしている

話し方は妙におっとりしている

プレゼントされた服はどんなものでも必ず着る

下着のような服だろうが丈の合っていない冒険家の服だろうが着る

結果、妙に肌を露出させることになる

多分露出狂なんだろう

イヤですねー変態ってのは

「今私に対してすごく失礼な事考えてませんでしたか？」

「え、考えてないよ」

「そうですか」

「こいつもカンがいい」

「それより平和じゃないってどういうことだ？」

俺はさっきの言葉について聞いてみた

「夢を見たでしょう？」

「夢？」

「そう、背中に真っ黒い翼が生えてる奴が「こっちおいでー」とか言ってる夢」

もしかしてあの夢の事だろうか？

「見てません」

「ウソつかないでください」

「すいませんウソです」

つねられた

「その翼が生えた奴というのは女神様です」

「女神様？」

「そう女神様」

私の上司みたいなものなのですが、最近行方不明なんです

「行方不明？警察に捜索願とか出した？」

「え？いえ特には」

「出しといた方がいいよ」

「確かにそうですね。そうします」

「じゃ、俺はここらで失礼させてもらおうよ」

「そうですか。お疲れ様でした」

「ところでさっき上司の女神様の事「奴」とか言ってた？」

「言ってますよ」

変なこと気にしているとハゲますよ」

「ハゲてたまるか」

気がつくとティルコネイルに戻っていた

あいつ何のために俺を呼んだんだろう
とりあえずヒマだし村長からの依頼をこなしておこう

白群

寒い

クソ寒い

なめてんのかこの寒さは

というかこんな雪原にいるのになんで俺はセーラー服着てんだ

俺は村長の依頼でイヤリングを探しにシドスネッターという雪原に
来ていた

村長からの手紙によると、探してほしいというイヤリングはこの雪
原の雪だるまの中にあるらしい

ならば雪だるまを探せばいいわけだが、その雪だるまは意外と早く
見つかった

いや、見つかりすぎた

一面見渡す限りの雪だるま

ざっと見たところ50か60ぐらいある

なんでこんなに雪だるまがあるんだ

雪だるまのバーゲンセールか

最初は雪だるまを見つけたらそれを隈なく調べてイヤリングを見つ
けようと思っていたが

この数じゃあそうもいかない

片っ端から叩っ斬って見つけるしかない

雪だるまを斬りつけていったら雪が散らばって一層見つけにくくな
るかもしれないと思うだろうが

きつと斬りつけても雪だるまの形は変わらず、斬りつけた瞬間イヤ
リングが飛び出してきて発見という奇跡が起きるに違いない

というかそうなってんだよこの世界は

それにここにはコヨーテが出現するらしい
早く見つけないと少し厄介なことになるだろう

愛用のバスタードソード（6000Gold）を取り出し、まず
1つ目を斬りつける

見つからない

2つ目

見つからない

3つ目、4つ目、5つ目

10個目

コヨーテが物音に気付いて集まってきた
早いトコ見つけないと

20個目

コヨーテの数が増えていく
あと雪だるまを一心不乱に斬りつけてたらなんかテンションが上が
ってきた

30個目

コヨーテが気にならなくなってきた
それほどまでにハイテンション

雪だるまに「この秘孔が成功すれば貴様の筋力を何倍にもできるぞ」
とか言いながら

剣をぶっ刺して「ん？間違ったかな・・・」などとブツブツ言う
コヨーテがなんだかワイソウな奴を見る目でこちらを見ている

40個目

「媚びろ～～！！媚びろ～～！！おれは天才だ！ファハハハ！！」
コヨーテは完全に他人のフリをしている

あ、イヤリング出た
何事も無かったかのようにシドスネッターを後にする

「村長、イヤリング見つけたよ」

「おお、中の人は男か。いや見つけてくれた。寒かったろう」

どことなく高級そうな服を着た髪の長い長身の老人が低い声で答える
この老人がティルコネイルの村長だ

アミバ様と被ってるな

「今ワシの事髪が長いってだけで偽りの天才みたいだとか思わなかつたか？」

「え、思ってますんよ」

「そうか」

カンがいい奴しかいないのか

「そんな事よりなんで雪だるまの中にイヤリングなんてあったんですか」

「ああ、これか。これは元々わしの物じゃないのだ。

シドスネッターに行く途中、妙な建造物があっただろう？」

「建造物？あつたっけ？」

「あつたのだ」

「あつたのか」

「その建造物を見た友人がな、記念に雪だるまを大量に作ったそうだしその時にうっかりイヤリングを雪だるまの中に入れてしまったらしい」

「え？あの量の雪だるまを一人で？」

「本人によると頑張ったらしい」

「頑張りすぎだろ」

「ちなみにあの大量の雪だるまは王国文化観光庁に偉大なるドルイドとその弟子の墓と言う事にされたらしい」

ドルイドとは、わかりやすく言うと魔法がとっても上手い奴の事である

「ドルイドとんだとばつちりですね」

「ドルイドと言えば、これは噂なんだが

シドスネッターには家族を失ったドルイドが悲しさのあまり熊になつて隠居しているという話がある」

「隠居はわかるけどなんで熊に」

「シドスネッターで熊にあつたら親切にすればいい事があるかもしれないな」

「熊に親切つてどうやんの

そんな事より村長、雪だるまつて普通手で作りますよね」

「？ああ、そうだな」

「イヤリングつて耳につけるもんですよね

どこをどう間違つたらイヤリングが雪だるまの中に入っちゃうんですか？」

「つまらん事気にしてるとハゲるぞ。真ん中だけ残して」

「モヒカンになつてたまるか」

次の日の夕方、俺はシドスネッターに来ていた

もうこんな寒い所には来たくないと思つていたが、どうもドルイドの噂の事が気になつていた

少し進むと大量の雪だるまの残骸があつた

何があつたかしらんがまつたく酷い事をする奴もいたもんだ

雪だるまの残骸のある場所からさらに奥へと歩く

あたりはすっかり真つ暗になつていて

しばらく歩いていけると何か祭壇のようなものが見える

よく見るとその上に何かいる

人影

どうやら人がいるようだ

ローブを着た若い男のようだ

少しカールがかかった髪をしており、よく見ると眼鏡をしているよ

うだ

うつむいて何かブツブツ言っている

こちらには気付いていないようだ

「あの〜すいません」

「!？」

こちらに気付いたようだ

何か酷く驚いたようだ

「人・・・？なぜここに人が？どうやってここに来たんです？」

「え、どうやってって普通に歩いてだけ」

「結果があるはずなんですけど」

「結果？」

そういえばここに来る途中、雪だるまのあるあたりにムーンゲートのようなものがあつたような

ちなみにムーンゲートとは夜だけに作動するワープポイントのようなものだ

でっかい石が鎖につながれていて、その石が夜になると浮き、その下を通ると瞬間移動をする

最初見た時は何事かと思つたが、今じゃ見慣れたものだ

しかしあれ結果だとは思えないが

「来る途中にムーンゲートのようなものならあつたけど」

「そう！それです！それ結果です！」

結果だつた

「何故あの結果を通れたんですか？」

「さあ」

周りに誰もいないと思つたら、どうやら誰も通れない結果を張つていたらしい

「しかしなんでこんな人気のない所に結果を？」

「というかこんな所で一体何を？」

「そうですね、あまり話したくないんですが。」

実は昔・・・」

「あ、話したくないなら別にいいよ」

「いいから聞きなさい」

「はい」

本当は話したいらしい

「実は昔冒険してて負傷しましてね

そのせいでここにいないくはいけないのです」

「へえ」

「・・・」

「・・・？え？もしかして終わり！？」

「はい」

「いやそれじゃなんもわかんないよ！もう少し詳しく話してくれないと！」

「はあ・・・ところでこの寒い場所でそんな姿で寒くないんですか？」

「いや寒いよ！どうでもいいだろそんな事！」

こんなアホな会話をしていると周りが明るくなってきた

「ええい夜明けが近いじゃないか！」

「あ、確かに明るくなってきましたね

すみませんがマナハーブを持ってませんか？あればいただきたいのですが」

「マナハーブ？確かここに入っていたはず

あげるからちゃんとはどこにしているか話せよ」

道具袋に手をつ突っ込んでハーブを探す

「ああ、あったあった。ほらこれ」

次の瞬間、夜が明けた

急に目の前がピカツと光った

「うおっまぶしっ」

何が光ったんだろうか

朝日の光ではない
目を開けると目の前にいた眼鏡の男は消えていた
そしてなぜか熊がいた

嘲笑

なんだろうこの状況

俺確か眼鏡の男と喋ってたんだよな

でもなんででつかい熊と見つめあってんだろう

冷静に現在の状況を解析してみよう

目の前の人間が消えてかわりに熊がいる

こんな事がありえるのだろうか

まさかあの男は朝になると熊になってしまつとか？

いやそんな事は絶対にありえないな

もしあつたら目でピーナッツ噛んでやるよ

考えられる全ての可能性を配慮してこの状況を分析した結果

眼鏡の男があつた一瞬ですさまじいスピードでどこかに行き

熊がすさまじいスピードでどこからか出てきたという結論に行き着

いた

コナンのような完璧な推理だ。バーロー

となるとこんなトコに用は無いな。帰る

帰ろうとするとなんか服が引っ張られるような感じがした

後ろを見ると熊が服のソデを引っ張っている

なぜ熊がソデを引くんだ

「何か用？」

聞いてみたが熊が人の言葉を理解できるはずがない

が、熊が地面に何か書いている

マナハープくれ

マナハープ？

そついやあの眼鏡もマナハープがどうこうと言つてたな

何かあの眼鏡と関連性があるのだろうか
とりあえずマナハープあげてみるか
別にイジワルする必要も無いし、村長に熊に親切にしろとか言われ
たっけな

マナハープを差し出す
すると熊はそのマナハープを一口で食べた
地面に何か書いてある
超うめえ

「わざわざこんな事書くなよ！」
普通に突っ込んでるが、俺なんで熊と会話してんだ
冷静に考えてこんな事ありえない
しかし現に今起きている

というかこの熊は人の言葉を理解できるのか
「俺の言ってる事理解できる？」
熊が書く
できる

理解できるらしい
「でもわざわざ地面に書かなくても
文字書いてある看板出すとかでもいいんじゃないか？」
それ版権的に問題あるだろ
「確かにそうだ」

熊が何か地面に書いている
タルラーク
そう書かれているようだ
人の名前だろうか
「何コレ？」

村に帰って誰かにこれ聞いてみ
よくわからないが、この文字には何かあるらしい

村長あたりに聞いてみるか

「じゃ、俺帰るね」

バイバイ

来た道を戻り、村に帰る

村は暖かくていいな

そっぴり帰るもやっぱり大量の雪だるまの残骸を見た
まったく本当に酷い事をする奴がいたもんだ
人の痛みというのをわかるべきだよな

村長の家の方を見てみると昨日と同じ場所に立っている
というか毎日同じ場所に立っている

あれなんか意味あんのかな

「村長、一つ聞きたいことがあるんだけど」

「なんだね」

「タルラークって何」

「タルラークというところの消えた三戦士の一人のか？」

「消えた三戦士とは？」

「え、消えた三戦士の事を知らないのか？」

「ええまあ」

「えーマジ知らない!？」

三戦士の事知らないのが許されるのは小学生までだよー

キモイ

キヤハハハハハハ

なんだこのジジイ

「ところでタルラークがどうかしたのかね？」

急にマトモに戻りやがった

とりあえず今日出合った熊について話した

「熊が文字を書いたと？」

「ええ、そうなんです」

「ここを出たら広場に出る」

「？はあ」

「で、そこから北に行けばヒーラーの家がある」

「はあ」

「そのヒーラーに幻覚を見たかと相談して薬を貰いなさい」

「いやこれウソじゃねーよ！」

「わかったわかった」

君は疲れているんだ。そんな格好で雪原に行つたから力ゼをひいたのかも知れない

暖かくしてゆつくり休みなさい」

「チ、チクシヨー！」

猛ダツシュで逃走した

よく考えたら熊が文字書いたなんて話を誰が信じるんだ

しかし収穫はあつた

タルラクというのは消えた三戦士とかいうのの一人らしい

これについてはもっと詳しく調査する必要があるな

まず消えた三戦士というのはなんなのかと言う事を知る必要がある
物知りな人に聞けばなんなのかわかるかもしれない
とりあえず村長はダメだ

物知りか

そうだ、この村には学校があるんだ

学校にいる先生なら何か知ってるかもしれない

この村にある学校は基本的な戦闘方法を教えている
接近戦についてはレイナルドという中年ロン毛の先生が教えている
レイナルド先生は相当腕が立つらしく、素手でゴーレムを握りつぶ
したという噂だ

魔法戦に関してはラサという赤い髪をした若い先生が教えている

この先生はいい年して何故か制服を着ているというワケのわからない人だ

趣味だろうか

ちなみに俺はこの学校で一応一通りの事を学んだので、二人の先生とは顔見知りだ

その代わりそれなりのお金は取られたが

学校の門をくぐると巻き藁が大量にあるのが目に付く

これを使ってレイナルド先生は接近戦の攻撃方法を教えているいや、しかし懐かしいな

俺もこの藁をビシビシ殴ってたっけ

おっと、懐かしがってる場合じゃない

ここには情報を集めに来たんだった

周りを見渡してみるがレイナルド先生はいないようだどこかに出かけているのだろうか

教室の中に入ると薬品のニオイがツンとした

奥を見てみると黒い制服を着た赤毛の女性が何かを調べている

「ラサ先生」

「あら、中の人は男。ちょっと待ってて」

そういうとラサ先生は手に持っている試験管に入っている液体をフラスコの中に注ぎ始めた

怪しい色をした薬品が混ざり合っている

「ふう。で、どうしたの？」

「実は消えた三戦士について聞きたい事がありました」

「消えた三戦士ってあの有名な？」

「え、有名なんですか？」

「ええ、学校の授業で出てくるぐらいだからね
もしかして知らないの？」

「ええまあ」

「えーマジ知らない!？」

「三戦士の事知らないのが許されるのは小学生までだよー」

「キモイ」

「キャハハハハハ」

なんだこの教師

「ん？今ベビンさんいませんでした？」

ベビンとか村の銀行で働いているピンクの髪の女性だ

ラサ先生と友達で、お金とお金持ちと大富豪が大好きらしい

「気のせいよ」

「おかしいな。今一緒に笑ってたような」

「そんな事より三戦士の事だったっけ？」

「はい」

「いや、実はよく知らないのよアハハハ」

笑顔で答えられた

「ええ、さつき笑ってたのに」

「三戦士の事ならダンバートンのスチュアート先生が詳しいはずよ

以前、話しているのを聞いた覚えがあるから」

たらい回しにされた模様

「じゃあ、ダンバートンに行ってみることにします

それでは失礼します」

「じゃーねー」

ドアに手をかけた所でふとある事が気になった

「あ、そういえばラサ先生。それ何調べてたんですか？」

さつき調べていた怪しい色をした液体を指差して聞いてみた

「ああこれ？お味噌汁のダシだけど」

「ウソオ!？」

追憶

ジャガイモ畑が広がっている

消えた三戦士の情報を求めてダンバートンへ来ていた

ダンバートンは商業が盛んな街で、常に広場には沢山の店が開かれています

しかし最近の意味不明な文字と共に糸や皮が売られているのは何故だろう

広場の東の大通りから階段を上り、本屋を通り過ぎてからさらに階段を上ると学校が建っている

スチュアートがいる研究室にはさらに学校の中の階段を上らなくてはいけない

どんだけ階段好きなんだよ

階段フエチか

扉を開くと薬品のニオイが鼻についた

見るとローブを着た青年が何か粉を調合している
教師の間で薬の調合が流行っているのだろうか？

「すいませーん」

「え？ああ、中の人は男さんじゃないですか」

この粉を調合していた青年がダンバートンの魔法学校の教師、スチュアートである

教師なのになぜか生徒を取らずに魔法の粉とか売っている変な人だ
外見的特徴は・・・メガネをかけてる
以上

「今私についてすごい省略しませんでした？」

「え、してないよ」

「そうですか」

この世界の人間は人の心でも読めるのか

「ああ、そんなことより今日は聞きたいことがあって来たんですよ」

「聞きたいこと？効率的な瞑想の仕方ですか？」

「いやそんなんじゃないよ」

「実は消えた三戦士についてちょっと」

「消えた三戦士、というところあのティルナノイに行ったと言われるあの戦士達ですね？」

ティルナノイ

また新しい単語が出てきた

「ティルナノイ？」

「はいティルナノイです。知りませんか？」

「知りません」

「えーマジ知らない!？」

「ティルナノイについて知らないのが許されるのは小学生までだよ
ねー」

「キモイ」

「キャハハハハハ」

また馬鹿にされた

というかこれ流行ってんのか

それともエリンの住人にはシンクロニティが・・・

「ん？今アイラさんいませんでした？」

「え、いないよ」

アイラとは書店で働いている少女の名前だ

外見的特徴は・・・メガネをかけている
以上

「どうも脱線するなあ

そんな事より三戦士について教えてくださいよ」

「そうですね・・・言葉で表すのはちょっと難しいですね

そうだ、アレがあったな」

そう言うとスチュアートは研究室の奥のゴチャゴチャとガラクタが

置いてある所を探り出した

「ああ、あつたあつた」

スチュアートの手にはペンダントらしき物が握られている

「なんですかこれ？」

「これは三戦士の一人、タルラークの遺品のロケットです」

「遺品!？」

「そう、遺品です」

「その人死んだの？」

「とうか三戦士は全員死んでます」

「マジで!？」

どうやら消えた三戦士という人達は死んでしまっているらしい

なるほど、だから消えた三戦士なのか

その言葉を聞いた時、俺の頭に一つ疑問が浮かんだ

「でもなんで先生がそんな遺品を？」

「これ雑貨店とかで売ってますよ」

「マジで!？」

売ってるらしい

「有名な戦士の記憶を封印した品物は後世の為に大量に生産して残しておくんですよ」

「へ、へえ〜」

「ちなみにコレは1個980Goldで売ってます」

「安っ」

「コレを使えば三戦士について少しはわかるはずですよ

差し上げますよ」

「あ、ありがとうございます」

しかしこれどうやって使うんですか？」

「このように記憶を封印されているアイテムをメモリアルアイテムと言いますよ」

これを握ってメディテーションをするような感じで念じれば使うことができますよ」

「なるほど」
受け取ったロケットを握って早速やってみた
急に脳に衝撃が走り、意識が遠のいていった
「あ、そうそう、これを使うと意識が無くなるので立ったまま使う
と危険………」
そこまで聞こえると意識が完全に無くなった
言うの遅いよ

気が付くと俺はダンジョンにいた
妙に視点が高い
と言うより浮いているようだ
体もなんか半透明になっている
足元を見ると赤毛の男、ピンクの髪の少女、金髪のメガネが立っている

この三人が消えた三戦士だろうか？
ん？このメガネどこかで……

「しかしなぜ今更アルビなんだろうなあ
レイナルド先生は一体何を考えているんだろうなあ」
「もう、レイナルド先生のことをそんな風に言っちゃダメ！
考えがあつてのことなんだから！」
「まったく……女の子は若い男の先生に弱いからなあ……」
「ダンジョンへ行かせる目的は、仲間を探す方法を教えるためだと
思いますが」

三人が何か会話している
どうでもいいけどあの赤毛の男の鎧イカすな
どこで売ってるんだろう

「まあいいや
手っ取り早く攻略しようぜ」

うーん、都会の武器屋とかに売ってんのかな
いや、もしかしたら鍛冶屋に特別に作らせたのかも・・・

気付くと足元にいた三人が消えている

もうダンジョンの中に入っていったのだろうか

ええい、気の短い奴らだ

後を追ってダンジョンへ入っていく

と言っても浮いているので走って進んでいるわけではない
なんか前に進めとか念じると前に飛べるようだ

ダンジョンの奥に進むと大量のクモやネズミの死体が

これを全てあの三人が殺ったのだろうか

急いで後を追ってみると三人に追いついた

赤毛の男が鈍器を振り回すようにして剣を扱っている

周りのクモが木の葉のように吹き飛ばされる

ピンクの髪の少女が矢がネズミの体を撃ち抜く

メガネの手から走る稲妻がコウモリを黒焦げにする

なんだこいつらの戦闘能力は

一方的じゃないか

三人はどんどん突き進んでいく

巨大な鍵穴のついた扉がある

どうやら最深部についたようだ

扉の向こうから何かうめき声のようなものが聞こえる

「どうやらこの先には何かいるようですな

うかつにドアを開けると危険かもしれません」

メガネの男が気付いたようだ

「そうか、じゃあ開けるぞ」

赤毛の男が言う

アホかこいつ

「ちょ、ちょっと！」

メガネの男が焦って止めようとするが間に合わず赤毛の男が扉の鍵を開けてしまった

やはりアホのようだ

ピンクの髪の少女は我関せずと言わんばかりの顔でどっか見てる

鍵を開けた瞬間、扉を巨大な足が蹴り壊した

轟音と共にアルビの名物、巨大クモが飛び出してきた

三人に飛びかかるが、散らばって避けられる

「うおっ！なんだこいつ！」

赤毛の男が焦る

お前巨大クモ知らんのか

さて、どうやって三人がこの巨大クモに立ち向かうか見ものだな

赤毛の男が巨大クモを剣でぶん殴る

さらにピンクの髪の少女が矢を放つ

巨大クモ死亡

早っ

「ああ、驚いた。一体なんだろうこいつ」

「どうやらダンジョン全体に何か起きていますね

その影響でこんな巨大なクモが生まれたのかもしれない」

「変な事もあるものね」

「変な事と言えばちょっと前に妙な夢を見たっけな」

「妙な夢？どんなものですか？」

「あん？ええつと・・・黒い羽の付いた女がどっか暗いところに立ってて

私の所に来てくださって言ってんだ。

世界の危機がどうとか・・・」

黒い羽？

この赤毛の男、俺と同じ夢を見たのか？

「まったくルエリは夢の中でも女の人のことばっかりね」

「ハツハツハツハツハ」

なんだこのサワヤカナ奴ら

昔のホームドラマの人々か

「しかしダンジョンの異常化に世界の危機と言う夢・・・

どうも気になりますね。調べてみる必要があります」

メガネの男が真面目な顔で言う

「タルラークは心配性だな」

タルラーク？

ああ、このメガネの男はタルラークって言うのか

・・・

あつ

このメガネの男、確か雪原にいた・・・

と言う事はあの雪原にいたメガネは・・・！

急に意識が戻ってきた

どうやら床に横になっているようだ

「ああ、気が付きましたね。三戦士の事はわかりましたか？」

「スチュアート先生・・・？とりあえず三戦士の顔ぐらいは・・・

イテテ・・・！」

後頭部が何かに強打されたようにズキズキする

「なんか頭が痛い・・・まさかこれはメモリアルアイテムを使用した事による後遺症・・・？」

「いえ、中の人は男さんが意識を失った瞬間倒れて後ろにあった机に後頭部を強打したんです」

「ええ」

後頭部を触ってみたらコブができています

しかしあの雪原にいたメガネ・・・

アイツは死んだはずのタルラークなのか？

どうやらもう一度雪原に行く必要があるみたいだ

「ところでさっき調合してた粉は一体何ですか？

まさか味噌汁のダシじゃ・・・？」

「これですか？まさか、ダシじゃありませんよ」

「あ、そりゃそうですよね。アハハハハ」

「漬物を漬けるためのヌカです」

「ウソオ!？」

頭痛

初めて見たときは驚いた

あんな子供が結界を突破した事もだが、こんな寒い雪原で

魔法学校のものと思われる制服を着ていたのだ

外の世界とはもう関わりを持つまいと思っていたが、あの子にはどうしても聞きたいことが一つある

だから自分の名前を書き、もう一度来るように仕向けたのだ
そして意外と早く戻ってきた

「やはりまた来ましたね。どうやら私の事がわかったようですね」

「ああ、タルラークさん。一体どういう事です？アナタ達三戦士は死んだはずじゃなかったのですか」

「その前に一つ、聞かせてもらってもよろしいですか？」

「なんです？」

「その服、魔法学校の女子生徒用の服ですね？」

「そうらしいけど」

「なんでその服で頭にクロスフルヘルム被ってんですか」

「どうしてもこの事が聞きたかった」

「どう見てもこの服にこのヘルメットは不似合いだ」

「知らないんですか？今こういう兜が凄く流行っているんだよ」

「えっ！ウソッ！」

「いやホント。クロスフルヘルムはまだ人気が無いほうだけど」

「スリットフルヘルム、通称バケツ。パナッシュヘッドギアなんかは
凄い人気で」

「正装にはつき物って程になって持つてないとバカにされるくらい」

「私がここにいる間に外の世界では大変な事になっているようです
ね……」

アホだなあこいつ

ちよつと言つてみただけなのにホントに信じてるよ

まあバケツやパンナツシユが人気つてのは少しホントだけど

それが正装つてどんな世界だよ

魔界とか天界とかでもありえねーぞ

「そんな事より死んだはずのアナタが何故ここに？」

「ああ、その事ですか・・・」

昔、冒険していて少々ありましてね。私は怪我だけで済んだのですが、他の二人は恐らく・・・

その時の怪我の後遺症でマナが暴走しやすくなり、イウエカのおかげで世界にマナが満ちている夜は平気なのですが

昼間は定期的にマナハーブを食べていないと体が朽ちていくのです」

「マナハーブを？しかしマナハーブなんかを生で食べたら強力な毒素のせいで死んでしまうんじゃない？」

「ええ、ですから昼の間は熊に変身し、その状態でマナハーブを摂取しているのです」

「熊？じゃああの時の熊は」

「ええ、私です。最近はこの辺にもマナハーブが減ってきてましてねこの前は助かりましたよ。そういえばあの時のお礼を・・・」

何してるんですか」

「いや、目でピーナツを・・・」

「何でそんな事を」

「自分との約束が・・・まずい」

目でピーナツを噛んでもあんまりおいしくないという事が判明した

「ピーナツはもういいや
それよりタルラークさん。あんまり思い出したくない事もしれないけど

アナタの仲間だった赤い髪の剣士の見た夢についてちよつと聞かせてもらいますよ」

「赤い髪。ルエリの事ですね。ええ、かまいませんよ」

「どうも。アナタのロケットによってこの事を知ったのですがそのルエリさんという人は黒い羽が生えた女性に世界の危機がどうかという夢を見たんですね

実はその夢、私も見たんです」

黒い羽の女性

この話をした途端、タルラークの目つきが真剣なものになった

「黒い羽・・・あなたもその夢を見たのですか」

「一体あの黒い羽の女性は何者なんです？」

「あの黒い羽・・・あれは戦争と復讐の女神、モリアンです」

戦争と復讐の女神。聞いただけでゾっとするような響きだ

「女神は自分のいる場所、つまりティルナノイに来るように言っているのでしょうか」

そこに行つてはいけません。あそこは人間の行つてはならない場所なのです」

「しかしアナタ達三戦士はティルナノイに行つたと」

「人間が行つてはならないのです」

「一体ティルナノイで何が？」

「だから人間が行つたらダメなの」

「というかティルナノイって何」

「人間が行つてはいけない場所です」

「しかしアナタ達は現に行つたと」

「ええ、行きました」

「そこで一体何が？」

「ティルナノイは人間が行つてはいけない場所だと言う事がわかりました」

「ごめん、ちよつと混乱してきた」

「私もです」

二人して頭をかかえる

「とにかくティルナノイの事が知りたいのなら

永遠の地、ティルナノイという名前の本を読んでもください

その本にティルナノイについて詳しく書いてあります」

「そうします。なんかこれ以上聞いても混乱しそうですし

最後に一つ聞いてもいいですか」

「はい」

「怪我してるのにこんな所にいたら治癒速度が落ちるんじゃないですか？

ヒーラーの家とかに行つて治療を受けた方がいいのでは」

「私もそれを一度は考えました

しかしすぐに治療を受ける事ができない大きな理由がある事に気付いたのです」

タルラークは声を低くした

表情も暗くなっている

「理由、それは一体？」

「注射が怖いのです」

「注射！そうか・・・確かにその問題があつた

注射があつたのでは治療を受ける事はできない・・・！」

「マナハーブを食べ続ければいつかは治るんです

その時をゆっくりと待つことにしますよ」

「頑張ってください」

そうか注射か

あの悪魔の兵器の恐怖を考えるとあの場所にいる事はつなずける

本と言えばダンバートンだ

あの街には一応書店があるからな

というかあの街にしか書店が無い

みんな本読まない方なのだろうか？

書店は大通りの東にある階段を上つてすぐの場所にある

言ってみれば学校に行く途中だ

書店と言っても規模は小さく、

店も屋外に香港スターが落ちてきて突き破りそうな屋根の下に本を置いてあるというものだ

書店では店主のアイラがダンボール箱に入った本の整理をしていた

「すいませーん」

「はい、あらか中の人は男さん」

本の整理している手を止めて四角いメガネをかけた顔がこちらを振り向いた

しかしこのメガネ、どう見てもサイズ合っていないよなあ

目がメガネからはみ出てるもんな

「今日は本を探しに来たんですよ。永遠の地、ティルナノイって題名なんだけど」

「永遠の地・・・ああ、そんな本ありましたね。」

でもその本、人気無くて最近返品しちゃったんですよ」

「ええ、タイミング悪かったですね

まあいいや、どこに行けば買えるかわかりますか？」

「いえ、総販売店に連絡を入れれば在庫があるかどうかわかりますからね

在庫があればすぐ送ってもらえますよ。ちょっと待ってください」

そう言うとアイラはメモに何かを書き、それを白い鳥の足に結び付けて空に放した

「しばらくしたら総販売店から連絡が来ると思いますから。本が到着したら連絡しますよ」

「え、本当ですか。そりゃ助かります。じゃあ今日はこれで失礼します」

アイラにお礼を言い、立ち去ろうとした

が、次の瞬間

「あ痛っ！」

ゴン！という鈍い音と共に頭に強い衝撃を受けた

街中ではクロスフルヘルムを被ってないので、頭への攻撃はよーく効く

というか街中であんな格好してたら間違ひなく通報されちゃうからね
どうやら何か上空から降ってきたようだ

「きゃあつ！大丈夫ですか！？」

アイラが心配そうな顔をしてこちらにかけてきた

「あ痛ててて・・・なんか最近頭をよく打つな。一体何が落ちてきたんだろ」

頭をさすりながら落ちてきたものを拾う

落ちてきたものは本のようだ

「あ、これは総販売店からの手紙・・・」

アイラが落ちていた紙を拾ってそれに書いてある事を読んでいる

「えーっと、中の人は男さんの頭に落ちてきたソレ、注文した本みたいですよ

もう総販売店から送られてきたみたいですね」

「ええっ！早くないですか？」

「総販売店はハイテクなんです」

「ハイテクすぎるでしょう」

頭に降ってきた本をもって手ごろな木陰を探し

そこに座って頭に降ってきた本を開く

頭に直撃したのは頭にきたが、お詫びと言って本代をタダにしてくれたのはラッキーだった

あ、今俺うまい事言ったな

持っていたパンをかじりながら本を熟読する

なんか楽しそうな事が書いてあるなあ

・・・

読み終わった

この本によるとテイルノイというのは神の世界であり、死と病が

存在しないという楽園らしい

なんか良さそうな所じゃないか

夢の事とかを抜きにしても普通に行ってみたい所だぞ

タルラークは人間の行く場所じゃないって言うてたけど、どういう

ことだろう

これはもう一度会いに行く必要があるな

あそこ寒いからあんまり行きたくないけど

鉦山

またも雪原

最近ここにばっかり来ている気がする

ダンバートンとココとの距離は結構あるからあんまり往復したくないだよ

歩くとサクサクという雪を踏む音が聞こえる

夜の雪原はさすがに寒く、吐く息も白く見える

と言ってもクロスフルヘルムを被っているので、目の部分から白い息が出て行く

端からかなり不気味だろう

「タルラークさん、この本のことなんですけど」

そう言って永遠の地、ティルナノイを差し出す

受け取って本をまじまじと見ながら問いかけてくる

「どうです？この本を読んでティルナノイに行きたくなくなりましたでしょうか？」

「えっ、別にそんな事は。むしろ楽園っぽいから行ってみたいと思っただけ」

「え？」

意外そうな顔でこちらを見た

「この本にはティルナノイはこの世の地獄で行ったら間違いない死ぬって書いてあったでしょう？」

それが楽園っぽいんですか？」

「ええ、その本にはティルナノイは病気無いわ平和だわキレイだねーちゃんは沢山いるわで

この世の楽園だとか書いてあったんだけど」

「そんなはずは……」

タルラークは手に持っている本をペラペラとめくり始めた
そしてメガネがすっ飛ばぐらい驚いた

「ああっ！間違えた！！この本じゃない！勧めようと思った本のタイトルは

いい年してティルナノイとか言っていないでさっさと定職に就け（著：タルラーク）だ！」

「ええーっ！っ何だそのタイトル！間違いすぎだろ！
つてかそれ自分で書いた本だろ！」

手に持っている本を指差して必死の形相で叫ぶ

「いや、この本に書いてある事は全部ウソなんですよ！」

100%フィクションでティルナノイの正体は魔族の土地なんですよ！

そして女神はその美貌で活気溢れる冒険者を利用するんですよ！」

「そ、それこそウソだろー！」

一息つく

「・・・信じられないという表情をしていますね。ふふふ・・・」

「何かツッコけてんだ」

「ではこれを差し上げましょう」

そう言うとタルラークはよくわからない文字が書いてある灰色っぽい紙切れを取り出した

「これは？」

「これは魔族の使う通行証です。これをバンホールにある鉾山のダンジョンに捧げてみてください

そうすれば私の言っている事が真実だとわかるはずですよ

一人だと危険ですので仲間か、もしくは友達と共に行くといいですよ」

「仲間か友達がない場合はどうすればいいの」

「え、普通いるでしょう」

「蹴り殺すぞ」

一晩ぐっすり眠った後、バンホールへと出発した
バンホールはダンバートンからさらに南に行った所にある鉱山の町だ
途中の道、通称ガイレフには盗賊コボルトが出るという噂があるの
で、あまり行きたくない所だ
さらにその盗賊コボルトを襲って盗品をさらに強奪している
全裸に両手剣を持った人間の集団が出るという噂も聞いた事がある
本当かどうか知らないが、もし本当だったら盗賊よりそっちより怖
いな

ガイレフを半分ほど行った所でコボルトをちらほら見た
持っている武器に統一性がなく、ナイフを持っている奴もいれば斧
を持っている奴もいる
あれが盗賊だろうか
しかしこちらを見ても襲ってくる気配がない
目の前を通っても無視されるだけだ
一体これのどこが盗賊なのだろうか

無事バンホールに到着

近くにある鉱山のダンジョン、バリダンジョンでは豊富な鉱脈があり
大量の鉄や、ごくまれに金なども発掘されるので、沢山の鉱夫や鍛
冶屋が暮らしている

町の所々から鉄を叩く音や、鉄を溶かしている音が聞こえる
しかし簡単な格好の鉱夫に混ざってこの制服を着てると目立つなあ
バリダンジョンでの戦いは恐らく長く、厳しいものになるだろう
戦い抜くには充分な物資が必要になるだろう

というわけで酒場に来た
酒場には黄色い服を着た少年が店の掃除をしている
カウンターの方にはヒーロードレスを来た葡萄色の髪をした女性が
帳簿をつけていた

カウンターの奥には大量のグラスやジョッキが置いてある

おそらく夜には沢山の人でにぎわうのだろう

今は昼なので客らしき人影はない

まず腹ごしらえをするか

別に食わなくても餓死するわけじゃないけど、疲れやすくなるからね
それに美味しいものは食べておきたいじゃないか

「すいませーん、とりあえずブリフネウイスキーを水割りで、それ
と鶏肉の料理を」

「はいはい只今・・・ってお嬢ちゃん、未成年にお酒は出せないの
よ」

お嬢ちゃん？ああそうか、俺の事が

俺外見は魔法学校の制服を着た12歳ぐらいの少女だったっけ

成年でもいきなり昼からウイスキーいくのはどうかと思うが

つてか背低すぎるんだよ

肩の高さとカウンターの高さがほとんど同じってどういうことだよ

とりあえず俺でも食べれるものって事でパンとミルク、それと鶏の
ササミの料理が出された

パンとかササミならわかるけどミルクで

だいたいね、大の大人（？）がミルクなんてもんを飲むわけ・・・

超うめー

「そうそう、保存のきく食料って売ってます？」

ミルクを飲みながら聞く

「ええ、一応干し肉ぐらいならあるけど」

「それを10枚ぐらいもらえますか」

金貨袋から金貨を取り出して食事代と干し肉代をカウンターの
上に
置・・・

ええい置きにくい。なんでこんなにカウンター高いんじゃ

酒場を出る

しかし干し肉10枚は買いきりのような気もする
いや、ダンジョン内では何が起きるかわからないから用心するに越
した事はないね

バリダンジョンの祭壇にタルラクから貰った灰色の紙切れを捧げる
すると次の瞬間、目の前の風景が変わり、ダンジョン内に入る事が
できる

どういう理論でこんな事が可能なのかわからないが、皆こつやって
ダンジョンの中に入っていく
たぶん魔法の力によってなんかしてるとかだろ

戦いに備え、腰のバスタードソードを抜く
邪悪な気配が肌を刺すほど感じる
どうやら大量の敵がいるようだな

だが、俺のバスタードソードで一刀両断にしてやるぜ
階段を降り、いざ戦いの地へ！
.....

あれ？何もいない
普通のダンジョンならゴブリンや凶暴な猛獣が目をぎらぎらとせて
うるついているのに

たぶん奥に集まっているんだろ
トロッコ用の線路に沿って奥へと進む
.....

おかしい
全然敵がない
一体どうなっているんだ

30分ほど歩いた
でかい錠前がぶら下がっている扉が目の前にある
ココまで来るのに戦った回数、0
まさかここが最後の部屋という事はないよな

鍵は持っていないので錠前につながっている鎖を切り、扉を蹴破る轟音と共に扉が開く

部屋の真ん中に黒いローブを着た何者かが後ろを向いて立っている
「・・・人間よ・・・ここはお前達が入ってはならない所だ・・・
なぜ魔族のメダルを守る者の安息を邪魔するのか・・・

お前達は女神の意志にまでも逆らうつもりか・・・」
黒いローブの者が暗い声で語りかけてくる

「魔族のメダル？貴様何者だ？」

「我は女神の意思により存在するブラックウィザード！

女神モリアンの名にかけ、お前達人間に不幸・・・うおっ！！」
振り返りながら名乗り何かに驚いたようだ

「どうした！何を驚いている！」

「お、お前人間か！」

「見てわからんか！」

「じゃあその格好は何だ！」

「この制服にクロスフルヘルムの事か！これは人間の神聖なる戦闘の衣装だ！」

「う、ウソをつくくなっ！」

ちっ、バレたか

「くそっ！その格好で通路の部下達の目を誤魔化し、ここまで来たという事か！」

「通路の・・・？そう言えばここまで来るのに誰もいなかったぞ
一体どういうことだ？」

「何・・・？」

アゴに手をあて何かを考えている

「ああっ！しまった！今日はみんな休みを取って海に行っていたんだ！」

「海！？」

「おのれ！さてはこの隙を狙って攻めてきおったな！汚いぞ人間！」
「知るか！」

「問答無用！女神モリアンの名にかけ、ぶち殺してやる！」
来る！

バスタードソードを低く構え、戦闘態勢をとる

.....

あれ、来ない

ブラックウィザードを見ると両手を前に出し、下を向いて何かブツブツ言っている

あ、炎の玉が一つ出た

まだブツブツ言っている。あ、炎の玉がでかくなった

スタスタと歩いてブラックウィザードに近付き、おもむるにバスタードソードで殴りつける
スココンツといい音がする

「ぐわっ！今詠唱中だ！もう少し待て！」

「待てるかボケが！」

ものすごい勢いでブラックウィザードをボコボコにする

「ハアツハアツ・・・人間にしては中々やるではないか」

「お前一方的に殴られてただけじゃないか」

「ここはひとまず退かせてもらう。さらばだ！」

そう言うとブラックウィザードは光に包まれ、消えた

何がしたかったんだ

ブラックウィザードが去ると共に部屋の奥の閉ざされていた扉が開かれた

どうやら奴の魔力が何か扉を閉ざしていたようだ

奥の部屋には嚴重な鍵が付いている宝箱が一つ置いてあった

宝箱の外は木で作られている

バスタードソードを振り下ろして宝箱を叩き壊す

鍵の意味ねーな

宝箱の残骸をどかしていると、見た事がないメダルが見つかった

メダルの裏には何か変な文字が書いてある
もしかしてコレがタルラークの言っていた女神が魔族に協力して
いるという証拠だろうか

残骸を調べたが他には特に何も無いようだ

部屋にはもう外に脱出ができる女神像が置いてあるだけだ

持ってきた干し肉完全に無駄だ

海に行っている連中が戻ってこないうちに外に出る事にする

そう言えばあのブラックウィザード、何か気になることを言ってい
たな

女神の意思がどうか

さらに気になる事といえばこの格好が魔族の目を誤魔化すとか

まさかこの格好にそんな効果が？そう言えばガイレフでも盗賊コボ
ルトに無視をされたような

確かめてみるか

兜を脱いだ状態でガイレフに行く

「むっ！人間！」

気付かれた

これ魔族の格好だったのか。魔族って一体

盗賊コボルトが手に持った斧を構えている

せっかく闘る気になっていたので敵は海行ってるわブラックウィザ
ードはアホだわで戦い足りないと思っていた所だ

いいだろう、相手になつてやる

バスタードソードを低く構える

「みんな！人間だ！人間が出たぞ！」

え？みんな？

岩の後ろ、木の陰、穴の中からコボルトが30匹ぐらい出てきた
俺は全力で逃げた

過去

「何が書いてあるかわかった？」

「もう少し待ってください」

雪原の祭壇の上でメガネをかけた青年が辞書を片手にメダルの裏を見ている

バリダンジョンで見つけたメダルの意味

これをタルラークならわかるかもしれないと思い、またも雪原に来ていた

「そういえば今日はクロスフルヘルムを被ってないのでね」

「ここに来る途中に盗賊コボルトの集団に襲われてね

逃げる途中にうっかり落としてしまったんですよ」

30匹ものコボルト。あんなのに来られたら逃げるしかない

命あつての物種と言うが、やはり高価な物を落としたとあつてシヨツクは大きい

そんな気持ちを振り払うように頭を振る

頭の上に積もっていた雪がカレントレッドの髪からはらはらと落ちていく

「よし、メダルに書いてあつた意味がわかりました

このメダルにはドウル・ブラウ・ダイラム・セノンと書いてあります」

「ドウル・・・それはどういう？」

「我々の言葉に訳せば、女神よ、あなたの魔力が私にやどりますように」

と言う意味です。この言葉は女神の祝福を受けた神聖な武具に書いてある言葉と全く同じなのです」

タルラークが手に持っていた辞書をパタリと閉じる

「あのブラックウィザードが言っていた女神の意思がどうこうって事さらにこのメダルに書いてある文字の事を考えるとやはり・・・」

「ええ、女神は我々の世界に魔族が侵攻する事を許しているのです。まだ信じられませんか？」

俺の考え込んでいる表情を見て、タルラークが質問をしてきた。本当ならとんでもない事だが、メダルに魔族が勝手に文字を刻んだという可能性も無きにしも非ず

「うーん」

「確かにこれだけではいまいち信憑性に欠けるでしょう」

実はもつと決定的な証拠があるのですが、その証拠が何処かに行つてしまっていますね」

「決定的な証拠？」

「ええ、探すのには少々時間がかかると思います」

その間に一つ頼まれ事を引き受けてもらえませんか？」

「かまいませんが」

「実は・・・」

タルラークがため息をつく

何か表情が曇っているようだ

「これは聞いた話なんです、ダンバートンには女性の司祭がいるそうですね」

「ダンバートン・・・ああ、確かに」

「その司祭にダンジョンの黒いバラについて聞いてみてください。もし、その言葉に何かしらの反応があれば、その女性は私の知り合いかもしれません」

そうだとしたら、その女性も女神についての疑惑を知っているはずですよ」

「黒いバラね・・・わかりました。聞いてきましょう」

「お願いします」

背を向け、雪原を出て行くとしたが、ふと足を止めた

「ところでタルラークさん」

「はい？」

「干し肉食べます？」

「えっ、いえ結構です」

バンホールで買った大量の干し肉を減らそうと試みたが、失敗した
ダンジョンの黒いバラ

確かこの言葉はラビダンジョンに住んでいると言われている上位魔
族、サキュバスを指す言葉だ

サキュバス、こいつは優れた容姿と独特の色気を使い、男を魅了し
て生気を吸い取り殺すと言われている恐ろしい魔族だ
そんなゲスな殺し方をしゃがる奴と司祭が一体どういう関係が？

まさかあの司祭が実はサキュバスとか？

いや絶対無いな。魔族が人間の聖堂の司祭をする理由が無いからな
もしそうだったら目で干し肉食ってやるよ

「クリステルさん」

「あら、中の人は男さん。ボランティアに来ていただいたのですか
？」

黒いライミラク教団の司祭服を着た、ワインレッドの目と髪をした
女性がこちらを見ている

この女性がダンバートンの聖堂の司祭、クリステルだ

「いや、実は今日は一つ聞きたい事があって来たんです」

「なんででしょうか？」

「黒いバラについて」

黒いバラ。この単語を聞いた瞬間、クリステルの顔に恐怖と驚きの
色が現れた

が、すぐに表情が戻った

「その話は聖堂のボランティアの方々が戻ってきて、報告が済んで
からまた話しましょう」

「ボランティアね・・・やっぱり今日も男の人が多いんでしょう」

聖堂では常に聖堂の仕事を手伝ってくれる人を募集していて

労働の賃金のかわりに祝福ポーションを渡している

クリステルは客観的に見て美しい顔立ちをしているので、男のボランティアが後を絶たない

どんな感じかわかりやすく言うと・・・

ガンマンのコインをパクってジューズ買ったり、メモリ不足のデイルーロボの首を後ろ前に付けたり

命の危険を身を挺して守ってくれたイケメンの股間蹴り上げたりする強い女ディーラーに少し似ている気がする

あれをちよつとやわらかい表情にすればこうなるんじゃないだろうか

「今、私についてホント一部の人にしかわからないネタで解説してませんでした？」

「いえ、してませんよ。毎回毎回子供相手に上がり牌の取り合いで負けないでください」

その日の夜、雨が降る中、再び聖堂を訪ねた

聖堂の中にはたくさんの長椅子が置いてあり、奥には聖堂にはつき物の、祭壇のようなものがあつた

クリステルはその祭壇の後ろに立っていた。顔が蝋燭の光で照らされている。その顔には暗い影が見える

俺がクリステルの横に来ると、クリステルは口を開き始めた

「一体・・・黒いバラについて誰に聞いたんですか？それにどこまで知っているのですか？」

目にはあきらかに怯えの色が入っている

黒いバラという言葉にこんな反応を示すとは思っていなかったのだからこちらとしても意外だった

「え、いや、実はタルラークと言う人にアナタに黒いバラについて聞いてみると」

「タルラーク!?」

クリステルは目を見開いて聞き返した

外では雷が唸っている

「タルラーク、今タルラークと言ったのですか？」

クリステルは俺の肩をつかみ、ガクガクと揺さぶってきた

「え、ええ、はい」

「まさかあの消えた三戦士と言われているタルラークですか!？」

「ええ」

「あなたはあの人に会い、話したのですね!？」

「はい」

「ああ・・・ああ・・・。そうですか・・・タルラークが生きていたのね!」

「そ、そうです。それより揺さぶるのをやめて」

頭をカクカクさせながら言う

「あ、すいません。興奮してしまっついで」

クリステルの手から開放された。揺さぶられすぎて頭がボーっとする

「ところで黒いバラとアナタは一体どういう関係が？」

クリステルは、はあとため息をつき、天井を見上げた

「私は、元々はサキユバスの一族。魔族と呼ばれる者なのです」

「ええっ!」

「フフ、そうは見えませんか?今は神の恵みにより、人間になれたのです」

「神スゲー」

「タルラークの居場所を教えてくださいませんか?」

「えっ・・・しかし・・・」

クリステルはステンドグラスの方に顔を向けた
なんとなく悲しそうな表情をしている

「そう・・・あなたも私を信じられないのですね・・・。私が以前
魔族だったという事実を明かし・・・何をしてるんですか」

「いや、ちよつと目で干し肉を・・・まずい」

目で食べたなら美味しくないものリストに干し肉が追加された

「では、これを受け取ってもらえますか?」

そう言うところクリステルは茶色い小袋のようなものを取り出した

「これは？」

「これは私の過去を封じたメモリアルアイテムです。これを見れば私の事を信じていただけだと思います」

「メモリアルアイテムですか・・・わかりました。ちょっとその長椅子を借りますよ」

ちよつと前にメモリアルアイテムを使ったせいで頭を強打したからな今回はそんなことが無いように長椅子の上に横たわって小袋を握り、目を閉じた

レンガでできた壁に、冷たい石の床が広がっている

どうやらここはラビダンジョンの最深部のようだ

どこからか透き通るような歌声が聞こえる

歌声のする方を見ると、黒い片足の布がないスカートに、肩が露出するデザインの上に

胸元から肩、腕にかけてタイツのようなものを着けている、ワインレッドの髪と目をしたサキュバスが歌っていた

あの髪と目の色は、確かにクリステルのものだ

しかし、目つきが司祭のクリステルの元気そうな目とは違い、眠そうな目をしている

あの服で雪原に行ったらかなり寒そうだな

「・・・聞いてた？あなたのために作った歌よ」

クリステルらしきサキュバスの視線を辿ると、あのメガネ、タルラークが立っていた

「人間を惑わすために作った歌を聴きたいとは思いませんね。そこをどいてもらいましょうか」

お、なんだ？なんか男らしいぞこのタルラーク

「・・・あら、そう？あなたがここを訪れるのも、もう5回目ね」
サキュバスが少し悲しそうな目をする

というから回とか来過ぎだろ

どんだけラビダンジョン好きなんだこのメガネ

「今回が最後よ。今まではずっとあなたには負けっぱなしだったけど、今度こそ勝ってみせるわ

・・・もし私が勝ったら、あなたを愛することを許してもらおうわ」
サキュバスの口からなんか凄い言葉が飛び出した

ストーカーですかアンタ

タルラークはその言葉には答えず、黙ったまま手から炎を出した
そしてその炎をサキュバスに投げつけ・・・いや違う

炎を手に纏わせ、そのままサキュバスに殴りかかった

紙一重で避わすサキュバス。手に持った剣で間合いに入ったタルラークに斬りかかる

その刃を炎の手で受ける。剣を掴み、力任せに敵ごと投げる
宙で一回転し、着地。駆ける。

手から炎を消し、氷の矢を作り出す

氷の矢がサキュバスに襲い掛かる。横に跳び、避ける。氷の矢が床にぶつかり砕ける

駆けながら左手に雷を集め、撃つ

餓えた狼のように襲い来る雷を雷で撃ち落とす。薄暗いダンジョンに眩い光が起きる

光からサキュバスが飛び出す。十字に斬りつけるが、空を斬っただけだった

さらに斬りかかろうとする手を蹴り上げる。剣が宙を飛ぶ。タルラークが後ろに跳躍した

飛んだ剣を奪い、駆け、斬りつける。首元のチョーカーのみが切れていた

辺りがシンと静まり返る

なんだ今の戦い

この二人こんなに戦えたのか

というかタルラーク。お前魔法使いのくせに武道派すぎるだろ

剣を捨て、静寂をタルラークの声が破る

「あなたの剣に殺意が無いのと同じく、私もあなたを害する気はないのです。そこをどいてください」

剣が床に落ちる音が響く

「・・・本当に勝ちたかった・・・そうしたら、あなたが私の心を受け入れると思っていた・・・」

サキュバスが俯いて、震える声でそう言った。肩が小刻みに震えている

タルラークは戦意を失ったサキュバスに目もくれず、奥へと歩いていった

誤解

ステンドグラスから光が入ってきている

外から鳥の鳴き声が聞こえる

どうやらあのまま寝てしまったらしい

体の上にかかっている薄い毛布を取り、長椅子から降りる

聖堂の外に出ると、クリステルがいつものように立っていた

「あら、中の人は男さん。おはようございます」

クリステルがこちらに気づき、振り向いた

「おはよう。なんかあの後眠っちゃったみたいだね」

「ええ、ずいぶん深く眠っていましたね。最近疲れることが多かったのですか？」

「色々な所を走り回ってたからね」

クリステルは慈愛に満ちた微笑を浮かべている

昨夜見たあの艶っぽい表情をしたクリステルと同一人物とはとても思えない

ん、ちょっと待てよ

何にも知らない人がこれ見たら昨夜エロい事してたと思われるじゃねーか

「昨日のアレは、本当にあった事なんですか？」

「ええ」

「タルラークが妙に武術に長けてたんだけど、アレもホント？」

「彼は拳闘と柔道の達人なのです」

「まるでアルサーヌ・ルパンですね」

「これで、私を信じていただけですか・・・？」

私はタルラークに危害を加えるつもりはありません。

ただ、彼がどう過ごしているのかが知りたいのです……」
「わかりました。信じましょう。」

タルラークは今雪原で熊になりながらマナハーブをかじって生きて
いるのです」

クリステルが変な目でこちらを見ている

「そうですか……やはり信じていただけないようですね」

「ええっ!？」

どう過ごしてるのか教えたのに

「ならばせめてタルラークに私の話をしてください。そして会いた
いと……話したい事があると……」

「え、いや、別に居場所ぐらいいは……」

あ、ダメだ。完全に自分の世界に入っている

この状態では何を言っても聞いてくれない

雪原

「あ、中の人は男さん。司祭には会えましたか？」

タルラークが顔を上げ、話しかけてくる

「ええ、確かに女性の司祭がいましたよ

司祭の名はクリステル。彼女はあなたが過去に倒したサキユバスで
す」

クリステル。この名前を聞いたタルラークは上を向き、白い息を吐
いた

「やはり、あのクリステルでしたか。聞いた話は本当だったようで
すね」

「あ、その事について一つ聞きたいと思っただけです」

「为什么呢？」

「ここって俺以外の人は来ないんだよね？誰からダンバートンに女
性の司祭がいると聞いたんですか？」

「ああ、その事ですか。実は昼間は暇なので熊の状態を外をうろつ
いているのです」

「安静にしてるよ」

「で、たまたまダンバートン周辺を徘徊していた時
クリステルは俺の嫁と眩きながらリンゴの木を叩いている人を見ま
してね

もしやと思つて今回の事を頼んだのです」

「世の中には怖い人がいるなあ」

「そうそう、そのクリステルが会いたいと言つてましたよ
あとタルラークは昼間は熊になつてマナハープ食つてるつて言つた
ら嘘だと思われたよ」

「そうですか・・・」

あとその話しても普通の人は嘘だと思ひますよ」

「事実なのに」

「事実なんですけどね」

話を戻す

「どうするんです？クリステルさんに会いに行きますか？」

タルラークは何か考え込んでいる

そして何かを決心したような表情をし、こちらを見た

「わかりました。まずこの本を受け取ってください」

タルラークは黒い表紙の分厚い本を取り出した

普通の本の3冊分はありそうな本だ

「これは？」

「これは魔族の言葉で書かれた本です。

この本には恐らく魔族に関するかなり重要な事柄が書かれているは
ずなのですが

あいにくページ数が多いのと、難しい魔族の言葉で書かれていて翻
訳しきれないので

恐らく魔族のクリステルならこの本を翻訳できるはずですよ。この本
を翻訳するよう頼んでみてください」

「なるほど、わかりまし・・・」

本を受け取りかけて気付いた

「えっ！？会いに行くんじゃないんですか！？」

「会いに行きません」

「なぜ！？」

「私はこのドルイドの祭壇の魔力が無いと魔力がえらいことになって死ぬからです」

「死ぬんじゃないあ、しょうがないな」

ダンバートン聖堂

「あつ、中の人は男さん！タルラークはなんと行ってしまったか？」

「この本を翻訳してほしいと」

「この本は・・・確かにタルラークの持っていた本です」

「へえ、なぜわかるんです？」

「ここに名前が書いてあるからです」

そう言つてクリステルは本の裏表紙をめくつて見せた
あ、確かにタルラークつて黒インクで書いてある

「で・・・タルラークは私に会つてくれると言つてましたか？」

「いえ、会わないけど本の翻訳をしると言つてました」

この言葉を聞き、クリステルは強いショックを受けたようだ

「えっ・・・なぜです？なぜ私に会つてくれないと？」

「実はタルラークは怪我をしてまして、魔力が暴走しやすくなつて
いるようです」

で、今いる場所を離れると魔力が暴走して魔法が尻から出て死ぬ危険があると」

クリステルがまた変な目でこちらを見ている

「翻訳しません。帰ってください」

「ええっ！？」

雪原

何で俺何往復もしてるんだろう

なんか腹立ってきたぞ

「どうでしたか？翻訳の方は引き受けてくれましたか？」

「いや、それが会わないと言つとシヨックを受けたようで、翻訳を断られました

あとあなたがここから移動すると魔力が暴走して魔法が尻から出て死ぬ危険性があると言つたら嘘だと思われたよ」

「そうですか・・・

あと別に魔法が尻から出て死んだりしません」

「そうなの？」

「そうなの！」

何怒つてんだ

「仕方ありません。一つお願いしてもいいですか？」

「ダメです」

間髪入れず断る

「ありがとうございます。ではまずテイルコネイルのメイブン司祭を尋ねてください

そして預けておいたものを引き取ってきてください」

「話聞けこの野郎」

テイルコネイル

こんな素直に頼まれごと聞くなんて俺親切だなあ
表彰されてもいいくらいだ

聖堂に入り、メイブン司祭に用件を話す

「あれですか。あれにはもう魔力が残っているとは思えませんが・・・」

司祭は白い髪をした老人で、顔の所々に皺が出ている

司祭はしばらく考え事をして、やがて何かを思いついたように顔を上げた

「そつだ、この件はラサ先生に頼んでみましょう。詳細はこちらで伝えておきますので」

そう言うと司祭は紙に何かを書き、鳥につけて飛ばした
わざわざ鳥使わんでも俺にメモとか渡しゃいいのに

「ところで司祭。タルラークの話をして驚きませんでしたね
知ってたのですか？」

「ええ、実はあの祭壇と結界を作ったのは私です」
「マジで！？スツゲ」

学校

「・・・と言うわけで来ました」

「ふん。メイブン司祭の頼みね・・・なんでこんなものが必要なのかな？」

「あ、実はそれ俺が司祭に頼んだんです」

「えっ？キミが？へえ」

ラサ先生がニヤニヤしている

「ど、どうしたんですか」

「いやいや・・・」

それより実はアレを育てるには祝福ポーションが必要なの。持つてる？」

「うん」

道具袋からポーションの入った小瓶を取り出す

小瓶を受け取るとラサ先生は薬草が詰まった棚から枯れた葉の付いている花の茎のようなものを取り出した

それを底の浅い金属の皿に置き、その上から祝福ポーションを注ぐ

「こうして3分待つ」

「カップ麺みたいですね」

祝福ポーションに浸かっている茎を見てみると、少しずつ祝福ポーションを吸い込んでいき

萎れていた葉や茎がどんどん瑞々しくなっていく

「おお、乾燥ワカメみたい」

「この黒いバラは魔力が無くなると枯れちゃうけど、こうすると魔

力を再び吸い込んで花を咲かせるのよ」

「へえ〜」

1分ほどで茎の先から黒いつぼみが実り、3分経つとキレイな黒いバラが咲いた

ラサ先生はそれを皿から取り、軽く振って水気を切った

「キレイでしょ・・・？黒いバラ。赤い色があまりにも強くて、黒く変色しちゃうの」

「へえ〜黒く・・・」

そういえば黒いバラと言えばサキユバスを指す言葉だよな。

サキユバスと何か関連性があるのかな

「ところで・・・」

黒いバラを俺に渡しながら、ラサ先生は再びニヤニヤし始めた

「なんでこんな貴重な花を探しているのかな？」

「えっ・・・それは」

タルラークに持ってこいって言われて取りに来たんだよな

クリステルに頼み事をするために必要なものだろうから・・・

あ、そうか。これプレゼントする気なんだ

で、あの二人はたぶんデキてるから・・・

「えーっと、恋人にプレゼントするために必要なんです」

「まあ、そうなの？ウッフ、おませチャンね〜」

ラサ先生がすごくニヤニヤしている

1秒後、すさまじく誤解される発言をしてしまった事に気付いた

「ああっ！違う！違うんです！これは俺じゃなくて知り合いがプレゼントに使うのであって！」

慌てて弁解する

しかし逆効果で、やはりニヤニヤしながら

「照れちゃって。ウッフッフ」

などと言われる

「チクショー！」と叫びながら学校を飛び出す

なんでこんな目にあわなきゃならんのだ
何もかもあのメガネのせいだ。おのれ
大体何回も俺をおつかいに出しおつて

「オラア！黒いバラじゃ！」

持ってきた黒いバラをタルラークに突き出す

「ありがとうございます。ここまでしてくださるなんて……。」
タルラークの落ち着きっぷりがなんかムカつく

「ではもう一つ願いを聞いてください

このバラを……ダンバートンのクリステルに渡してくださいませ
んか」

「ゴッドハンドスマアアッシュ！」

「うわらば！」

タルラークに痛烈なボディブローをかます

一撃で落ちたようだ

気絶したタルラークを袋詰めにし、全力で走り出す

ダンバートン聖堂

「オラア！」

タルラーク入りの袋をクリステルに投げつける

「ぶっ！なんですか、いきなり」

鼻を押さえながらクリステルが鳩が豆鉄砲食らったような顔をする

「お届け物です。あけてみ」

「え、一体なんですかこれは」

クリステルが袋を開ける

「タッ、タルラーク！」

「驚きました？」

「そりゃ驚きますよ！」

タルラークがこの騒ぎで気がついた

「ん……ここは？」

「ダンバートンだよ」

「えっ？・・・クリステル!?」

タルラークがクリステルに気が付いた

さーてこれからどうなるのかな

「タルラーク。一体どうしてここに・・・」

「実は・・・あなたにこれを渡しに」

そう言うとタルラークは黒いバラを取り出した

こいつよくとつさにそんなセリフ吐けるなあ

「これは・・・」

クリステルは黒いバラを見ると大粒の涙を流し始めた

「あなたはあの事を覚えていたのね・・・そしてあの歌の事を・・・

」

「ええ、そして私はあなたの事を忘れていた事など一時もありませんでした」

そう言いながらタルラークはクリステルを抱きしめた

俺、今ならこいつ殺しても罪に問われなと思う

ところで

「あの〜話がイマイチ読めないんですけど。その黒バラには何の意味が？」

「ああ、居たんですか」

タルラークが振り向いた

こいつ、いつ殺そう

「ええと、クリステルが元魔族と言う事は知っていますね」

「うん」

「実はこのバラは昔、クリステルがプレゼントしてくれたものなのです

そして黒いバラには情熱的な愛という意味が込められているのです」

「へえ〜」

「さらに黒いバラには媚薬のような効果があります」

ドルイドの修行をした私や、元魔族のようなクリステルには効きませんが」

「へえ、だから黒いバラにはサキュバスって意味が……」
ふと俺は学校での発言が自分で思っていた事以上に大変な事だったと気付いた

体中から血の気が引いていくのを感じる

「どうしました？顔が真っ青ですよ？」

「ああ、いや……」

もうティルコネイルには行けないかも知れない

泥酔

一気に飲み干し、コップをカウンターに叩きつける

「うっ、もう一杯！」

「ダンナ、そろそろ止めといた方がいいですぜ」

タルラークがコップに注ぎながら言う

「これが飲まずにいられるっかってんだよ」

俺は再びコップを空にし、崩れるようにカウンターに伏せた

「おせっかい焼いたせいで、ティルコネイルじゃ俺は恋人に媚薬使ったって噂になってんだぞ！」

銀行じゃベビンに『あら、媚薬さん。いらっしやい』とかニヤニヤしながら言われたんだ！

だいたい恋人なんか居ないっちゅーねん！アホか！」

カウンターをベシベシと叩く

「まあまあ、人の噂も75日と言いますし、すぐに忘れられますよ」

コツコツという音が聞こえる。クリステルが来たようだ

「お待たせしました。こちらが翻訳済みの本……何してるんですか」

本の翻訳を頼んでから3日が経った

翻訳が完了したという知らせがあったので、ダンバートンに来たのだが

来た時ちょうどボランティアの時間だったので、聖堂内で遊んでいたと言っても媚薬とか言われたのは本当だ

「ああ、待ちくたびれてすっかり酔っちまいましたよ」

コップをつまんでプラプラさせながら、ろれつが回らない口調で言う
「ミルクでどうやって酔うんですか。だいたいタルラークまで何し

てるんですか」

「え、いや、ちょっと空気に流されて……」

「翻訳が終わったんですね。厚い本だったから大変だったでしょう。」
「急に素面に戻らないでください。とりあえず前半だけですが翻訳が完了しました」

クリステルから本を手渡される
手にずっしりとした重量感を感じる

「しかし・・・翻訳しながら読んでいたのですが、この本の筆者は人間に深い恨みを抱いているようです・・・
一体何があったんでしょう」

本をペラペラとめくり始めた

そこには「もう人間とか世界を破滅に導くから呪い殺すわ」など、人間に対する恨み言がさまざましい勢いで書かれていた
まるで死ね死ね団のテーマみたいだ

「な、なんだこりゃ。ホント何があったんだこの人」
「どれどれ、ちょっと見せてください・・・。うわっホントですね。何があったんでしょう」

タルラークがお茶を飲みながら本を読む

「そっぴや筆者名とか無かったんですか？」

「ああ、確かありましたね。マウラス・グイディオンとか」
その言葉を聞いた瞬間、タルラークが口から茶を噴出した
「うわっ！汚ねっ！」

噴出された茶を高速で避ける

「マ、マウラスですって！？本当ですかそれは!？」

「え、ええ。確かにそう書かれていました」

クリステルはタルラークの剣幕に驚きながら答える

「何か知ってるのか？」

「ええ、マウラス・グイディオン」

魔族との戦争で人間側を勝利に導いた英雄・・・そして
タルラークは一息つき、唇を動かし始めた

「私の師匠でもあり、私の友達を死なす原因を作った一人です」

閃光と共に雷鳴が轟き、窓に大粒の雨を叩きつける音が響く

「あれ、さっきまで晴れてなかった？」

「気のせいでしょう」

マウラス・グイディオン

人並みはずれた知力と判断力、強大な魔力、それに脅威の身体能力を併せ持ち

味方から奇跡の魔術師と呼ばれ、英雄視されていた人物

それがこの本の筆者らしい

「奇跡の魔術師・・・」

「戦場で数々の奇跡を起こしたため、そう呼ばれるようになったらしいのです」

「まさか難攻不落と呼ばれて、何度攻撃を仕掛けても攻略できなかった要塞を

新兵ばかりの半個艦隊で味方に一人の犠牲も出さずに攻略したとか？」

「え、特にそんなことは」

「あ、違うのか」

沈黙

「もしかしたら・・・」

タルラークが口を開いた

「ティルコネイルの村長、ダンカンさんがこの事について何か知っているかも」

「村長が？」

「ええ、村長も魔族との戦いの英雄で、稲妻鷹と言われたほどの弓使いですから」

何かあったのか知っているかもしれません」

「え、あの村長そんなカッコイイあだ名があったの？」

いつものんびり鳥の世話をしている村長が稲妻鷹

いまいちイメージが沸かない

「しかしティルコネイルかぁ。例の事もあるし、あんまり行きたくないなあ」

「まったく媚薬なんか使うから」

「お前のせいだろ！だいたい俺使ってねー！」

3人でティルコネイルへの道を歩いていた

タルラークもクリステルも、本の事が気になるらしく同行することにしたらしい

「ところでタルラーク」

歩きながら振り向かず話しかける

「なんですか？」

「確かケガしたせいでマナハーブ食べないと魔力が暴走して溶けて死ぬんだよね」

「？ええ、昼の間はマナハーブを食べてないと。あと溶けません」

「今夕方だよ。で、もちろんさっきまで昼だったよね」

「そりゃそうでしょう」

「なんで死んでねーの？」

タルラークが石のように固まった

2、3秒後、思考が戻ったようだ

「え？」

「ええ？」

「もしかして、治ったんじゃない？」

「いや、ちよつと待つてください。まさか」

タルラークが簡単な詠唱を始めた

直後、手の上に小さな火の玉が現れた

「魔力が戻っている！」

火の玉を握りつぶし、タルラークが叫ぶ

「嘘！マジで!？」

「これならまた魔族と戦えます！」

「そりゃ心強いや！ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

「おめでとう！タルラーク！」

3人とも緑豊かな草地で踊り狂った

ティルコネイルについた頃にはすっかり夜になっていた

「ハアハア・・・なんで3時間も踊り続けてたんでしょう」

「ハアハア・・・なんで誰も止めないんだよ。汗びっしょりだよ」

「ハアハア・・・はしゃぎ過ぎましたね」

3人とも踊りすぎて息が上がっている

「とりあえず今日は休もう。踊りすぎて疲れたし」

「そうですね。夜に訪ねても村長さん迷惑でしょうし」

「そういえばさつき踊り続けていて気付いたんですが、ずっと雪原でのんびりしてたんで

すっかり体力が落ちているようです。まだ昔のようには戦えませんが、

「ええ、さつきの3時間は一体何を祝ってたんだ」

川の近くにある村の宿で部屋を3つ取り、それぞれ部屋に入っていた

部屋には鳥の模様の絨毯がしいてあり、暖炉には火が入っていてパチパチと音を立てていた

窓からは夜の闇に染まった川と、無数の星が輝く夜空が見える

まずは汗を洗い流す為に浴室へと向かった

浴室には壁から伸びている細長い管がぶら下がっていて、そこに二つの四角い石がついている

この二つの石はエレメンタルを精製した魔法石で出来ており、左の石に触れる事によって魔力が発動し

貯水所のポンプに圧力をかけ、細長い管まで水を送る事ができる

左の石には炎のエレメンタルを精製して作られているので、石の角度により炎の魔力の出力を調整し
管を通っている水を瞬間的に湯に変える事ができる
いやー魔法って便利ですねー

心地よい熱さのお湯を頭からかぶる事によって気分が爽快になっていき、同時に思考が元に戻っていった
今わかってるだけの情報を整理してみる

人並みはずれた知力を持っている男がただ恨み言を綴る為にあんな本を書いたとは思えない

もっと別の意味があつたはずだ。それは何か。魔族の兵の士気を上げるためだろうか？

まだ翻訳されていない後半部分に真意が書かれているのだろうか
それと俺の見た黒い羽を持った戦争と復讐の女神の夢の事もある
女神の事について指一本触れてないが大丈夫だろうか？

そういえばブラデイリは女神の部下とか言ってたな
と言う事は奴は戦争と復讐の使途って事か？だいたいそんな予感はしていたが

それに村長が稲妻鷹と呼ばれていたほどの戦士って事も気になる

ああ、なんか色々考えていたら頭痛してきた

今日はもう寝よう。そして明日村長に色々聞こう

浴室から出て髪も乾かないうちにベッドに倒れこんだ

目を閉じて全身の力を抜くと、心地よいまどろみに包まれた

離反

下の広場には活気が溢れており、にぎやかな話し声が聞こえてくる
パン屋からはパンを焼く香ばしい匂いが漂ってきている

タルラーク、クリステル、そして俺の3名は村長を訪ねた

「村長」

「おや、媚や・・・中の人は男ではないか」

「今媚薬って言いそうになりませんでした？」

「え、いやそんなことはないぞ」

我々3人は、魔族の言葉で書かれた本を差し出し、それについて話
した

「この世を救った英雄、マウラス・グイディオンが・・・」

ダンカンが信じられないと言ったような表情でつぶやく

「特にこの後半あたりの死ね死ね団のテーマみたいになっている所
奇跡の魔術師とまで言われた英雄がこんな情けない文章を書くはず
がないだろう」

「あ、確かに」

納得してしまった

「しかしですね、私にはマウラス・グイディオンが魔族側について
という理由に心当たりがあるのです」

タルラークが一步踏み出して喋りだす

「心当たり・・・ソレはいったい何かね？それと君は？」

「あ、申し送れました。私、消えた三戦士の一人で氷雪の呪術師と
呼ばれているタルラークと言う者です」

氷雪の呪術師！！？

「ほう、君があのだイルナノイに行つたと言われる氷雪の・・・私
は稲妻鷹のダンカンだ」

「ちょ、ちょっと待った！」

思わず割って入る

「氷雪とか稲妻とか・・・そのダサ・・・いや、その称号みたいなのは何なの!？」

「ああ、熟練した戦士はその戦い方によって二つ名が与えられるんですよ」

「誰から!？」

「国から」

「国!？」

熟練したら国からそんなの与えられて、名乗らなきゃいけないのか

それ熟練しない方がいいんじゃないか？

「と言う事は俺も経験を積んだら二つ名が与えられちゃったりするのか?」

「たぶん」

「どんなのになるんだろ」

「さあ・・・クロスフルヘルムの変態とかじゃないですか?」

「何そのイジメ」

ん、待てよ。確かタルラークにはヘルメットは紳士の証とか嘘こいたよな

タルラークの方を見て、その目を見て鋭い刃のような戦慄を覚えたこいつ、アレが嘘だったと気付いているツ!?

一体誰が・・・まさかクリステルがツ!?

「まずはこれを見てください。ここに書かれている絵こそが私がこの本を持っていた理由です」

タルラークが取り出したのは例の魔族の言葉で書かれている本を取り出した

その本を開き、翻訳がされていない後半部分の何かの挿絵が載っている部分を指差した

そこには鎖につながれた異形の生物の絵が書かれていた

背には土で汚れたような色をした羽が生えており、肩からは4本の

腕が伸びている

顔と思われる所には裂けた巨大な口のみがあり、そこからは鮫のような鋭い牙が並んでいる

ダンカンはその絵を見てハツとする

「まさかこれは・・・」

「そう・・・グラスギブネンです」

グラスギブネン。聞いた事がない名前なので、タルラークにそれは何かと尋ねてみる

「グラスギブネン・・・それは昔、強大な魔力を持つ魔人によって作り出された恐ろしい魔法生物です

四本の腕で扱う巨大な剣は山を切り裂き、口から吐く光は世界を焼き尽くすと言われています」

「すげー怪物だな」

「昔の偉人の手によりグラスギブネンは破壊されました。

しかしその魔人の記録と魔人に匹敵するほどの魔力があればグラスギブネンの復活は可能でしょう

そしてそれほどの魔力を持っている魔族は今の所いません。

もし存在していたらその魔力によって人間に再び戦争を挑んでいるはずですから」

話を聞いて俺は手を顎に当て、全ての情報を整理してみた

世界を滅亡されるほどの力を持った怪物

復活させるための魔力

そしてこの著者と載っている絵

女神からの夢を使った警告

脳に雷のような衝撃が走り、複雑に絡み合った情報が直線に並んだ
「そうか・・・タルラーク、あなたはこの本を何らかの方法で手に入れ

魔族がグラスギブネンを復活させ人間に再び戦争を仕掛ける気だと推測した

しかし、古代の怪物であるグラスギブネンを復活させるのは現在の魔族の魔力では不可能だ

ではこの本は何を示しているのか？それを知るために本の翻訳を依頼した

その結果、意外な人物の名前が浮かび上がってきた。その名はこの世を救った英雄、マウラス・グイディオンのその名を聞いて全ての疑問は氷解した

顎にやっていた手を下げ、話を続ける

「自分の昔の師であり、奇跡の魔術師と呼ばれた男の魔力ならグラスギブネンの復活は可能なはず

何があつたのかは知らないが、過去にその男に友を二人殺され、自身も重傷を負わされた

この事実からしてマウラス・グイディオンの魔族側に付いている事は子供の目からしても明白だ

本に書かれていた名前、過去の事件、そして唯一復活に使える魔力を持っている人物

これらの事柄があなたがマウラス・グイディオンの魔族側に付き、グラスギブネンの復活に関わっていると確信した理由だ

さらに俺、さらにあなたの友達の赤毛の剣士が見た黒い羽の夢は、その事実気付いていた女神が警告を発し、復活を阻止してほしいと頼んでいたんだ

どうです、違いますか？

クルリとタルラークの方に振り向き、問いかける

「え？全然違いますよ」

意外そうな表情であつさりと答えるタルラーク

「えええっ！！？」

「ほらこの次のページの絵を見てください」

タルラークが指差した先を見ると、先ほどの怪物の絵の足元が拡大して載っていた

その絵をクリステルとダンカンも覗き込む

「足・・・？」

「いや違います。ここを見てください」

絵の端にはローブを着込んだ威厳のある口髭を生やした白髪の老人と派手な装飾がしてある物々しい黒い鎧をつけている戦士らしき人物が肩を組んでにこやかな笑顔を浮かべている

肩を組んでいない方の手にはピースサインが作られている

「この仲良さそうな二人は？」

「こっちの黒い鎧のは、魔族軍司令官で、魔族最強の戦士、ダークロードと呼ばれている男です

で、こちらのローブの老人。これが奇跡の魔術師マウラス・グイデイオンです」

「えええええっ!!!？」

三人揃って驚愕の声を上げる

「どうです？完璧な証拠でしょう？」

「確かに・・・」

「これはやはり・・・」

「こりゃ決定的だなあ・・・」

「マウラス・グイデイオンが人間が裏切った事実については証明されたけど

でもなんで裏切ったんだらうなあ」

俺が気になった事をそのまま口から出した

「それなんですよね。この本に理由が書いてあると思ったのですが、しょうもない事しか書いてありませんでした」

「まったく、何でこんな本出版したんだ」

「さあ？売れると思ってたんじゃないんですか？」

「出版した方もした方だよな。大金出してこんな本刷るとかアホか」
「金持ちの考える事はよくわかりませんね」

俺、タルラク、クリステルがテキトーな事を喋っている間、ダンカンは俯いて何かを考えていた

そして「そういえば・・・」と、何かを思い出したかのように顔をあげた

「昔、マウラス・グイディオンの名が書かれたトルクが紛失物として届けられた事があつたな

それを見れば理由がわかるかもしれんな」

「トルク・・・？あ、もしかして」

「そう、恐らくメモリアル・アイテムだろう」

「だろう・・・って事はもしかして実際に封じられた記憶を見てないの？」

ダンカンが眉を歪ませてこちらを見た

「そりゃそうじゃろう。紛失物を勝手に使うわけにはいくまい」

「そうですね。それが社会人の常識つてものですよ」

「まったくダメですねえ」

なんかみんなから非難されてつい「ごめんなさい」と謝ってしまった

紛失物を保管してある倉庫からトルクを探してくるので、その間家の中でくつろいでいるように言われたので

遠慮なく3人で暖炉前の絨毯の上で「ウヒョヒョヒョヒョ、上質の絨毯は肌触りが違うぜ」とか言いながらゴロゴロしていた
しばらくするとダンカンが家の中に入ってきた

くつろぎ過ぎだろ、という顔でこちらを見ている。その手にはトルクが握られていた

「あ、それが例のトルクだね」

上体を起こして話しかける

「あ、ああ」

「じゃあ早速見てみようか。こっち持つてきて」

ダンカンが何か納得がいけないという表情をしているが気にしない
「ところで、これ複数人でも見れるもんなの？」

「ええ、各人がそれぞれ触れていれば何人でもいけますよ」

絨毯の上にトルクを置き、それを中心にして4人で放射線状にうつ

伏せに寝転び、人差し指でトルクに触れた
知らない人が見たら何かの宗教かと思われそうだなあと思いながら
瞑想を開始した

動機

所々にある松明で照らされている壁が赤くぼんやりと光っている。その光で部屋が赤黒い色をしているように見え、その色を見ていると流血を連想し、嫌な気分に限る。

この赤い空間に本に載っていた奇跡の魔術師、マウラス・グイデオンは立っていた。

石をも貫きそうな鋭い眼の先には鎧の騎士が数人立っている。

鎧の胸部分の隙間から覗いている魔力の球体と、兜の奥に見える暗闇から

その騎士は魔性の者に創造された命を持たない鉄の塊だと窺える。

騎士の一人が暗闇の底から声を発した。

「マウラス・グイデオン、ここにいましたね。さあ、私達と一緒に帰りましょう」

「邪魔をするな亡霊甲冑。私の邪魔をする奴は神とて許さん。退け」
マフラーと呪文の書かれた帯のついたローブを着た魔術師は低い声でそれに答える。

「そうはいきません。あなたを連れて帰るのが我々の任務です。抵抗するなら実力行使も・・・」

先頭の騎士がそう言い終わる前に、魔術師は跳躍し騎士の目の前に迫っていた。

身構える隙も与えず炎を纏った手で鎧の胴体部を貫く。

隣の騎士が剣を抜き、襲いかかる。その剣を素手で掴み、握力を込め砕く。

武器を失った騎士に蹴りを放つと鎧が砕け散った。

砕けた破片が後ろの騎士達に鉄の雹のように飛びかかり、ほぼ同時に3体の穴の開いた鉄の塊が崩れ落ちる。

残りの騎士が一齐に剣を抜いた。魔術師は振り向きながら素早く口を動かして僅かな詠唱をした。

その瞬間、魔術師の周りには5つの雷球が現れ、残りの騎士達の方
向に完全に向き直ると同時に雷球を投げつけた
同時に5体の騎士の心臓部に穴が開き、雷の高熱により鎧が溶けは
じめた

残りの敵を視界に捉えると、背後から何者かの声が響いた

「マウラス、やめるのだ！これ以上意味もなく戦う必要はない！」

その声が届くと同時に、残っていた騎士達は剣を収めた

声が飛んできた方向へ振り向くと、派手な装飾を施した黒い鎧を身
に着けている戦士が立っている

が、体ごと強く振り返ったので、その勢いで手に纏っていた炎が飛
んでいった

「あっ」

「えっ？・・・たわばっ！！」

炎の塊が黒い戦士の悪魔を模った兜に直撃した

派手な音を立ててすっ転ぶ

「い、いきなり炎を投げつけなくても・・・」

黒い戦士は直撃を受けてへこんだ兜の部分を撫でながら起き上がった

「す、すまん。ワザとやったわけでは・・・」

マウラスは急におきた事故にうるたえている

「・・・なぜ私達の言う事を信じてくれないのだ・・・？人間の領
土に帰ればお前は処刑されるのだぞ・・・」

その言葉を聞き、マウラスの眼に鋭い光が戻った

「なぜ、私が帰ったら死ぬと言い切れるのだ！？」

「・・・お前は私が見せる真実に・・・耐えられる自信はあるか・・・
？」

その言葉は相手を気遣うようなものではなく、挑戦的な意味が込め
られていた

「暗黒の主君よ・・・私をみくびるな」

マウラスが鋭い眼をいっそう細めた

「ならば・・・これを見るがいい・・・」

そう言うと暗黒の君主と呼ばれた黒い鎧の戦士は、手の上に小窓ほどの大きさの黒い闇を出現させた

それを見た者はその部分だけ空間が切り取られたような錯覚を覚えた黒い闇の中心から闇が晴れ、何かが見えてきた

燃えている家が見える

闇の中心を見ていたマウラスの顔が段々驚愕と恐怖の混ざった表情に変わっていく

鉄を砕くマウラスの拳が黒い戦士の兜に叩きつけられた

派手な音を立ててすっ飛ばす

「あべしっ！」

「貴様！どうということだ！なぜ私の家に火を付けた！こんな事をして私がおまえらの言いなりになるとでも思ったのか！」

野獣の目をしたマウラスが拳を震わせながら怒りの声を上げた

「ち、違っ！おちつけ！これは我々のやった事ではない！よく見るのだ！」

黒い戦士がさらにへこんだ兜の部分を押さえながら慌てて言った

その言葉を聞き、マウラスが闇の中心を再び睨みつける

燃える家の前に立っている松明を持つローブを着た者を見つけると、憤怒の表情がまたも驚愕の表情へと変わる

「ま、まさか・・・これは人間の兵士・・・」

「そうだ、これは全て人間の仕業だ。おそらく貴族・・・ひでぶっ！」

マウラスの拳が再び黒い戦士の兜を捉えた

派手な音を立てて転がる

「なぜだ！なぜ人間が私の家を燃やすのだ！私の妻や娘はどうなった！」

「我々が駆けつけた頃には人間達は去っていて、残っていたのは燃えつきた残骸と、大人と子供の焼死体が二つだけだったよ

かろうじて燃えるのを免れた草木の記憶から、この映像は抽出され

ただ」

黒い戦士は肩膝をつきながら話を続ける

「お前は活躍しすぎたのだ。敵に囲まれた軍事拠点から民間人と負傷兵をたつた一人の損害も出さずに救出し

5000の兵を優れた策略でその半数の兵で葬り去り、重要拠点の防衛にことごとく成功・・・」

黒い戦士はふらふらと立ち上がりながらマウラスの輝かしい戦歴を述べ始めた

「兵だけではなく、民までもお前を英雄だの現世にあらわれた戦神だのと持ち上げ始めた

それを権力を持った貴族どもは恐れたのだろっよ

お前が民の支持を受け、後方でぬくぬくと暮らしている貴族どもを権力の座から下ろし、自らが最高権力者になる事をな」

「わ、私は権力など欲した事など無い！」

マウラスの拳がまたも黒い戦士の兜を打ち抜いた

派手な音を立てて頭から壁に突っ込んだ

「そんな事、貴族どもは知った事ではないのだよ。

自らが恐怖の念に駆られた。だからお前を殺そうとしたのだ。燃やされた家と、お前の背中に射られた矢がその証拠だ」

黒い戦士は頭を壁に埋めたまま、冷静な声で言った

その姿は正に不気味の一言であった

黒い戦士が壁に必死に力を込め、頭を引き抜いている間、マウラスはずっと俯いていた

その眼には怒りの炎が静かに燃え盛っていた

「お前は妻子を殺した貴族どもを許し、その元へ帰り大人しく処刑されるつもりなのか？」

ようやく頭を抜いた黒い戦士が肩にかかった石の破片をはたき落としながら言う

「許さん！絶対に許さんぞ！奴らは私の手で殺してやる！」

復讐鬼と化したマウラスが震える拳を振り上げ、怒りをぶちまける

「その通りだマウラスよ！」

新たな声が響いた

声の先には俺が夢で見た黒い翼を持つ戦争と復讐の女神が立っていた

「お前は家族を奪った奴らに復讐の鉄槌を下すべきだ！」

「そうだ！奴らはその罪をその身で償うべきなのだ！」

「つまり!？」

「貴族の連中は皆殺しだ！」

「もう一声！」

「人間は皆殺しだ！」

「そうだ！」

マウラス、黒い戦士、黒い翼の女神、さらにその周りの亡霊甲冑たちは一斉に拳を掲げた

「ぶっ殺せ！ぶっ殺せ！ぶっ殺せ！ぶっ殺せ！ぶっ殺せ！」

焚き木がパチパチと燃える音が聞こえ、目の前には高級な絨毯の織維が無数に見える

どうやらトルクに封じられた記憶はあれで終わっていたらしい
起き上がる俺たち4人は、全員言葉を失っていた

やがて、タルラークが沈黙を破る

「まさか・・・師匠にあんな事があつたとは・・・」

「必死に戦ってきた代償が裏切りと愛する人を失う事だなんて・・・」

┌

クリステルが悲哀に満ちた目をしてつぶやく

なぜか殴られまくっていたカワイソウな黒い戦士や、後半の明らか
におかしいテンションを言及しようと思っていたのだが

どうもそんな空気ではなかったので「まったくだ、アレじゃ人間を
裏切って魔族側に付こうって気になるよ」と、同調しておいた

ダンカン一人が納得がいかないという顔で俯いていた

「おかしい・・・」

「何がです？」

「本当にあんな事があったのなら分かる。だが・・・」

「呼吸置いて、ダンカンから予想外の言葉が飛び出した

「マウラスの妻、シラは生きているのだよ」

「何 ツ！！？」

三人の驚愕の合唱が家に響いた

報告

数々の戦いで勝利をおさめ、過去の戦役の最高の功労者である奇跡の魔術師と呼ばれた英雄。マウラス・グイデオン

その卓越した能力を恐れられ、当時の権力者であった貴族達の手によつて闇に葬られそうになり、妻子を殺された

裏切りに烈火の如く怒り狂い、人間を皆殺しにすると誓い、魔族に協力することに決めた

約10年前の話である

しかしその殺されたはずの妻は生きているという

「それは本当なのですか？」

タルラークの問いかけにダンカンには威厳のある髭を僅かに揺らめかせながら頷いた

「うむ、これを見たまえ」

そう言うとダンカンは木の引き出しから取り出した四角い白い紙を取り出した

「これは？」

「今年来た年賀状だ。差出人の名前を見てみたまえ」

ここにも年賀状を出す習慣あったのか。しょうもない事を考えながら差出人の名前を見てみた

シラ・グイデオン

「この名前って・・・」

「そう、マウラスの妻の名前だ」

「ええっ！？ちよつと見せてください！」

俺から年賀状をひつたくるように奪ったタルラークは、そこに書かれている名前を見て「本当だ」とつぶやいた

「どうだ？生きているだろう」

「確かに・・・」

「それだけではない。マウラスの家が燃やされたという事自体、存

在しないのだ」

「えっ！？辛うじて生き残ったとかじゃなくて、それ自体無かったの！？」

意外な真実に俺は驚きの色を隠せなかった。タルラーク、クリステルの両名も驚いていた

「うむ・・・というか知らなかったのか？」

「え、私はその頃は魔法の修行してましたし」

「私はダンジョンにいました」

「俺存在してねーや」

やれやれ、と言わんばかりの表情でため息をついたダンカンが話を続けた

「よく考えてみたまえ。戦役の功労者を殺して世論が黙っているわけがないだろう」

「急にそんな真面目な意見言われましても」

「それにあの黒い戦士が草木から記憶を抽出したと言っていたが、冷静に考えてそんな事できるわけないだろう」

そ、そうか！冷静に考えて草木から記憶を抽出するなんて非現実的な事ができる訳がないッ！

あまりの規模の大きいハツタリに騙されたいたッ！なんとという迂闊ッ！

「やってくれるぜ、あの黒い奴ッ！してやられたわアッ！」

「いきなり何言っとなるんだ君は」

「とりあえずマウラスが生きている事はわかったんだ。奥さんにその事を知らせておこう」

「それがいいですね」

タルラークが同意するとダンカンは机に向かって、先ほどわかった事実の要点だけを走り書きし

それを伝書鳩の足にくくりつけ、晴れた空へと飛ばした

「返信がくるまで少し時間がかかるだろう。その間お茶でも飲むか

ね？」

「え、いいんですか？」

「遠慮する事はない。好きな物を言いなさい」

「じゃあ私はマナハーブティー、砂糖は入れずにブランデーをティースプーン2杯分入れてください」

「トウモロコシ茶をお願いします、イメンマハブランドのものを」

「低温殺菌のミルク、ダンバートン牧場産のね」

「コーヒー3つか。よし分かった」

「えー」

ダンカンが頼まれた飲み物を盆に乗せて運んできた

盆の上には黒いコーヒーの入った4つのカップの他に紙切れが一つ置いてあった

「その紙は？」

「シラからの返信」

「来るの速っ！」

その手紙にはたった一言だけ書いてあった

すぐにそっちに行くよ

「ずいぶん簡単な手紙だなあ

行方不明になつてたダンナが生きてる事がわかったんだからもっと喜んだり驚いたりすると思うんだけど

それになんでこっちに来るんだろ・・・」

手紙を眺めながら差し出されたコーヒーをすすする

「にがい」

「好き嫌い言つてると大きくなれませんよ」

「コーヒーででかくなつてたまるか」

カップの中の黒い液体をじつと見てみると、ある考えが一つ頭に浮かんだ

「ねえ村長」

「なんだ？」

「手紙に何書いたの？」

「え、確か見たことをそのまま書いたのだが」
しばしの沈黙

「いきなり行方不明のダンナ見つかって、魔族の仲間になってたら普通シヨック受けないか？」

再び沈黙

「ああっ！」

「ああっ！じゃない！」

シラ・グイディオオンが住んでいるモイトウラからこの村までは馬車を使っても三日はかかる

その三日の間に各自シラが取り乱した場合、落ち着かせる方法を考える事にした

タルラークは雪原に戻り、考えをまとめるついでにちょっとした探し物をするらしい

クリステルは聖堂に戻り、ボランティアの人と相談するついでに本屋で古人の知識を集めるらしい

村長は今までの人生で培ってきた知恵を総動員し、方法を考えるらしい

俺は・・・他の三人が考えてるから別にいいや
それより俺には他に考える事がある

マウラス・グイディオオン

この名を見た瞬間から

超魔闘機　グイディオオン

という単語が頭から離れないのだ

一体どんな兵器が内臓されているんだ。合体とかするのか。超魔法エンジンとかで動いてんのか

必殺技はやっぱり魔法が関係してくる技なのか

目をつぶり、頭を抱えて考え込んでいると体が浮くような感覚に襲われた

目を開くと目の前には真っ白い空間にいた

周りには鳥が飛んでる

ここは……

背後に光の粒子が集まる感触を覚えた

後ろを振り向く。目の前には見覚えのあるタレ目

「そのタレ目は……キッド・ホーラか！」

「俺はタレ目じゃない！黙れドマンジユウ！お前を倒して次からは俺が主役だ！」

「そう簡単に死ぬるかよ！アニメでさ！」

「って何やらせるんですか」

この空間の主、ナオ・マリオッタ・ブラデイリがタレた目を僅かに目をつり上げらせて怒ったような表情をした

「のるなよ」

おっと、それよりブラデイリ、相談したい事があるんだけど」

「なんですか？」

「必殺技の名前は灼熱剛拳とエレメンタルブラスターのどっちだと思っ？」

「はぁ！？」

「あ、間違えた。実は……」

俺は村長の家で見たと話を話した

「……と言う事があったんだ」

「そんな事が……しかしその女神ってのは酷い奴ですねえ」

「そうそう、コイツが特に酷いんだよ。たぶんコイツがマウラスを裏切らせるために放火事件をでっち上げて……」

不意に意識に稲妻が走るような感覚に襲われ、気付いた事実と言葉を失った

「どうしました？」

空間の主は急に黙った俺の顔を覗き込み、不思議そうな顔をした

「……確かブラデイリって女神の部下だよな」

「ええ」

「その女神って、俺が夢で見た女神だよな」

「ええ」

「……」

「……」

「おのれ魔族に与する人類の宿敵め！」

「ええっ!？」

時流

木で木を叩く乾いた音が場内に響いた

「静粛に！静粛に！」

豊かな髭と、それと対照的な荒地のような頭部をした老人が木槌を打ち付けている

「弁護側、反論は有りますか？無いのなら被告人の有罪が決定しますよ」

黒いスーツに身を包んだ弁護人ナオは、頭脳の中で必死に状況を打開する論理を探したが、どうしてもそんなモノは見つからない過ぎていく時間が焦りのみを生み出し、背中に冷たい汗が流れたのを感じた

「くっ……どうしたらいいんだ……4人の目撃証言、さらに事件の映像が記録されたトルク……」

こんな完璧な証拠品を覆す方法なんて思いつかない……」

頭を抱え、絶望感に打ちひしがれていると、頬を打つような鋭い声が隣から響いた

「ブラデiri君、諦めちゃダメ！発想を逆転させるのよ！」

「な、中の人は男さん……しかし……こんな完璧な証拠を……ん、そうか！この証拠には決定的なムジユンがある！それを突きつけることができるば！」

老人が再び木槌を振り下ろし、場内に乾いた音が響いた

「どうやら弁護側には提出できる証拠が無いようですね。では被告人に……」

「意義あり！」

持ち合わせていた不屈の精神が息を吹き返し、ナオの声が静まり返っていた場に轟いた

一体どのようなムジユンを見つけたというのか！？

逆転マビノギ9〜お前のFL故障してるんじゃないの〜 近日発売

予定

「って本当に何させるんですか」

「のりすぎだろ」

「だいたいなんでそっちが女所長の役なんですか」

「いや、別に俺が弁護する必要ないなあと思つて」

弁護・・・？なんで弁護なんて単語が出てきたんだっけ？

あ、そうか。確か女神が魔族に協力してるって話題が出て、ブラデイリは女神の部下だからそれを弁解する必要が・・・

「おのれ魔族に与する人間の宿敵め！」

「話題を繰り返さないの」

ブラデイリの持つてる杖が俺の頭にめり込んだ

「で、あんなにハッキリ女神が魔族に協力した映像が残されてたのに、なんで弁解するんです？」

頭に杖をめり込ませたまま問いかけた

「そうですね・・・まずは女神と魔族と人間の関係について説明する必要があるのでですね」

ブラデイリは銀の髪をなびかせながら白い指で円形を描いた

指の通過した空間がぼやけ、円形状のぼやけたレンズのようなものが空中に浮かんだ

「えっ？何その不思議な技？」

「魔法です」

「魔法スゲー」

ブラデイリは新たに2つのぼやけたレンズを作り、そこに人間と魔族という文字を書き入れ、説明を始めた

世界には魔族と人間という種族がいた

魔族達は自分達の住んでいる土地の資源を使い尽くしたので、人間達の豊富な資源を狙って侵略してきたのだ

で、女神は人間達を守るために人間の兵を率いて魔族と戦っているのだ
以上

「えっ！？それだけ！？」

「ええ」

「ええ、そんな子供向けファンタジーみたいな感じだったのかよもうちょっと盛り上がりそうな理由があると思ってたのに・・・

例えば人間は民主政治、魔族は専制政治を支持している

互いの支持している政治内容や文化等が違っているのでそこから摩擦が生じ、度々無視できない規模の戦いが勃発していた

この戦いによつて両種族の滅亡の可能性を危険視した魔族の優れた帝王が

優れた独裁者によつて統治されるのが両種族の唯一生き残る道だと考え、人間達を屈服させるために動き出した

しかし人間側の女神は優れた指導者による独裁は一時的な平和をもたらすだろうか

何世紀先で、そこから誕生した愚帝の圧政による暗黒の時代の到来という専制の罪を指摘した

さらに優れた独裁者による専制政治は常に行く道を指示してもらおうなものなので

選択する責任を背負わなくてすむ両種族達は支配と言うゆりかごの中で墮落し、自分の足で歩むのを止め、精神的な奴隷となってしまうであろう

そう考えた女神は専制政治など認めるわけにはいかず、強力な武力を持つ魔族と戦う道を・・・何してるんですか」

「え？いえ、話が長くなりそうだったのでパン生地をちょっと」

ブラデイリは小麦粉の塊を適当な大きさにちぎりながら、顔だけをこちらに向けた

どう見ても今の話は聞いていなかったように思える

「とにかく女神様が我々を裏切り、魔族側に付くことはありえないのですよ」

こぶしほどの大きさのパン生地が乗った鉄板をかまどの中に入れながら、女神の部下は言った

「しかしなあ、実際に見ちゃったわけだし、あの記憶映像の説明がつかないとイマイチ信じられないな」

パン生地の入っていた円形の容器を水洗いしながら俺は反論した
「考えられる可能性というと、女神様が魔族に奇襲をかけるために、あえて裏切ったフリをしている。」

人質などを取られて魔族に服従するしかない状況である。魔族が女神様のフリをして人間の目を誤魔化そうとしている

まあ、こんなところでしようね」

「一つ目や二つ目の案はまだしも、3つ目は無いだろうなあ。そんなんで騙されたらそいつ完全にアホだよ」

「そりゃそうでしょうね。もし騙される人なんていたら、その人は恥ずかしくて世間に顔向けできませんね」

小麦粉で汚れた台所を拭きながら俺は「ところで・・・」と呟いた
「俺なんでパン作りの後片付けの手伝いしてんの」

「知りませんよ。むしろこっちが聞きたいぐらいです」

「いや、なんか勝手に体の細胞が動き出して・・・」

「女神と言えば、この前呼び出された時もそんな話題だったよな」

テーブルの前の椅子に腰掛けながら俺はふと思ひ浮かんだこの前の事を口から出した

「そういえばそうですね」

ブラデiriも向かいの椅子に腰掛けた。何かの間違いで外見が少女になっている俺とは

その視線の高さの差は文字通り大人と子供ほどの違いがあった

「あの時は確か警察に届けるように言われて・・・」

ブラデイリの目がまた少しつり上がった

「そうだ、思い出しました！あなた前回話をはぐらかして帰りましたね！」

「うん。あ、もしかして今回呼んだのはその事について文句言っためですか？」

「まさにその通りですよ！私、あの後警察に届出を出す手続きの事とか調べちゃったんですよ！」

「・・・一つ言っていていい？」

「なんですか！」

「お前はアホだ」

ブラデイリの杖がまた頭にめり込んだ

この異空間は俺が活動している世界とは違い、別の時間の流れに乗っているのだから

あそこの世界とココとじゃ時間の経つスピードが速かったり遅かったりする

今回はココと向こうとの時間の時流速度がかなり速かったので、ブラデイリが俺に誤魔化された事に気付いて俺を呼び出すまで

俺の感覚じゃ3、4日ぐらい経ったのだがブラデイリの感覚では2時間ほどしか経っていない

だから俺を呼び出すまでこんなに時間がかかったと言うわけだ

「上の説明マジ！？」

「何ですか上って」

「あ、いや・・・それより現在の時間の流れはどうなってんの？」

ブラデイリが指をくるくると回すと、何も無い空間から手のひらに納まる程度の大きさの円形の銀の時計が落ちてきた

それを手の中に落とすと、中心から伸びている黒い針を眺め始めた

「何それ？」

「これは向こうの空間とココの空間の時差を示す装置ですよ。これを見れば現在の時の時流速度がわかるんです」

「やっぱり魔法で？」

「そう、魔法で動いてます」

「魔法スゲー」

銀の時計の計測結果によると、現在も時流速度が結構速いらしい

「……つまりどういう事？」

「流れが速いので……向こうの空間じゃ、大体3日ほど経ってます」

3日という単語を聞いて俺は驚愕の声を上げて立ち上がった

ブラデイリが目を丸くして驚いている

「ど、どうしたんですか急に」

「俺3日後に約束があるんだよ！こんな事してる場合じゃない！早く俺を向こうの世界に戻して！さあ早く！」

二人して慌てながら円形ステージの中心に走り出した

向こうの世界に戻るにはステージの中心から半径2メートル以内に入る必要があるのだ

「杖どこ杖！アレがないと空間移動ができないんですよ」

「俺の頭にめり込んでるでしょ！ホラ早くとって！」

ブラデイリが杖を引き抜くと俺の頭に杖の形のへこみができたが、すぐにプニヨンという音と共に修復した

「そっいえばブラデイリ！」

「なんですか！」

「あの家具とかどっから出てきたの！？」

「魔法で出したんですよ！」

「魔法超スゲー！」

「私からしたらあなたの方が凄いですよ。どうなってるんですかその頭……地球外生命体ですか」

ブラデイリの杖がステップを踏むと、先端から光の粒子がばら撒かれて光が俺を包んだ

震撼

ティルコネイル村長宅前

扉の前にメガネをかけたローブの青年とライラミック教司祭服を着たワインレッドの髪をした女性が立っている

「しかし、どこに行ったたんでしょうねえ」

「ええ、来ていないのは中の人は男さんだけですわね」

「へえ、あの子はそんな名前だったんですか」

「聞いてなかつたんですか？」

「なんとなく聞く機会がありませんでしたから」

メガネの青年、タルラークは少し表情を崩して苦笑いをした

急に頭の上から「呼んだかい？」と、声がした

頭の上は屋根。もしやと思い二人とも扉の前から離れて屋根の上を見る

案の定、魔法学校の制服を着たカレントレッドの髪を肩まで伸ばした少女が屋根の上に立っていた

「何してんですか」

「いや・・・なんかここに飛ばされて・・・おのれブラデイリ」

急いで空間を飛んだもんだから、座標軸とか転送点とかなんかがズレたらしく

村長宅の前に出る予定だった所を村長の家の上に飛んでしまった

「ところで二人とも、誤魔化しの方法は考えてきたのかい？」

「えっ、私はちょっと探し物をするのに手間取りまして、たぶんクリステルが考えてくれるだろうと思って」

「私ですか？私は聖堂の仕事もありましたし、本の後半の翻訳に時間がかかりまして、中の人は男さんが考えてくれるだろうと」

「俺？俺はたぶん二人のどっちかが考えてくれると思って・・・」
なんだこの無責任トライアングルは

とりあえず、このままじゃどうしようもないので、屋根の上から降りる事にする

斜面になっっている屋根の上をおぼつかない足取りで駆け足気味に降りる

「落ちないように気をつけてくださーっ。あっ」

「あっ」

クリステルが心配した傍から足を滑らせた

手をバタつかせるが掴めるものがあるはずもなく、数秒の空中旅行の後、地面と衝突した

「ぐあああああっ！脳が！脳が痛えええ！！」

「尻から落ちたのにですか」

痛みへのた打ち回っている俺を見て二人とも呆れ顔をしている

「おや、何か騒がしいと思ったたら来ていたのか」

木の扉を開けて家の中からダンカンが顔を出した

「そ、村長・・・そういえばシラさんは来たのですか・・・」

痛みに耐えながら聞くとダンカンは短く「ああ」と答えた

「それより大丈夫か？」

「たぶん今日あたり死ぬ」

ダンカンによると、シラは少し前にここを尋ねてくるやいなや、トルクを受け取り記憶再生をしているという

自分の目で確かめないと信じられないって心境なのかなあ。と考えていると

再び木の扉が開き、中から女性が一人出てきた

見たところまだ20代前半と言った感じで、ピンクの髪と、少しタレ気味の目をしている

俺を見つけると少し微笑みながら挨拶してきた。どこかで見た事があるような気がするが、思い出せない

「えーっと、あなたは・・・」

シラかと思ったが恐らく違う

あの爺さんの嫁さんだから、たぶんシラという人は結構歳行ってるだろう

となるとこの女性は・・・？

あ、そういえばあの爺さん、記憶の中で子供がいるみたいなき事言ってたな

と言う事は

「マウラス・グイディオンの娘さんですね？」

少しの間の後、ピンク色の髪をした女性はクスクスと笑い出した

「そんなに若く見えます？イヤですねえ。私は娘じゃなく、マウラス・グイディオンの妻、シラですよ」

「ええっ!？」

そんなバカな。若すぎる。

「失礼ですが、いくつですか？」

「今年27ですが」

27?へえー若く見えるなあー

いやそうじゃないだろう。今27で、マウラスが裏切ったのが約1

0年前だから・・・

バ、バカな!？」

単純な計算の中に恐ろしい真実を見つけ、俺は戦慄した

あのジジイ、こんな若くて美人の妻娶ってやがったのかッ!？」

貴様のような老人が限りある貴重な資源を独占するから我々若者に取り分が回ってこないんだッ!

それが大人のやる事かッ!!

「村長、やはり私の思ったとおりでした」

シラがトルクを差し出しながら言う

「というと・・・やはりあの女神は？」

「ええ、あれはニセモノです」

俺、タルラーク、クリステルの三人は弾かれた様に顔をシラの方に向けた

「ニセモノ!?」

「なぜそんな事がわかるんです?」

「シラは看破眼を持っていてな」

看破眼?なんかまた強そうな単語が出てきたぞ

村長の言うことによると、看破眼とは魔法により屈折した幻覚の風景をも見破る事ができる眼力のようなものらしい

「私の目は左右で色が違うでしょう?これが看破眼を持つ者特有の目なのですよ」

シラの目を覗き込んでみると、確かに色が違う

「おーホントだ。何これ金銀妖瞳?」

「看破眼ですつてば」

「ともかくその看破眼であるトルクの記憶を見てもらったのだ

私の読んだ本の女神ともどうも印象が違っておったしな。すると思った通りあの女神はニセモノだった」

ニセモノ。なんてこった

ブラデイリの言っていた、女神が人間を裏切るはずは無いというのは本当だったのか

というか一番ありえない展開だと思っただのに

「女神の姿を真似ることができる魔力を持つ者といったらやはり・・・」

「

「ええ、あの正体は邪神キホールです」

「キホール!?あの邪神がとうとう出てきたのですか!」

「まさかキホールが・・・」

「キホールが敵ではまともにもやり合っては勝ち目は薄い・・・」

「ごめん、キホールって誰?」

4人の視線が一斉に俺に向けられた

「知らんのか?」

「うん」

みんながやれやれと言わんばかりの表情をした

「そんな目で見るな」

「キホールと言うのは、まあ分かりやすく言うと、魔族の総大将だ」
「そんな偉い奴なの」

「しかも戦闘能力も尋常じゃないほど高くてな

例えるなら、我々が戦闘力5の地球人だとすると、奴はヤムチャだ」

「ヤムチャ!? それは・・・いやそれ弱くない?」

「何言つとる。ヤムチャだぞ。戦闘力5の何倍も戦闘力持つてるぞ」

「でもヤムチャじゃどうも危機感が・・・」

「では、我々をネイルさんだとすると、奴はフリーザ様だ」

「メチャクチャ強いじゃないですか!」

「やつとわかつたか」

奇跡の魔術師マウラス、戦争の女神の魔族側への寝返り

魔人グラスギブネンの復活

この最悪の状況は、今得た情報により少しは好転することになった
マウラスの妻子の殺害はガセ、女神はニセモノという事実をマウラ
スに伝える事ができれば

マウラスはこちら側に帰ってくるだろうし、上手くいけばグラスギ
ブネンの復活を止める事ができる

しかし、一つ問題がある。それはタルラークの友達二人の死にマウ
ラスが関与していると言う事だ

「そこんトコどうなんだタルラーク。やっぱ友達が殺されたとなる
と・・・」

「その事なんです、コレを見てください」

そう言うとタルラークは壊れたメガネを取り出した

「これは私が友達二人との最後の冒険となった時にかけていたメガ
ネです

つまりこれは・・・」

「!・・・メモリアルアイテムか」

「ええ、前まではそうでした。しかし昨日、見つけた時に早速記憶

映像を見てみたら

見終えた途端、壊れてしまったのです。おそらく保存状態が悪かったのでしょう

私がいた祭壇の端っこに雪に埋もれてましたし」

「ええ、それ壊れたのお前のせいじゃん」

「このメガネの映像には意外なモノが映っていましたね
内容は私が話すとして・・・気付いてましたか？」

タルラークの目が急に鋭くなる

「ええ・・・恐らく魔族の裏切り者である私を狙ってきたんでしょうね

今回の魔族の言葉がわかるって事がどこからか漏れて、気づかれた
のでしょうか」

「敵は3・・・いや4匹か」

「気配を消している所からすると、暗殺の訓練を受けた兵でしょう
か」

クリステル、ダンカン、シラの目も鋭くなった

何言ってるのかサツパリ分からなかったが、ここで分かんないとか
言ったら仲間はずれな気がしたので

「ああ、こつも殺気を発してちゃ丸見えだな」と適当に話をあわせ
てみた

「そこにいるんだろう？出てきなよ」

目の前の茂みの方を向いて叫んでみると、背後の方から物音がした
適当に言ったのだが、まさか真後ろだとは思わなかった

しかしここで動揺しちゃ適当に言ったのがバレちゃうので、「知っ
てましたよー」と言わんばかりにゆっくりと振り返った

鋭い爪を持つ二足歩行の狼が4匹、ベアウルフと呼ばれる魔族の戦
士だ

「元サキユバスのクリステルだな。悪いが死んでもらう」
隊長らしきベアウルフが曇った声で言う

「クツクツク・・・敵の力量を見極められんとは、一流の兵のようだな」

4匹のベアウルフの視線が俺に集中する

こうなりやついでだ。適当にカツコいい事言ってる

「クリステル一人だけならその人数でもやれたらうな。しかし時が悪かった

氷上の呪術師タルラク、稲妻鷹ダンカン、看破眼のシラ

さらに剣聖と呼ばれた俺を相手にするのにたった4人で足りると思っ
っているのか？

最低でも一個大隊は用意するべきだったなア」

「えっ？剣聖だったんですか？」

タルラクが耳打ちしてきた

「シーツ、黙ってりゃバレやしないって。上手くいきや連中引き上げるから

上手くいなくても奴らの戦意を削ぐぐらいの事にはなるって」

確かに敵は少なからず動揺している

しかし現実には予想とまったく別の方向へと進んだ

隊長らしき奴が「こうなったらアレを出すしかない」と言うと、暗殺部隊の背後の空間が歪んだ

そこから醜悪な巨人が姿を現し、地面が振動するほどの雄叫びを上げた

「オーガ!？」

「このままいたら我々も巻き込まれてしまう。撤収するぞ」

そう言うとベアウルフ4匹は飛ぶようにして撤退していった

残された俺達5人と凶暴そうなオーガ

「事態が悪化してますよ」

「うん。どうしようか」

爆発

オーガが咆哮を上げる。大地が震動し、木々の葉が擦れる音が僅かに聞こえる

巨大な腕を振り上げ、強打が繰り出される

5人はそれぞれの方向へと跳躍し、半瞬前までいたその場所は轟音と共にクレーターと化した

恐ろしい破壊力だ。正面からあの力をぶつけられたら助からないだろう

こんな強力な敵と相対しているというのに、俺の心に恐怖は無かった魂が灼熱の炎を上げ、体内を駆け巡っている。体が焼け付くほど熱いこれこそが英雄の血の滾りというものなのだろうか

そう思うと、不思議な感情がわき上がり、笑みとなって体外へと放出された

体中の毛が僅かに逆立った

「ようしッ、俺が正面から行く！タルラークとクリステルは俺の後に続いて連携攻撃を仕掛ける！村長は弓で援護してくれ！行くぞッ
！！」

俺は口から熱い闘志の具現体となった言葉を飛ばすと、バスタードソードを構えてオーガへと身を躍らせた

一人で

誰も援護してくれない事に気づき、一瞬動きが止まった

その瞬間、オーガの巨大な腕から放たれた強打が俺を捕らえたまともに食らい、俺は吹っ飛んだ。たぶん秒速40万kmぐらい出た。光とか余裕で追い越せる

木に叩きつけられたが、すぐに起き上がって見るだけの4人に詰め寄った

「お前らアアア！なんで見てるだけなんじゃアアア！！お前ら全員

異名を持った戦士だろうがアアア!!」

「え、魔力が戻ったと言っても、まだ戦闘に耐えられるほど回復してませんし」

「もう歳だから弓引けそうにないし、弓は知り合いの子にやってしまった」

「私は神に仕える身ですから剣なんて振るうわけにはいきませんし」

「看破眼は戦闘に使えるものではありませんし、第一、私はただの主婦ですから」

「タルラークこの野郎、お前は少しくらい行けるだろ！前出て戦えオラ！」

「嫌ですよ、英雄の血の滾りはどうしたんですか！」

「あんなもんウソに決まってんだろ！5人がかりならあんなオーガ簡単に倒せると思ったから」

「適当にカツコよさそうな事言っただけだよ！」

俺が4人に抗議してると、後ろからオーガの強打がまた飛んできた俺だけ直撃して、他の4人はまた避けた

今度はたぶん秒速50万kmぐらいで飛んだ。衝撃波で村が吹っ飛ばないか心配だ

「戦える人居ないなら逃げた方がいいんじゃないかー」

勝ち目が無さそうなので、最良の案と思われるものを提示してみた
「いや、ダメだろう。今ここで逃げたら村が大変な事になってしまう
何とか倒してくれ。村人の平和の為に」

「えー、じゃあ村長も戦つてよ」

「イタタタタ・・・持病のムチウチで腰痛が・・・」
「ウソつけ」

話しているとオーガにまた襲われそうな気がしたので、バスタードソードを再び構え、戦闘態勢をとった

「ええい、こうならヤケじゃ！死ねエエエエ!!」

叫び声を上げながらオーガに突撃した。オーガの太い腕の強打を身

を低くして避け、巨体に剣撃を叩きつけた

金属が折れる高い音が響く

俺のバスタードソードが半分になっていて、もう半分が地面に突き刺さっていた

「ええっ!？」

「あ、気をつけたほうがいいですよ。オーガは破壊力はもちろん、皮膚の硬さも異常なんですよ」

「さ、先に言え!6000Goldもしたバスタードソードがショートソードになっちゃったじゃないか!」

武器がなくなつたのでは戦えない。魔法は少し使えるが、オーガ相手には少しかじつた程度の魔法は通用しないだろう

オーガの大振りの攻撃をかわしながらこの状況の打開策を考えていると、「これを使い!」という村長の声が聞こえた

声をした方を振り返ると何か棒状の物が回転しながら飛んできている。恐らく新しい剣だろう

それを受け取り、勢いに任せて思いっきり横に払った

確かな手ごたえがあり、オーガの体が腹部から真っ二つに切り裂かれていた

手にした武器の切れ味に驚いていると、目に飛び込んできたものにもっと驚いた

オーガの体内が肉ではなく、細かい金属で形成されていたのだ
次の瞬間、轟音と共に大爆発が起きた

「どうなってるの」

黒こげになりながらも、俺は辛うじてその言葉を発した

「どつやらあのオーガは生物ではなく、魔族の技術で作られた金属兵器だったようですね

ご丁寧に、やられた時には相手を巻き添えにして自爆するように設定されてたようです

道理でオーガの割には動きが早すぎると思いましたよ」

「そうなの。で、それより気になる事があるんだけどさ。なんでお前ら無傷なの」

戦闘を見ていた4人はどうみても爆心地の近くにいたようには見えない

みんないつも通り、小綺麗な格好をしている

「爆発する瞬間、このままでは村に被害がでると思いましたが」

簡易結界を貼って爆発を防いだんですよ。不安でしたがなんとか成功しまして、村には少しも被害は出てません」

「うん、確かに村は無事だね

でもなんで俺だけ爆発の直撃くらってんの？」

「すいません。結界の展開が間に合いませんでした」

「ウ、ウソつけ！」

「まあまあ・・・それよりその剣すごいですね」

「確かにすごい剣だ。あんなにあっさりとおーガと、中の金属を一両断にしちゃうなんて

村長、一体この剣は・・・なんだこりゃああああ！」

剣を握った右手の先を見て、始めて俺はその剣の異形さを目にしたその剣は曲刀のような形をしていたが、曲刀と言うには幅広で、長すぎた

長さは俺の身長ほどあり、刀身からはぎらぎらとした光が放たれている

まさに巨大な包丁と言ったような刀だった

「ああ、それは昔冒険に出たときに手に入れた剣だな

元々は上位魔族ガーゴイルの熟練した戦士が扱う剣らしい。剣折れたいだし、それをやろう」

「超いらねー」

「そついやタルラク。メガネの記憶から何かを見たって言ったよな。一体何を？」

「ええ、ではそれについて話しましょうか。あの時魔族と対峙して、結果魔力と友を失ったと思っていました」

それは全てマウラス師匠と、女神の仕業だと思っていました。しかし事実はそれと違っていたのです

それより・・・」

「どうした？」

「真っ黒に焦げてますけど、大丈夫なんですか？」

「ああ、これか・・・ちよっと待ってて」

俺は腕を顔の前で交差させた。そして気合のこもった声と共に勢いよくその腕の交差を解く

すると真っ黒いコゲが吹き飛び、中からいつも通りの俺が出現した。服も直っている

「人間ですかアナタ」

「さあ」

再会

金髪の魔法使い、赤毛の剣士、桃色の髪の弓使い

消えた3戦士と呼ばれた3人の前には魔族軍最強と呼ばれた、黒い鎧の戦士が背中を向けて立っていた

「我が名はダークロード・モルガント。待っていたぞ愚かな侵入者よ」

モルガントと名乗った戦士はゆっくりと3戦士の方を向く

が、向き終わる前に3戦士達は躍りかかっていた

ルエリの剣が腹部に叩きつけられ、タルラークの蹴りが顔面を捉えたその勢いでモルガントは吹っ飛んでいく。そこにマリーの矢が肩を貫いた

が、すぐに起き上がってきた

「お、お前ら卑怯だぞ！人が振り向いている途中で襲ってくるなんて！

しかも1人に対して3人で攻撃してくるとか恥を知れ恥を！」

「だってこれ戦いだし・・・」

「何言ってるんだ！戦争にだってルールってもんがあるだろ！」

3人とも納得のいかないという表情で不当な非難を浴びていた

「特にそのピンクの髪の子供！」

「え？私？」

「弓はやめなさい弓は！今の私の鎧は近接攻撃や魔法攻撃は絶対に防げるようになってるが

その分弓に弱くなってるんだ！」

「うん・・・わかった」

「じゃあ最初からやり直すからね！ちゃんとやれよ！」

そう言つとモルガントは最初に立っていた位置に大股で戻っていった

「ふっふっふ・・・待っていたぞ愚かな侵にゆ・・・ぎゃあっ！」

振り返る前にモルガントが悲鳴を上げた

背中に矢が突き刺さっている

「誰じゃ矢を射つたのはアアアアア!!!」

「私だけど」

マリーが正直に答えた

「弓は使うなと言ったでしょ!弓は使うなと!何を聞いていたんだ!」

「いや、弓を使えっていう前フリかと思って・・・」

「そんな前フリがあるわけないでしょ!もう1回やるからな!絶対に弓使うなよ!使ったら罰金100万だかな!」

活火山の噴火のように怒りながらモルガントは再び大股で元いた位置に戻っていった

「クツクツク・・・待ってい・・・うぎゃあつ!!!」

またモルガントに矢が刺さった

「誰じゃアアアアア!!!ピンク色の!お前か!」

「えっ!?!今回は私じゃないよ」

「あ、今回俺」

そう言うルエリの手にはクロスボウが握られていた

「なんで撃ったアアアアア!!!」

「いや、なんか面白そうだったから・・・」

「面白いわけあるかアアアア!矢が刺さったら痛いつて何回言ったらわかるんじゃアアアア!!!」

お前罰金100万払えよ罰金100万!!!」

「えっ、そんな金持っていないし。ごめんなさい」

「ごめんで済んだら警察は要らないんじゃないやアアアアアあsdのさdのさdbホ。オオオオオオオオ!!!」

モルガントが狂ったように怒りまくっていると、背後の暗闇から赤

黒いローブを着た老人が歩いてきた

「何を遊んどるんだモルガント」

赤黒いローブのフードから覗いている白い口髭の奥から言葉が発せられた

その声と姿はタルラークの脳の記憶中枢に刻まれているものだった

「ま、まさか、あなたは行方不明になっていたマウラス師匠では！？」

「む、お前は・・・タルラークか！」

二人の魔道士は思いがけない再開に目を見開いて驚愕した

「なんだ。この爺さん、お前の知り合いか？」

「ええ、この方は私に魔法を教えてくださいました恩師なのです

お久しぶりです師匠。覚えていてくださいましたか」

「いやいや、こんな所で立ちっぱなしというのもなんだから、上がりなさい

さあさあ、お友達も一緒に。最近美味しい紅茶が手に入ってな」

マウラスに勧められるまま、3人は部屋の奥へと上がっていった

「いやー懐かしいな。もう10年になるかな」

「ええ、行方不明になったと聞いて心配していましたが、お元気そうで何よりです」

差し出された紅茶が湯気と共に芳醇な香りを上らせている

一口飲むと「素晴らしい香りですね」と、素直な感想を述べた

ルエリは紅茶の香りなどどうでもいいという表情を

マリイは砂糖の入っていない苦い紅茶をすすって渋い顔をしてテ-

ブルの上のカップを見つめている

モルガントはカップにストローを突き刺して兜を付けたまま紅茶をすすっている

二人の魔道士が話の花を咲かせている間、話に入れずに退屈そうな顔を上げたルエリが何かを見つけた

「ん？なんだあれ？」

そう言つて指差した先には巨大な羽と4本の腕を持つ巨人が吊るされていた

「ああ、あれか。あれはグラスギブネンと言つてな、その昔世界を崩壊させかけたと言われている巨人だ

散々苦勞させられたが、やっと復活直前まで持つていけたところだ」
「ははあ、あれがグラスギブネン・・・さすが師匠、あんな化物を復活させる事ができるとは」

「いやいや、それほどでもあるがね。ハツハツハ」
満更でもないという表情を浮かべてマウラスは笑い声をあげた

「しかし師匠。あんなものを復活させてどうするんです？」

「そりやお前、憎つくき人間に復讐するために決まっているだろう
そつえば3人はどんな理由で魔族側に付こうと思つたんだ？」

「ええ、そりやもう酷い目に会いましたね。実はパン屋で・・・」
急に会話に違和感を覚えたタルラークはその口を止めた

「魔族側に付く？一体どういうことです？」
3人も驚愕の目でマウラスの顔を凝視した

「えっ？お前たち、ここに来た理由は人間を見限つて魔族側に付こうと思つたからじゃなかつたの？」

「当たり前でしょう。何言ってるんですか。私達は魔族に監禁されている女神を助けるためにここまで来たんですよ」

しばしの沈黙

「・・・お前たちは知つてはならない事を知りすぎてしまった。このまま返すわけにはいかん」

「ええっ!？」

殺気を感じ取つたタルラークが机を蹴り上げ、相手の視界を一時的に隠し、後ろに跳び距離をとつた

宙に舞つたカップが地上に落ち、高い音を響かせ真紅の液体が地面に飛び散つた

落ちてきた机はモルガントの頭に当たった

「どういう事です師匠！憎つくき人間なんて、一体何が・・・」

「それはお前たちが知ることはない。亡霊甲冑よ」

マウラスが片手を上げ合図を送ると、ゴーストアーマーが音も無く30体ほど現れた

「悪いが、グラスギブネンの復活が間近に迫っているこの時期に邪魔されるわけにはいかんだ

彼らを捕えよ。なるべく傷つけぬようにな」

命令を受けたゴーストアーマーの部隊が3人に襲いかかるが、近付いた瞬間、魔力で動く鎧は体を破損させながら宙に舞った

「ほう、亡霊甲冑では相手にならんか」

感心しながらマウラスは指先に雷を発生させた

ゆっくりと指先から雷が離れる。雷は徐々に巨大な雷の球と化していった

己の師匠の魔力を知っているタルラークは雷の球を見て戦慄を覚えた
反射的に両手を前に突き出し、薄い鏡面のような魔力の壁を張る

「ルエリ、マリー！あの雷球にまともに当たったら体が飛び散ります！私の後ろに来てください！」

「体が！？」「怖っ！」

2人はその言葉を聞いて、全力で魔力の壁の後ろへとまわった

「えっ、いや別にそれほど強力な魔法じゃ・・・」

それより、マリーだと・・・」

マウラスはピンクの髪の少女の名前を聞き、浮いている雷に手をかざし、消した

髪の色に目の色に目つき、歳はあの時から計算すれば確かにこのくらいだろう

さらにその名前・・・

「その子供、名前をなんという」

急に話しかけられたマリーは少し動揺したが、少しためらった後、はつきりした声で答えた

「マリオッタ・グイディオン」

その声がマウラスが耳に届いた瞬間、マウラスの脳に落雷のような衝撃が走った

「なっ!?!」

「えっ!?!」

「え?なんでタルラークまで驚くんだ?」

「いや、マリーの本名知らなかったもんで・・・それよりマリー、その名前は本当なのですか!?!」

「う、うん」

驚愕の表情がはりついたタルラークの顔がマウラスの方へ向く

マウラスは平静さを欠いていると一目でわかるほど動揺している

「ま、まさか・・・いやそんな、しかし・・・」

マウラスがその目をマリーに向けた瞬間、背後で強い光が放たれた

黒い髪に黒い翼を背に持つ、肩を露出させた白い服を着た女性がそこに立っていた

「なぜ生け捕りにするのですか?彼らは魔族の秘密を知ってしまったのですよ」

戦争と復讐の女神、モリアンの名を以って命じます。彼らの首を、私の前に捧げるのです」

マウラスが勢いよく振り向き、背後の女神に目を向ける

「なっ、何だと?待て!」

しかしその言葉は3人に飛びかかったモルガントには届かなかったその手に持った巨大な剣が3人へと振り下ろされる

その気配を察したタルラークが魔力の壁を張ろうとするが、剣がその身に到達するまでの時間では完全な壁を作る事はできなかつた不完全な壁と剣がぶつかり合い、壁は砕け、剣は振り下ろされたが、剣が相手を切り裂く事はなかつた。壁を破壊した瞬間、魔力の反発が起き、強い衝撃波が発生したのである

その衝撃波を正面からくわったタルラークは木の葉のように吹き飛

び、天井を突き破ってどこかへと飛んでいった
モルガントも衝撃波が発生した場所の至近距離にいたので、壁に叩
きつけられた

石の床は衝撃で砕け、その破片が高速の弾丸と化して残る2人へと
襲いかかり、避ける間もなく2人を直撃し

2人は崩れるように倒れた

唯一無傷だったマウラスは目の前で起きた惨状に一歩も動けずにい
たが、すぐに我を取り戻した

倒れた2人に駆け寄り、傷を見た

ルエリは気絶はしているものの、身に着けていた鎧によって大した
傷は負っていないかった

しかし体を守る鎧をつけていなかったマリーは全身に打撲を負い、
さらに鋭い岩の破片で切り傷を無数に作られていた

マウラスは急いで手に光を集め、マリーの傷を癒し始めた

が、強い光がマリーの体を中心に発し、光と共にマリーの体は消え
ていた

「なっ、消えたただと!?!」

「あの後、私はラビダンジョンの奥深くで目を覚ましました

恐らく、あの衝撃でそこまで吹き飛ばされたんでしょう。頭上の天
井には穴が開いてましたし」

「マジで? すごい衝撃」

「ところで、今の話を聞いてると、マリーってのはやっぱり・・・」

「ええ、恐らく師匠の娘でしょう」

「恐らくというか、マウラスとシラの娘だぞ。マリーは」

「ええっ!? そうなんですか!?!」

「知らなかったのか?」

「知りませんでした」

「タルラークお前、仲間の事知らなさ過ぎだろ。もうちょっと知ろうとしようぜ」

「しかし、マリーはどこに消えたのだろうか。そして誰の仕業で消えたのか」

ダンカンはその場にいる全員疑問を口から出した

「さあ・・・そこまでは。師匠の魔法でもなかったようですし」

「あの場所には偽の女神と、ダークロードのモルガント、マウラス、そして気を失ったルエリという人しかいなかったんだよな

モルガントは魔力持ってそうに見えないし、偽の女神が消す理由も無いだろうし、マウラスの仕業でもない

気を失っていた人ではさらに無理だろう。姿の見えない第三者の力が働いたとでも言うのだろうか？

シラさん。貴女はどう思います・・・」

シラのいた場所へと目を向けると、その視線の先にはシラは居ず、少し視線を下げた先に青い顔をしたシラが倒れていた

「えっ！？どうしたんですか!？」

「しまった！シラはあまり精神が丈夫な方ではなかったのだ！今の話はショックが多すぎたのだろうか！」

平気だった4人は倒れたシラを介抱する為、バタバタと慌しく動き始めた

侵攻

エリン暦725年、7月のサーオイン

後のティルナノイ戦役と呼ばれる戦いの序曲が奏でられたのがこの日であった

この戦いでは後世の人々に偉大な英雄と語り継がれる中の人は男と呼ばれる人物が

奇抜極まる戦術を用いて魔族の圧倒的軍事力を誇る防御網を打ち破り、まさに戦神というに相応しい力で

1人で3万もの魔族を打ち倒し、人間軍の勝利に多大な貢献をしたという記録が残されている

後世の歴史家達は、「中の人は男こそが人間達の救世主と呼ばれるに相応しい人物であろう

世界の平和は中の人は男1人の功績と言っても過言ではない」と記している

「という展開にならないかな」

「なつてたまるか」

シラを介抱した後、俺達は4人で今後の方針について会議をした後、適当に雑談をしていた

「だいたい魔族に3万も兵士居ないでしょ

そんなに沢山いたら今頃凄まじい勢いで攻めてきてますよ」

「だよー」

「それにさっきの話し合いで出した結論と全然違うでしょ」

会議によって決められた事は以下の通りである

まずはクリステルが所持している上級魔族のみが扱える通行証を使用し

魔族の布陣が薄いバリダンジョンにティルナノイと、ここの世界を繋げるゲートを作り出し

敵に気付かれぬよう速やかに行動し、女神を救出。その後グラスギブネンが封印されている場所を突き止め、これを破壊。マウラスに真実を話し、こちら側に引き戻し脱出

このような荒い作戦を強行することになったのには理由があったそれはクリステルの翻訳した本の後半に書かれていた内容であるあの本の後半には、グラスギブネンの復活が間近に迫っていると言う事と

それにより、魔族達を戦意を上げる言葉が所狭しと並んでいたのである

具体的に上げると

「伝説の巨人、グラスギブネンはこの天才マウラスによって復活させられる事になる！」

この巨人の力を持つてすれば人間達など恐れるに足りん！

さあ、君達も若い情熱を燃やし、アンポンタンの人間達に正義の鉄槌を下そう！」

などと書いてあった

ちなみにこれは原文そのままである

「言うのは簡単だろうけど、実際にやるとなると難しいだろうなあ」

俺は目の前の苦いコーヒーをすすり、口を少しゆがめて話を続けた

「女神もティルナノイのどっかにいるって事しかわからないし、グラスギブネンも

きつとタルラーク達が過去に見た場所からは移動させられてるだろうしな

ティルナノイってここに詳しくて、道案内してくれる奴がいればラクなんだろうけどね」

「そんなのいるわけないでしょ」

同日、バリダンジョン最深部

最高責任者、ウイスプの元にゴブリンが怯えた表情で報告に現れた
「ウイスプ閣下、大変です！バリダンジョン南方より人間達の一部
隊が侵入しました！」

現在全兵力をその人間達へと向けてはいますが、食い止めるのは困
難と思われます！」

このバリダンジョンは通常のバリダンジョンとは違い、魔族以外に
は侵入が不可能なはずであった

その理由はこここの最深部には地上に攻め入る為の通路が設置してあ
り、この通路を通じて人間が魔界に攻め込まないよう

結界により守られているからである

1年ほど前、3人の人間の戦士が侵入して以来この通路は人間達に
見つかる事は無かったのに、今になって何故？

しかし今はそんな事を追求している場合ではないと判断したウイス
プは現在の状況を確かめるため、部下のゴブリンに尋ねた

「で、敵は何人ほどだ？5人か？8人か？」

「そ、それが・・・確認できただけで300から400ほどの武装
した兵が侵攻しています」

「400!？」

ここには約40ほどの兵しか配置されていない

10倍もの敵をロクな防衛機能がないダンジョンで正面から止める
のは不可能である

「いかがいたしますか」

「決まっている。ここを放棄し、上層部に報告するのだ。全員に撤
退命令を出せ！」

「おや、敵が退いていく」

「そりゃこんだけの人数で攻め込めば逃げ出すでしょ

しかしよくもまあこんな人が集まったもんだ」

この作戦を決行するに当たって、どうせなら人数が多い方がよくね

?と提案した所

俺以外の4人が知り合いなどに世界のピンチが云々と声をかけ、400人ほどの勇士が集まった

ちなみに俺には知り合いがいなかったので誰も集まらなかったというかよく400人もダンジョン内に入ったもんだ

それよりこの作戦、敵に気付かれないように行動するはずじゃなかったんか

しばらく進むと、ただっ広い部屋に出た

恐らくここが最深部だろう

「あ、奥に明らかに不自然な扉があるな」

「どう見てもアレが魔界への入り口ですね」

部屋の奥には、二体の羽が生えた化物の彫刻が飾られている柱に挟まれて

不思議な模様が刻まれている黒い巨大な扉があった

まさに「これ魔界の入り口です」と言わんばかりの形だ

その扉に手を触れると、扉はひとりでに開かれ、奥には歪曲した空間が渦巻いている

「ようし、ここに飛び込めば魔界へ行けるんだな

俺が一番乗りだ！クレイジーに行くぜ！」

ガーゴイルソードを高々と掲げ、扉の奥の渦に飛び込んだ

その先には荒れ果てた村が広がっていて、山犬がウロウロとしていた
雰囲気からしてどう見ても魔界だ

ポーンと辺りを見回していると、ふと後ろから誰もついてきていないことに気付いた

背後には相変わらず空間が渦巻いている

これはおかしいと思い、その空間に入り、元の世界に戻ってみる

渦から顔を出すと、400人が何か相談していた

「ねえ、なんで誰もついてこないの？」

「あ、中の人は男さん。実は我々も後に続こうと思ったのですが・
・」
タルラークの言うことによると、渦に飛び込んだ俺に続いてみんな
進もうとしたが
渦の前に変な光の壁みたいなものが発生して、弾かれてしまったら
しい

「どうやら1年前とは全く違う種類の結界が貼られていて、入り込め
ないようだ

「えー、結界で。俺普通に入れただけど」

「何か原因があるのかもしれませんが。ともかく現状ではあなたし
か魔界に行けません

つまり・・・」

「まさか俺だけで？」

「ええ、1人で女神救出してギブネン倒して師匠説得してください」
無理だ

「嫌だー！みんな根性について来いー！」

「何言ってるんですか、根性で結界通れるわけないでしょ。1人で3
万の敵倒しなさい」

「無理だー！3万も倒せるかー！」

魔界の扉の前で駄々をこねていると、奥の渦が急に小さくなり始めた
それを見ると、タルラークはハツとして目を見開いた

「大変です！魔族がこの通路を封鎖しようとしています！急いで
魔界に入ってください！」

「えっ！そんな！嫌なこつた！」

「さあ早く！皆さんこの人を魔界に押し込むんです！」

「チキショー！お前ら悪魔だ！」

抵抗もむなしく俺は400人の勇士によって魔界へと押し込まれた
この一文だけ見ると俺は魔王かなんかに見える

目の前に広がる荒れ果てた村を見て、俺は呟いた

「・・・」

疑惑

空を見上げると、澄み切った青空という表現とはかけ離れた、濁った黄色っぽい空が広がっている

地は荒れ果てていて、所々に何かの落下した後のような穴がある

俺はたった一人で魔界に立っていた

本来なら400人の勇士がこの魔界の地にひしめき合っていたはずなのに

ちよつとした手違いのせいで俺一人となってしまった

まったく、400人もいるなら俺一人いなくても関係ねーやとか言いながらその辺で昼寝か釣りでもしとく予定だったのに

予定はどうやっても変更となる模様なので、なるべく状況をいい方向へと持っていく必要があるな

ここは魔族の地なので、人間が一人で立っていたら目立ちすぎる変装をする必要があるな

俺はそう考えると、さっそく手に持っていた袋から懐かしの、買いなおしたクロスフルヘルムを取り出した

魔法学校女子制服にクロスフルヘルム

このアルティメットパーフェクト魔族の変装を使えば魔族の地でも安心だろう

しかしこのクロスフルヘルムをかぶるのは久しぶりだな

なんだか、かぶっていると体の中から謎の力が湧いてくるようだ

あたりを見回してみると、どうもこの辺の風景は一度見たような気がする

デジャヴという心理的なものではなく、家の配置、道の構造、広場の位置

荒れ果ててはいるが、大雑把なつくりはティルコネイルの村とほと

んど同じなのだ

この一致は偶然だろうか？それとも何か理由があるのだろうか？人が住んでいる気配は無いがそこには銀行があるし、そこから広場をはさんだ反対側には雑貨屋がある

むこうには食料品店があるし、向かいの小高い丘の上には村長の家らしきものがあり、そこに誰か立っているし

・・・おや、誰かがいる？ここからじゃよく見えないが、人影らしきものが見えるぞ

この魔族の地に入って事はないだろうから、たぶん魔族かなんかだな丘の上の人影はこちらには気付いていないらしく、椅子に腰掛けてぼんやりと空を見上げている

何か知っているかもしれない。話しかけて情報を得ることにするかこのアルティメットパーフェクト魔族の変装さえあれば人間と気付かれる心配はないからな

丘の階段を上り、人影の近くへと進む

「やあ、何を見てるんです？」

「空をね、見てたんですよ。昔はこんな色をした空じゃなかったと思ってたんですがね」

髪の毛の長い魔族と思われる男は空を見上げたまま返答した

魔族の地の空の色なんかは知らないのです、うかつな事はいえないとありあえず少し頷いた

「ところで・・・」

髪の毛の長い男は視線を落とした

「人間が、どうやってここに来たのですか？」
「なッ!?バレているだとッ!?」

バカな！このアルティメットパーフェクト魔族の変装を見破れるはずがない！

「ななな何を言ってるかわかりませんねえ。私は魔族であって、人間ではありませんよ。」

おのれ人間め、死ねえええ」

「何わけのわからない事言ってるんですか。安心してください。私も人間ですよ」

「えっ？人間？」

「ええ、私の名前はドウガル。ここに残った最後の人間です」

「最後の・・・？それより、一つ気になったことがあるんだけど」
「なんです？」

「魔族の中でも人間にかなり近い格好をしてるのって結構いるよねあれと人間の見分け方みたいなのってあんなのかな」

「簡単な事ですよ。魔族は目が赤くて人間はそれ以外の色をしてるんです」

ほら、私の目も赤くないでしょう。だから私は人間です」

そう言ったドウガルの目は確かに薄い灰色をしていた

そっぴやクリステルの目とかは赤かったっけ

「へえ・・・エリンという世界から来たんですか」

「うん、途中までは仲間が400人ほどいたんだけど、なんかここに来れなくて俺一人になっちゃったんだ」

とりあえず俺はここに残った最後の男から情報を交換し合っていたこの地について何か知っているかもしれないしな

駄目元でいろいろな事を聞いてみても損じゃあるまい

「というわけでさ、こと向こうの世界を塞いだ結界みたいなのを破る方法とか知らない？」

「知ってますよ」

「ああ、そうだよな。あんなワケのわからん結界を破る術を知ってる人なんているわけない」

・・・・・・・・・・・・・・・・

え？

「知ってるって？」

「ええ、知ってます」

「マジで！？スゲー！こいつあ思わぬ収穫だ」

あの境界さえなんとかできれば400人が一気にこの世界に乗り込んできてくれる

そうすりゃ俺は当初の予定通りその辺で寝てればいい。完璧だ

「で、どうすれば境界を破れるの？」

「その道をずーつと行ったところにダンジョンがあるんですが

そのダンジョンの最深部にある黒い球体を破壊すればいいんですよ」

「よっしゃ行ってくる」

振り返ってすっ飛ぶように駆け出しかけた

その時、後ろからドウガルの声が飛んできた

「ちょよ、ちょよと待ってください」

「何か？」

「アナタね、普通の人は初対面の、しかも魔族の地にいる人から聞いた話を鵜呑みにしないですよ

普通はコレ罨じゃね？とか疑うもんですよ」

「あ、確かに。今の話実はウソだったりする？」

「いえ、本当の事ですけど・・・」

「じゃ問題ないね。それじゃ」

俺は振り返ってすっ飛ぶように駆け出しかけた

またドウガルの声が飛んでくる

「ちょよ、ちょよと待ってください！

だからなんで鵜呑みにしてんですか。もっと疑うべきでしょう

例えばこいつの言ってる事は嘘で、実はこいつ魔族の手先とかじゃね？とか」

「なるほど・・・。もしかしてドウガルは人間と言うのは嘘で、ここに来た人間を騙して

罨にかけたりする魔族とかか？」

「いえ、違いますが」

「じゃ安心だね。それじゃ」

振り返ってすっ飛ぶように駆け出しかけた

やっぱりドウガルの声が飛んできた

「だからそうじゃねえええええ！だからもつと人を疑ってんだ
ああああ s a d n i s a n d i o s a d n s a i n d g n s i o j
f a i p p q i p p o w r h q」

「何怒ってんだ」

こいつの言っている事は真実だろうか？迂闊な判断はできない
ここは魔族の地。自分以外の者は全て敵だと思って間違いはないだ
ろう

しかし現段階では情報が圧倒的に欠乏している。目の前にいる男は
見た目は人間だが、その真実はどうか？

大体この廃墟に一人でいるという事自体がおかしい。この男から得
た情報によると、ここは魔族の侵攻によって滅ぼされたらしい
そんな所に一人でいるという事は普通しないだろう。まさかこいつ
は変装した魔族で、俺を罠にかけようとしているのでは？

しかしそうだとしたらおかしい所が何箇所もある。まず騙すのなら、
一人だけではなく

何人も使って無傷な町を演出し、そこから俺から信頼を得て騙すべ
きだろう

変装が出来る奴がないというのなら、あえて魔族の格好のまま
「魔族のやり方に反発している者」というフリをして

俺に情報を流すという状況を作り出した方が騙せる確率が一気に高
まるというもの

しかも俺がここに来たという事自体が魔族達にとってイレギュラー
な事である

そんな状況で罠を張るのは不可能と考えていい
かといって目の前にいる男を信じるのは危険すぎる

くっ、どうしたらいい。このままでは思考の無限螺旋に陥ってしまう
「とか難しい事考えれるわけ無いだろ」

「今考えてたでしょ」

「それに俺別に罫にかけられてもあんま困らないんだよね」

「えっ、なぜ？」

「実は俺異世界から来たらしくて、体が普通じゃないんだよね

頭がへこんでもすぐ治るし、屋根の上から落下しても、村一つぶっ

飛ばすような爆発の中心にいても大した怪我也負わず平気だったし」

「へえ〜そりやすごい・・・」

「あ、信じてないだろ。見てろ」

そういうと俺は背負っているガーゴイルソードを取り出し、刃を上にした

その上を指を滑らせる。指が少し切れて少量の血が刃の一部分を赤く染めた

「ほら、こんな傷すぐに治っちゃう」

治らない。傷を凝視してみたが変化は見られない。どう見ても治ってない

「しかも痛い！」

「当たり前でしょ！」

調査

指に包帯を無造作に巻く

「一体どういうことだろう。なんでこれしきの傷が治らないんだ」

「そりゃ普通、切り傷がすぐに治ったりしないでしょ」

「普通ならそうなんだけど。俺は普通じゃなく・・・」

いや変な意味じゃなくむしろ内面は普通というかむしろ紳士だ

そうじゃなく普通じゃないってのはそういう一般的に使われる意味ではなく・・・」

とにかく、こんな状況じゃあ結界を解くことはできない

きつとあんなすごい結界なら警備も嚴重だろうし、下手したら命を落としかねん

なんとか頑張つてエリンとココを繋げたとしても大怪我を負って

「ぐっ・・・どうやら俺はここまでの様だ・・・あの壺を俺の代わりにあの人へ届けてくれ・・・」

みたいな展開になったら洒落にならんからな

「そういえば・・・」

ドウガルが何かを思い出したようにつぶやいた

「アナタはエリンという、こことは違う世界から来たんですね」

「うん。正しくはどっかの異世界からエリンに連れてこられてさらにこの異世界にいるんだけど」

「ややこしいですね」

「まったく」

「ともかく、確か前に本で読んだ事があります。一つの世界には一つの魂の流れ方というものがあり

その流れは命の保持方法を決めており、異世界へと行くと何らかの方法で魂の流れと魂を同調させないと

生命の波長が弱まり、無意識下で肉体と魂との拒絶反応が微かに起

きるようです」

「なるほど・・・」

分かったかのような表情でうつむいてみせた
が

「何言ってるのかさっぱりわからんね」

ドウガルが呆れたような顔でこちらを見ている

「その事について書いてある本ならこの丘をおりてすぐの銀行に保管してあります」

その本を実際に読んでみたら、何かわかるかもしれないよ」

「銀行ね・・・とりあえず言ってみて本を探してみ・・・」

何？銀行？

「ここ銀行あんの？」

「ええ、今は機能していませんが、色々な物が置いてありますよ」

「よし分かった。すぐ行く」

銀行。銀行か。しかも誰もいない銀行。ウヒヤヒヤヒヤヒヤ

「あ、言っときますけど、現金とかは置いてありませんよ」

「何イツ!？」

銀行内は廃墟のような外見とは違い、意外とキレイなもんだった
少し掃除をして埃を取り除いて少し壊れている棚などを修理すれば
そのまま銀行として使えそうだ

とりあえず本が積み重なっている所に座り込み、目的の事が書いて
ありそうな本を探す

ウイスプ語の理解・・・コレは違うな

目指せナイスボディ・・・俺にどうしろと言うんだ

魔法使いは夜が好き・・・そうですか

大富豪イバンの話・・・金持ちはふくらはぎが爆発しろ

私にもできる！乳搾り・・・なんだこの怪しいタイトルの本は

魂の同調・・・お、これっばい

その本を拾い上げ、息を吹きかけて表面の埃を飛ばし、本を開く

その中には実に簡素に事実が述べてあった

「えーっと、何々・・・異世界から来たら生命力をなんかから吸い込まないとえらい事になるよ

もし異世界で死んだりしたら体が溶けて消滅するよ・・・」

そこで本に書かれてある文字は終わっていた

「なんだこの本。分厚いくせにたった一言しか書いてないぞ

しかも続きのページには4コマ漫画とか描かれてるし・・・」

しかし溶けるってのは怖いな。溶けたら洒落にならんじゃん

何か解決法があるはずだ。まずはそれを探さなくてはいけない

そんなわけで寝っころがって4コマがぎっしり載っているページをヘラヘラしながら読んでみた

本も中盤、徐々に日が暮れてきて部屋も薄暗くなってきた

ゆっくりと起き上がり、明かりをつけようと入り口前の棚の前の向かい

棚の上に置いてあるランプへと手を伸ばす。が、手が届かない

誰だこんな高いところにランプ置いた奴

何か踏み台みたいなものを使ってランプを取ろうと、椅子が何かを探して辺りを見回してみた

その時、窓ガラスが大きな音と共に割れ、ガラスが細かい破片となり床に散らばった

魔族に見つかったか！？ガールゴイルソードを構え、窓の方へと視線を移す

薄暗い闇の中に浮かんでいた姿はボロボロの服を着た人間のように見えた

が、次の瞬間ソレは人間ではないとわかった

ソレの体中の皮膚は腐敗していて、顔面はすでに人間と認識できるほど形を保っていなかった

鼻は削げ落ち、目が無い奴もいれば、辛うじて眼球がぶら下がっている奴もいる

そんなのが3体、不気味な呻き声を上げながらこちらへとゆっくり近付いてくる

口から心臓が飛び出るほどビビった。同時に恐怖心が凄まじい勢いで体中を駆け巡った

銀行の扉を蹴破って逃げ出した。それはもう全力で走って逃げた。多分100m9秒切れるぐらいの速度で走ってた

そろそろ家の中に入ろうか

椅子から立ち上がり、ドウガルはゆっくりと家の扉の方へと歩き出した

その時、叫び声が銀行の方角から聞こえてきた

なんだなんだと銀行の方へと目を向けると、異世界から来たとかいう赤っぽい髪をした

制服みたいな変な服を来た少女がこちらへ全力でダッシュしている目の前まで走ってくると、銀行を指差して息を切らせながら涙目で何か言ってきた

「オ、オバケ！オバケが出た！」

「はあ？」

「銀行でオバケが出たんだよ！」

「何寝ぼけてんですか」

「いやマジだつて！なんか腐乱死体みたいなのが3体ぐらい窓を破って銀行内に飛び込んだんだつて！」

「死体・・・？ああ、それゾンビですね。夜になるとよく出るんですよ」

「え」

あんなのがよく出てくる？ここそんなにおつかない所だったのか？くっ、なんて恐ろしい所なんだ！魔族の地！

「そっちの世界にはそんな事なかったんですか？」

「そ、そんなのあるわけね・・・いやちょっと待てよ

そついやある街道とかには昼間つから凶器持った人骨とか、骨だけの狼とかが徘徊してたっけ」

「でしょう。特に不思議じゃないですよ。むしろ凶器持ってない分、こつちの方が安全ですよ」

「そんなもんかなあ。でも、あんなのが急に窓から飛び込んできたらビビるって」

「それより、目的の本は見つかりましたか？」

「あ、意外と早く見つかったね。それに関連した本が無いかと、今まで探してたんだ」

流石に寝つころがつてマンガ見てたとは言えなかった

「それなら多分知っていると違いますけど、魂の流れを同調させるには、この世界の何かから生命力を吸い取る必要があります」

「あ、うん。知ってる知ってる」

もちろん知らない

「で、その生命力の事なんですけど、多分さっきのゾンビを何体か倒せば十分な生命力を得ることができると思いますよ」

ゾンビ？あのおっかないのと戦えと？

「マジで？」

「マジで」

あんな怖すぎると戦うのは嫌だ

しかし戦わなければ死んだら溶ける。そうなればここに400人の味方を呼べない

そうなるとラクが出来ない

くっ！一体どうしたら！

探索

あのグロテスクなゾンビ50体の殲滅

それが魂の流れとやらを同調させるために必要な条件だ

「50体もあんなオバケを相手にすんのか。嫌だなあ」

俺は肩ほどまで伸びた自分の赤い髪の中に片手を突っ込み、頭を抑えた

「でもやんないと溶けて消滅しますよ」

「そうなんだよなあ、やつぱやるしかないか」

ちらりと手に持つているガーゴイルソードに視線を落とした

正直この剣重くて使いにくいんだよな

この剣だけで50体も殺れるのだろうか

いや、相手はゾンビだからすでに死んでる。殺るって表現はおかしいか

もし連中と戦っている途中で後ろから不意打ちとかされて怪我したらどうしよう

で、その怪我からゾンビになるウイルスとか入って俺もゾンビになっちゃうたらどうしよう

そうなったら非常に困る

魔族の地に乗りに込んだ唯一の戦士の俺が倒れたら世界の運命はどうなってしまうのか

なんて事はもちろん考えない。世界の運命とかすっげーどうでもいけど俺が死んじゃうのは非常に困る

ふと思いついた

「ねえ、この丘を降りて川を挟んだ向こうにも何軒か家があったりするのかな？」

「ええ、確か風車小屋とか色々あったはずですよ」

思ったとおりだ。最初来た印象通り、この村はティルコネイルとほ

とんど同じ配置で家がある

ならばここを降りて川を挟んだ向こうにはティルコネイルと同じように鍛冶屋があるはずだ

鍛冶屋ならばいくらかの武器が置いてあるはず

人がいないならばその武器はタダで頂いちゃっても誰も文句は言うまい

恐らく放置されている武器は風化して錆びたりしてるだろうが、一本ぐらいはまだ使える武器が残ってるだろ

「ようし、では世界平和の為に魂の同調をする準備をしてくるぜ」
そついで残すと俺は足取りも軽く、丘を降りて行った

俺はタダで手に入るものがとても好きだ。それが実用的なものならばもっと好きだ

川に架かっている橋を通り、鍛冶屋があるはずの場所へと行く

そこには予想通り、鍛冶台を叩いているハンマーの絵が描かれている看板がボロボロの状態でかかっている小屋があった

どう見てもこの看板は鍛冶屋のものだ

小屋の入り口には鉄を鍛える台があり、その周りには鉄屑がいくつかが転がっている

きよろきよろと辺りを見回し、ゾンビがない事を確認すると小走りですぐ小屋の中に入る

沸き上がるワクワクする感情を抑えつつ、まずは入り口近くの半開きになっている釜戸の中を開いてみる

錆びた剣が入っている。まず一本ゲットだ

こりやお宝探ししてるみたいで楽しいぜ。ウヘヘヘ

小さい鉄の入っている樽をひっくり返し、棚の上を探索し、棚の下の木箱を漁り

金目のものを探し・・・もとい、世界を救うための武器を探した

結果、使えそうなバスタードソード(6000Gold)1本、錆びた剣が12本、錆びた斧が6つ

弦が切れた弓が5つ、半分に切れてる弓が2つ見つかった

意外とたくさん見つかったな。しかし保存状態が悪い

こんな錆びた剣とか使えんのかな。まったく気が利いてないな。誰だか知らんけど

ところで斧や弓の数え方ってなんて言うんだろ

錆びた剣を手にとってまじまじと見つめた

その後、鍛冶台に視線を移す

この剣、この鍛冶台で鍛えなおしたら使えるようになるんじゃないかな

剣の鍛え方なんて知らないけど、適当にあつたためてハンマーでぶっ叩けばなんとかなるだろ

まず釜戸に枯れ木を入れ、そこに火の魔法を詠唱し火をつける

この魔法は敵に火球をぶつけて、衝突時に生じる衝撃によりダメージを与える

この仕組みがイマイチ納得いかん

ぶつけるなら鉄球とかでいいじゃん

なんでわざわざ火の玉を作り出す必要があるんだ

そんな事を考えながら錆びた剣を2回振り、釜戸の蓋を開け、燃盛る炎の中に剣を突っ込んだ

しばらくポーっとしていると炎の中の剣がどんどん変色していく

赤色というかオレンジ色というか、すっごく熱そうな色になった剣を釜戸から取り出す

素手で取れるわけないから、錆びた剣を両手に持ち、それで挟んでゆっくりと取り出す

それを鍛冶台の上に置き、おもむろに落ちていたハンマーでぶっ叩く
全力でぶっ叩く

誰もいない村に鉄を叩く音のみが響く

こいつあ強い剣になりそうだなと思いつつながら剣を鍛え続ける

ハンマーを持った手を頭の上に振り上げ、思いっきり振り下ろす
振り下ろされたハンマーが熱せられた剣と衝突した瞬間、鋭い金属
音と共に半分に折れた剣の先が
高熱の矢となつて凄まじい勢いですつ飛んでいった
刃の先にあつた木に突き刺さり、少しの煙と、焦げた木の二オイが
した
それを目を丸くして見つめていた。しばらくして背筋に冷気を感じた
こいつぁ俺の手に負える仕事じゃねえ！
なんて危険なワザなんだ！恐るべし、鍛冶！

おっかないので剣を鍛えなおすのは中止
見つけたバスタードソードを腰に携え、錆びた武器はなんかに使え
るかもしれないので、袋に詰めて鍛冶屋を後にした
現在の目的であるゾンビの殲滅を急がなくては
しかしゾンビってどこにいるんだろ
さっきまでは出てくるなと思っていたが、いざ探してみるとちつと
も見つからない
そっぴやティルコネイルには村長の家のすぐ北にある丘の上には墓
場があつたな
ゾンビ＝墓場ってのは安直すぎる考え方かもしれないが、念のため
行ってみるほうがいいだろ
ま、どうせ居ないだらうけどね

で、墓場

一面に雑草が生い茂り、闇の中を何かがつごめいている
目を凝らしてよく見る。あのポロポロの服。力なく前に突き出され
ている両腕。そしてあのゾっとする顔
どう見てもゾンビだ
なんか安直に墓場にいやがった

あの顔を見ると戦う気が失せる。だって怖いんだもん
正直あんな怖いのと冷静な状態で戦える奴なんか存在しないと思う
しかしやらないとヤバイ

背は腹に変えられまい。俺は雄叫びを上げながらガーゴイルソード
を振り上げ、ゾンビへと突撃した

敵がこちらを見た瞬間怖くて怯んだが、そのまま頭上の剣を振り下
ろす

目の前のゾンビは二つに両断され、勢いで剣が地面にめり込む
左から新手のゾンビが跳躍した

腰のバスタードソードを抜き、そのまま俺を狙って突き出された敵
の腕を切り捨て

体を捻り、回転した勢いで敵を切りつける。斬られたゾンビは崩れ
かけた体を完全に崩しその場に落ちた

さらに2体こちらに向かってくる
右手を後ろに回し地面に突き刺さったガーゴイルソードを掴み、力

任せに引き抜いてそのまま刀身を敵に叩きつける
前屈みの体勢のまま、左手のバスタードソードをもう一体の敵に突

き刺し、上方に力をかけて切り上げる
こう見ると俺がめっちゃ強く見えるが、これはゾンビの動きが

異常なほど遅いからできる事である
普通の敵だったら2体目あたりで頭を叩かれたりしてる

前方の墓からゾンビが次々と這い出てくる
いくら動きが遅いといっても、いっぺんにあの数を相手にするのは

得策ではない
少し後退して、地面に置きっぱなしの袋を掴む

両手に錆びた剣を持ち、両腕を開き、ゾンビへと投げつける
回転して飛ぶ剣がゾンビの体を切り裂き、4体のゾンビが地面へ崩

れ落ちた
この戦い方は有効だ。さらに俺は錆びた斧を取り出し、投げつける

構えを取った

必死にゾンビと戦っていると、ふと一つの考えが頭を過ぎった
普通さ、世界を救うために異世界から来た勇者様ってのには、お供
というか仲間みたいなのがつくもんだよな

例えばおしとやかな少女とか、世界を救うために悲しい運命を背負
った女の子とか

露出度の高い服を着た色っぱいねーちゃんとか、俺に妙になついて
る幼女とかさ

こんなのと旅して愛だの友情だの育んで人間的に成長しながら世界
を救うってのが普通だろうが

なのに俺はなんでたった一人つきりで、こんな魔族の地で夜中にお
つかない顔したゾンビと殺し合いをしてんだ

くそっ！世の中は不公平だ！

まさかこれも魔族の罠とかだろうか？そう考えると急に目の前の敵
が憎くなり

全力で錆びた武器を投げ続けた

復活

最後の錆びた斧がゾンビの頭に突き刺さり、奇声を上げながらゾンビは崩れ落ちていく

途中で数え間違えていなければ、これで50体目のはずだ

これで魂の同調だかなんだかが取れたはずだから、いつも通りの再生能力が戻ったはず

背後から物音がする

俺の背後に回り込んでいたゾンビが、表面の皮膚組織が爛れて異様な色と化した腕を振り上げ

人間を超越した腕力で俺を引き裂こうと腕を振り下ろす

その腕をさつきまでは剣で受けていたが、あえて服の袖からむき出しになっている腕を突き出した

ゾンビの異様な色の指が白っぽい腕に突き刺さり、赤い血が滴り落ち、土色の地面の一部を赤く染めた

ゾンビの腕力ならば人の腕など簡単に切り落とす事が可能だが、俺の腕は体から離れてはいない

甦った本来の能力に俺は笑みを少し浮かべ、そのままの状態で見ている方の手を腰のバスタードソードにかけた

一筋の光が走り、次の瞬間、俺の前に立っていた敵は両断された。半身はそのまま地面に崩れ落ち

もう半身は異様な色の手が俺の腕に突き刺さったままで、ぶら下がった形となって地面から少し離れて浮いていた

俺は無造作に腕から敵の手を引き抜き、地面に落ちた半身に向かってもう半身を投げた

異様な音を立てて腐った肉がぶつかり、少し形が崩れた

すでにゾンビではなくなった人の死体にくるりと背を向けると、親指でコインを弾いた

弾かれたコインは金属的な音を立てて宙に舞い、死体の上に落ちた

「三途の川の渡し賃だ。とつときな」

「というわけで、なんとか元の再生能力を取り戻す事ができたよ」「そうですね。それより最後の方は作り話でしょう」

「バカなッ!? 脚色した部分が即バレただとッ!？」

「ま、まさかこいつ、人の心を読むことが・・・?」

「いや、普通に考えてそんなカツコつけれるわけないでしょ。アホですか」

「アホじゃねーやい」

ドウガルは細く削った木を何本も組み合わせて作られた椅子に深く腰掛けると

重々しい口調でぼつりぼつりと語りだした

「あなたがゾンビを倒しに行つてから、乾いた砂漠に泉が湧き出てくるように、徐々に記憶が戻ってきたんです

私はドウガルという人間だと思つていましたが、どうやら厳密には少し違つようです」

「・・・それはどういふことだ?」

俺は眉を少し顰めて、ドウガルへと疑問に満ちた目を向けた

「私はこの世界の人間ではありません。そう、あなたと同じように異世界から魂を呼び寄せられた存在なのです」

「と言う事はまさか、俺と同じように女神に世界を救うために召喚された戦士と言う事か?」

「いえ、それとは少し違いますね。第一私を呼んだのは女神ではありません」

私をこの世界に呼んだのは魔族達・・・そして私は」

ドウガルは少し息を吐き、顔を俯かせ、目を伏せ、再び口を開いた

「私は、この世界で破壊の化身と呼ばれた化物、グラスギブネンの中枢とされるために呼び出されたのです」

「嘘つけ」

「いや、嘘じゃないですよ!」

ドウガルは弾かれたように顔を上げた

「えー、だって自分この前、人の言った事をそんなあっさり信じるなって言ったから」

「こんな場面で嘘言わないですよ!どんだけ嘘つきなんですか!」

「でも、その発言したいも嘘ってことも・・・」

「だから違うつて言ってたんだろうがあああああ s d a n d i s
a i u o d b s a i u d g i s a d g o a d j s a b n d j k b s
a d k j n s a i」

「何怒つてんだ」

この魔族の地に最後に残った人間

その正体は破壊の化身、グラスギブネンの魂だった

「しかし、なんでその魂がこんな所にいるんだ?召喚されたのなら
グラスギブネンと融合とかしてると思うんだけど」

「ええ、それなんですけどね・・・」

異次元から呼び出されたグラスギブネンの魂は、本体の遙か上空から
吸い寄せられるかのように高速で本体へと迫っていた

もし魂が観測可能なものだったのなら、それは宛ら流星のようであ
っただろう

魂の向かう先には銀色の鎖で天井から吊るされている巨大な羽と4
本の腕を持つ巨人、グラスギブネンの体があった

この魂を呼び寄せていたのは、グラスギブネンの復活をここまで進
めた奇跡の魔術師マウラスであった

マウラスは完成したグラスギブネンの体を囲うように魔方陣を描き、
その前で魂を呼び寄せる呪文を詠唱している

その魂がグラスギブネンに衝突するという正にその時、魂はグラス

ギブネンの周りに張られた見えない壁にぶつかり
閃光を発して弧を描きながら外へと飛んでいった

マウラスの近くで見物していたモルガントは、衝突時に発せられた
閃光に気付いて声を上げた

「今の光はなんだ！？まさかとうとう・・・」

「ああ、これでグラスギブネンの復活は完了した。あとはこの封印
の鎖を断ち切れればいつでも動くだろう」

「やった！とうとう完成か！ようし今日は宴会だ！夜通し飲むぞ！
破壊の化身の完成に喜んだモルガントはマウラスを担いでどっか行
った

魂が弾かれたから完成してないのに

弾かれた魂は再び上空へと舞い、しばらく上昇した後、再び地上へ
と降っていった

このままでは魂は地面に激突する。そう思われたが、魂の落下予測
地点に都合良く人が倒れている

その倒れている体にするりと魂が入り込んだ。

「こうして私はこの体になったのです」

「そんな事が・・・じゃあ、その体の元の魂はどうなったんだろ」

「さあ、多分死んでたんじゃありませんか。他に魂が入ってた
ら私入れなかつたでしょうし」

「そんなもんなの」

しかし、あのモルガントとか言う黒い鎧の戦士

魂は見事に弾かれて未完成だったのにあんなに喜んで、アホ丸出し
だな

「それよりグラスギブネンが未完成だとバレルのは時間の問題でし
ょう

未完成のうちに急いで破壊するべきでしょう。私が飛んできたのは
あの方角ですから・・・」

「いやちよつと待った」

北の方角を指差したドウガルはこちらに目を向けた

「自分、グラスギブネンの魂になるはずだったんだよな。本体壊しちゃっていいのか？」

グラスギブネンの体に戻りたいとは思ってないのか？」

ドウガルは意外そうな目をして、一息ついた

「あのですね、冷静に考えてみてください」

「うん」

「破壊の化身とかいうグロい化物の体で世界を破壊しつくすのと

この長髪のイケメンの体でモテモテ人生を歩むの、普通に考えてどっちがいいですか？」

「……イケメンだよなあ」

「でしょう？」

「すごい説得力だ」

しかし同じ異世界から召喚されたものとして、俺はわざわざ用意された体が赤毛の小さい女の子の体

こいつはたまたま死んでたイケメンの体。これ不公平だろ

「体交換しない？」

「絶対嫌です」

宝玉

目の前に緑、青、赤、銀色の4つの扉がある

グラスギブネンの魂が飛ばされてきた方角にあるダンジョン

そこに本体があるだろうと言われてここに来たのだが、まさか4つも入り口があるとは予想外だった

正直、グラスギブネンの本体があるなんておっかない所には行きたくなかったのだが

エリンとここを遮断している結界を打ち消す方法もここにあるかもしれないと言われて

嫌々ながら来たのである

おそらく4つの扉のうち、1つがグラスギブネンの本体がある場所に通じていて

1つは結界を打ち消す為の部屋に通じているだろう

あとの2つは・・・多分罠なんかだろう

大当たりの結界部屋を選ぶ確率は1/4

そこそこツイていけばまずいける

最悪なのが一発でグラスギブネンの本体とご対面というパターンだがそんなことにはなるまい

根拠はないが

さて、どれを選ぼうか

俺は青が好きだから青い扉にしようか

あー、でもその心理を逆手に取った罠って事もありうるよなあ

じゃあせっかくだから俺はこの赤い扉を選ばぜ！って事で赤い扉にしようか

いや、でも赤ってのは血を連想して不吉かもしれん

それに魔族の瞳の色は赤だ

これは危険な二オイがする。赤も止めとこう

となると、1番怪しくなさそうな緑か？

まてよ。あえて1番怪しくなさそうな所に罫を張るってのはよくある話だぞ

じゃあ残った銀の扉か？

でもこれは4つの扉の中で明らかに浮いてて怪しすぎる

だいたい銀の扉ってなんだよ。豪華すぎるだろうが

宝物庫にでもなってるのかっつーの

ん？宝物庫？

.....

よし！銀の扉だ！銀の扉しかない！

勢いよく扉を蹴破り、部屋の中へと転がり込んだ

希望に満ち溢れた目の中に飛び込んで来たものは、期待していたものとはかなりかけ離れた

装飾すらない質素な石造りの部屋だった

部屋の中心にはどう見ても高価には見えない黒い玉が1つ。これまた貧相な台座にのっかってる

まったく、期待外れもいいとこだ

そう呟きながら安そうな黒い玉をペシンと叩いた

その瞬間、安そうな黒い玉は高い金属音を響かせて碎け散った
かなりビビった

そ、そんなに強く叩いてねーぞ

悪いイタズラをしてしまった子供のようには首を竦めてキョロキョロと辺りを見渡し

目撃者がいない事を確認すると、足早にコソコソと逃げだした

同時刻、魔族軍最高司令室

机に突っ伏して居眠りをしていたモルガントは、けたまましく鳴り

響いた警報音で夢の世界から現実へと引き戻された

数秒ほど時を要して意識をハッキリさせたモルガントは、現状を把握しようとして部下を呼び寄せる鈴を鳴らした

背中に翼を生やした、濃い灰色の肌をした魔族ガーゴイルが現れるとなぜ警報が鳴っているのか問いただした

「はっ。どうやら例の封印を制御している4つの装置のうちの1つが何者かによって壊された模様です」

何者かによって？そうか、ウィスプからの報告にあった400の敵がもう行動を起こしたか

しかし報告があつてからわずか6時間ほどだぞ。なぜこんなにも封印の場所がわかったのか？

まさか内通者か？そうか、例の人間になつたというサキュバス。もしかしたらそいつが情報を渡したのかもしれない

となると、グラスギブネンの場所もバレていると見て間違いはないではなぜ先にグラスギブネンの方を破壊しないのか

「……考えるのは後だ。まずは制御装置がある場所に兵を送れ。今すぐにだ」

「封印場所近くには兵は一人もいませんが」

「えっ？なんで？」

「モルガント様が制御装置はダンジョンの奥深くにあるし、誰もここにはこれないからいいや」

とか言つて兵を全部他の場所に配置しちゃったんでしょうが」

「あー……そうだった。どうしよう」

「私に聞かれましたも」

この時のモルガントの推理は面白いぐらい完全に外れていた

しかし、まさか400で攻めてきた兵が結界に弾かれて1人になつてて

さらに本体に入つたと思つていたグラスギブネンの魂がホントは他の所について

しかも人間に協力していたなんて、誰が予想できただろうか

もしかしたら、あの黒い玉は結界を作ってる装置じゃないか
そう考えて、俺が最初に出た廃墟になった村の広場に戻ってみたが、
特に変化は無かった

となると銀はハズレか

あの黒い玉の正体は後で考えるとして、今は残り3つの扉のうち、
次はどれを開けるか考えよう

1つ開けたら踏ん切りがついたのか、心の中に渦巻いていた疑心暗
鬼はほとんど消えていた

さうで、次はどれを開けるか

あえてストレートに青いつてみるか

青い扉に手をかけ、ゆっくりと力を込めて押すと、扉は軽い音をた
てて開いた

そして俺の目の中に想像もしなかった意外な光景が飛び込んできた
銀の扉の部屋と、全く同じ部屋が広がっていたのである

石造りの部屋に中央には貧相な台座に安っぽい黒い玉

あえて違う所をあげるとしたら、銀の扉の部屋より少し狭い気がする
とりあえず足元に転がっていた石を拾い上げ、黒い玉に投げつけて
みた

やはり黒い玉は簡単に砕け散った

一体この玉はなんなんだろう

思考回路をフル回転させてみたが、さっぱり予測がつかない

とりあえず器物破損で訴えられないように、この場から逃げ出した

同時刻、再び魔族軍最高指令室

警報音がまた部屋中に響き渡った

「今度は何事だ！」

「はっ。どうやら2つ目の制御装置が破壊された模様です」

ガーゴイルの口から飛び出した言葉にモルガントはひどく驚かされた

いくらなんでも早すぎる

装置と装置の間には、たつぷり10キロ程の距離があるというのに1つ目の装置が破壊されてから、まだ10分程しか経過していない敵は4つに分かれて同時に侵攻しているのだろうか？

となると、1つの装置に100の敵が向かっていると見える

展開の速さから見て、今から兵を送っても追いつかないだろう

仮に何人かの兵が間に合ったとしても、100の敵を相手にして勝てるわけではない

「まずは敵の戦力がどの程度か把握したい。残りの2つの場所の映像を映せるか？」

「はっ。すぐに手配致します」

張りのある声で返答したガーゴイルは背筋を伸ばし敬礼をし、早足で退室すると

肌の色と同じ濃い灰色の翼を広げ、天井すれすれを滑空していった

さて、残りは2つ

すでに開けた2つの扉はグラスギブネンとも結界とも全く関係なかった

つまり、目の前のまだ開かれていない赤と緑の扉のどちらかが大当たりで

どちらかが大ハズレという訳だ

正に天国と地獄

確率は1/2。俺ならいけるはずだ

行けっ……！自分を信じて扉を開けろっ……！そして大当たりを引けっ……！

神よっ……！俺を祝福しろ……っ！

扉に風穴ができそうなほどの強い念を発しながら緑の扉に手をかけ、ゆっくりと力を込めた

救出

「なんだこりゃ」

目の前の光景を見て、この言葉が思わず口からこぼれ落ちた

4つの扉のうち、2つは開けたんだ

で、両方ともグラスギブネンとも結界とも関係ない部屋だったんだ
じゃあ今開けた扉の向こうには、どっちかに関係ある部屋がなきゃ
おかしいじゃないか

なのに何故目の前にあの黒い玉と台座があるんだ

目の前に広がる矛盾に混乱する自身の思考回路を宥めようと努めて
いると、ある1つの考えが脳裏を掠めた

「いや、まさか」

突拍子もない自分の考えに独語したが、この考えはありえない事では
ない

それに前ドウガルが言っていた言葉。あの言葉とこの状況を結びつ
ければ、この結論が成り立つ可能性は充分にある

そう思うといてもたつてもいらねず

その考えが真実かどうか確かめる為に部屋の中央にある黒い玉に跳
び蹴りをかますと、部屋の外へと駆けていった

「なんだこりゃ」

3つ目の部屋で呟かれた言葉と全く同じものが魔族軍最高指令室で
発せられた

映し出された敵の映像があまりにも意外なものだったからである

当初、敵は400の兵を100ずつに分けて4つの地点を同時に攻
めていると思われていた

となると100人の兵が映っていなければおかしい

しかし現に映し出された封印制御室の映像は、予想していた数の1

たった1人の、しかも武装した屈強な戦士ではなく妙なヒラヒラした服を着た子供が

封印制御装置に跳び蹴りをかまして破壊していたものだった

何故こんな子供が？

映像を見ていたモルガントは腕組みをしながら椅子の背にもたれかかり、考えを巡らせた

.....

もし、敵があつた玉を破壊した時に警報が発せられると知っていたら？
上級魔族しか知らされていない場所を連中は知っていたんだ。警報の事も知っていても不思議ではない
となると、敵の本当の狙いは何だ？

俯いてしばらく考え込んでいたモルガントは、急に頭を上げて叫んだ

「グラスギブネンか！」

約1年前、グラスギブネンを見て、未だに捕らえることが出来ていない人間が2人いたはずだ

凄まじい勢いですつ飛んでいったメガネの魔法使いと、急に消えた子供

あの2人のうち、どちらかがグラスギブネンの事を話し、仲間を沢山連れて再侵攻してきた

そう考えれば全ての辻褄が合う

少数の兵でこちらの目を引きつけ、こちらが例の封印の防衛に回った瞬間

主力部隊を突撃させて一気にグラスギブネンを破壊

しかる後、防衛に向かった我らを後方から強襲し、陽動部隊と連携を取り、包囲戦を展開する

間違いない。これが敵の作戦だ

「ならば罠にかかったフリをして、逆に罠にかけてやるとするか」
そう呟くと、モルガントは隣室に控えていたガーゴイルを呼び

例の封印地点に10体ほどのゴーストアーマーを送るようにさらに全兵力の7割をグラスギブネンが安置してある要塞に集結させるように指示を出し

陣頭指揮をとるべく、要塞に向かう為に椅子から立ち上がった

この時のモルガントの読みは完全に外れていた

400の敵がいるという固定観念から抜け出さなくては真実に辿り着く道は閉ざされていたので

当然と言ったら当然かもしれない

もし、もう少しの間考え込んで最後の部屋の映像を見ていたらもっと真実に近い答えを見つけ出す事ができたのかもしれない

やはり最後の部屋にも同じように黒い玉があった

それを手早く破壊すると、駆け足で4つの部屋の入り口がある部屋へと戻った

扉を閉め少し離れて、それぞれ違う色をした4つの扉も見つめていくと

それらは上の方から壁に溶け込むかのようにして消えていった

扉が完全に消え去ると、4つの扉のあった場所の中心に

新たに、破壊した玉と同じ黒い色をした扉が出現した

ここまでは思っていた通りだ

全ての玉を破壊すれば何かが起きる

そんな気がしていた

で、その何かとは何か？

現在持ち合わせている情報を全て合わせて考えれば、それは間違いなく結界の破壊だ

今考えてみりゃ、あの玉は「オツス！オラ結界を管理しています！」と言わんばかりに怪しかった

となれば、新たに現れたこの黒い扉の向こうには400の味方の到着という希望が満ちていること間違いなしだ

意気揚々として黒い扉を開けると、その奥には暗闇が広がっていた
視界を確保するために手のひらから火球を浮かべた

これも魔法のちよつとした応用だ

火球の光が闇を照らし出すと、目の前に石造りの通路が見える

しかし石造りの建物ばかりだな。魔族は石大好きか。この石フェ
チが

火球で足元を照らしながら通路の奥へと進んでいくと、結構広い部
屋に出た

部屋の中心には黒い玉が………、じゃなくって、不
透明な白い色をした氷のようなものがそびえ立っている

かなりでかい。天井に届きそうなくらいでかいぞ。ざっと見て高さ
は5、6メートルぐらいありそうだ

触ってみたが、冷たくはないので氷ってわけじゃないようだ
となると、やっぱりアレだね

これこそが俺の最終目標、こことエリンを遮断した封印を作ってる
やつだ

「イヤッホー！ぶっ壊してやるぜ！」

ガーゴイルソードを思いつきり振り上げて、勢いよく振り下ろす
不透明な冷たくない氷の塊に刃が触れた瞬間

金属同士がぶつかったような高い音が響いて、刃は弾き返されてし
まった

その反動でバランスを崩し、よろよろと後ろに数歩下がった後、小
さく悲鳴を上げて尻餅をついた

黒い玉と違って意外と硬いじゃないか
尻餅をついた状態のまま、まじまじと目の前の物体を見てみると

今、刃がぶつかった部分が少し欠けていることに気付いた

もっとも、気付いた理由はその欠けた場所から、僅かに光が漏れて
いたからである

光がどんどん強くなっていく。それと同時に欠けた部分から亀裂が

広がり、そこから光が漏れ出した

これは、もしかしてやったのか？

どンドン亀裂が大きくなっていく。光が眩いほど増えていく。それに伴って俺の興奮度も上昇する

亀裂が全体に広がった瞬間、塊は大きな音を立てて崩れ落ちた

やった！これで封印は消えた！俺の勝ちだ！

崩れた塊の欠片は氷のように溶けて消えた

部屋中に広がっていた暗闇は消え、火球がなくても視界が確保できるようになっていた

元々塊のあった場所を見上げると・・・何かいる！？

その何かは、ふわふわと空中に浮いていて、ゆっくりと落ちていつている

何だアレ。どうやって浮いてんだろ

どうも人のように見えるけど、人が空中に浮くわけねーしな

上から糸で釣ってんのか？いや糸は見えない。ってか俺は何を考えてるんだ

急に何か出てきたから気が動転しているのか？

その人っぽいものは地に足が着くと、足に力が入らないらしくそのまま膝をついた

とりあえず目の前の人が倒れそうという理由で、その人っぽいものに駆け寄った

近付くとどんな外見をしているのかよく見えた

黒水晶のような色をした艶のある長い黒髪

肩の部分に布がなく、幾何学的な線の集まりで出来た模様が所々に入っている白い服

そして背中には、なんか黒い翼が生えてる

この格好、どっかで見たような・・・でも記憶の中にある人物とは少し違うぞ

黒い翼のあるその人物は、地面に両膝と両手をついて、全力で走ってきたかのように息を切らせている

俺は「大丈夫ですか？」というあまり独創的ではないセリフを言いながら、手を差し出した

「魔力が枯れかけた状況で・・・空間を飛び越える扉を5つも作ったものだから・・・すこし力が・・・」

途切れ途切れに高い声でそう呟くと、ごく薄い黄色がかった手で俺の手を掴んだ

「扉？」

「黒い玉のある部屋に通じる、4色の扉と黒い扉があったでしょう・・・あれは私が作り出したもので・・・」

「ああ、あの4つの・・・えっ？あれ作ったのはアナタなんですか？」

呼吸を整えると、掴んだ手に少し力を入れ、立ち上がった

「ありがとう。あなたの勇気が長い年月の壁を越え、私に自由を与えてくれました

私の名はモリアン。あなたに夢の中で助けを求めた者です
勇気？何それ？

いや、それよりモリアン・・・というと

「もしかしてアナタが、あの女神モリアンなのですか！？」
その問いに女神は僅かにうなずいた

女神の救出・・・忘れてた！

世界の崩壊だの破壊の化身だの、色々ありすぎたから完全に忘れてた！

相手は神様だからな。救出を忘れてたなんてバレないようにしなくては

しかし・・・夢の中とか、キホールとか言う邪神とかが化けてたのとちよつと違う気が

いや、結構違うぞ。イメージより小柄というか、背が低いと言うか・

・
「えーと女神様？なんというかアナタ・・・ずいぶん子供っぽいと言いますか・・・」

俺が言葉を濁していると、黒い翼の女神は俺を不思議そうな目をして見上げた

子供の体をしている俺を見上げたのである

その不自然な事に気付いた女神は一瞬硬直し、自分の手を見つめて、さらに腕に視線を移し

その後、下を向いて体全体を見渡した

「な、なんだこりやああああ！！！」

驚愕に満ちた悲鳴が、俺よりずっと小柄な、子供にしか見えない女神から発せられた

非凡

長い間封印され、俺の手によって解放された黒髪の女神モリアンは部屋の隅で膝を抱えて落ち込んでいる

「まあ……そのうち何かいいことあるって」
あまり独創的ではない言葉をかけ、俺よりも小さい体をした女神の肩を叩いた

「だいたいアナタ神様でしょう」

2、3億年くらい生きてるんだから、体が若返ったぐらいでそんな落ち込んでも」

膝を抱えた女神は、少し顔を上げてポツリと呟いた

「私が捕らえた時、20でしたよ」

「20？何が？」

「歳」

「誰の？」

「私の」

へえ、20で……

若っ！

「ち、ちよつと待って！20！？そりゃちよつと若すぎないか！？普通神様ってのは人間が火を使い始めた頃から生きてるとか、そういうもんじゃないの！？」

「神様神様って言いますけど私人間ですよ」

「嘘つけ。人間にはそんな羽生えてねーよ」

俺が女神の背中に生えている翼を指さすと、女神は細い腕を後ろにまわし、少し上に動かした

「羽って、これの事ですか？」

「取れた!!!？」

「だいたいね、神様なんてそんな都合のいいものがそんなにホイホ

「イいるわけないでしょ」

「異世界から来た勇者なんて都合のいいものはいるのに神様はいないの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「まあそれはさておき」

「さておかれた」

「少し私の事についてお話しする必要があるようですね」

「神様と見せかけてただの人間だったこの子供」

「そりゃあちよつと興味あるなあ」

「そう思った俺はその場に腰を下ろした」

モリアンの生まれた家は、小麦を扱うごく平凡な商人の家だった

父は堅実な手腕と良質の小麦で一代でそこその財と名声を築き上げ特権階級層や政治に人並みの不満を抱いていたが、納税は欠かした事がない善良な一市民だった

母は元々は父の事業の秘書を務めていた女性で、優れた事務処理能力で父を補佐していた

母は家事能力にも富んだ女性で、結婚後、家庭の主導権は完全に母が握っていた

そんな母に父は家庭でも仕事場でも頭が上がりなかった

そんな2人の間に生まれたのが、後に女神と呼ばれるモリアンだった

「めっちゃくちゃ普通じゃん」

「そりゃそうでしょう」

「俺としてはドラゴンに育てられたとか、特殊能力を移植されたとかそういうのを期待してたんだが」

モリアンの子供時代は両親と同じく、ごく平凡なものだった

艶のある美しい黒髪と、凜とした顔立ちで人目を引くことが多々あったが

「自慢か」

「事実です」

平凡であったはずのモリアンの日常はある日を境に狂い始めた。モリアンが住んでいた町には、過去に使われていたゴーレムと呼ばれる巨大な石人形を復活させる研究をしている魔術師が1人いた。軍にその技術を売り、巨万の富を得ようとしていたのである。

半年もの月日を費やして、その研究はついに最終段階の起動実験を残すのみとなった。

しかしその実験は何らかのミスにより失敗。

失敗の原因は寝食を忘れて研究に没頭した魔術師が集中力を欠いたからだ。

はたまた単純に魔術師本人の技術力が足りなかったから。石人形に仕掛けられていた古代人のトラップが作動したからなどの様々な噂が流れたが。

真相はまだわかっていない。

結果、実験に使われていた石人形は制御不能状態に陥り、町を破壊し始めた。

町は突如現れた破壊者によって混乱、逃げ惑う人々で溢れかえった。その中に当然モリアンもいた。

当時5歳、幼かったモリアンは不運にも両親とはぐれてしまい。

右も左もわからず混乱に支配された町を逃げ回っていた。

そして更に不運な事に、偶然にも暴れまわる巨大な石人形の前に飛び出してしまったのである。

石人形の足が黒髪の少女に襲いかかる。

その場に居合わせた人々はこれから起こるであろう悲劇に絶望したが、その時人々が予想だにできなかった出来事が起きた。

目の前の巨大な恐怖に怯えて動けなくなつた少女の周囲に薄い光の幕が現れたかと思うと

それが巨大な光の矢となり、石人形へ襲いかかったのである

光の矢の一撃を真正面から受けた石人形は、眩い光を全身から放ちながら粉々に砕け散つた

「あ、わかつた。たつた5歳の子供がゴーレムを一撃で破壊した事に町の人々は恐怖して

あれは人間ではない。怪物だ。とか言つてアナタを殺そうとしたんだろ

で、人間の心の醜悪さに絶望して人類を絶滅させようとか決意したんだろ」

「全然違います」

町の人々は脅威が去つた事と、被害は軽傷を負つた人が数人のみに止まつた事を祝つたため

そして一躍英雄となつたモリアンを称えて宴を開いた

石人形が暴れまわつた事など忘れるかのように人々は陽気に歌つて踊つた

が、その宴の主役であるモリアンは所詮は子供。眠たくなつたのでさっさと寝てしまつた

それから数年後、成長したモリアンは巨大な石人形を破壊した力を完璧に使いこなせるようになっていた

と言つても何か特別な訓練をしたというわけではない

ただ単に月日が流れただけである

どんどん成長していくと、モリアンは自分は生まれつき

熟練した魔術師をも凌駕する魔力を持っているのではないかと考え

始めた

自分の魔力にも、古代人の魔力にも興味を持っていたモリアンは、両親に古代の魔法の勉強をさせてほしいと頼んだ。両親は快く承知し、石人形を復活させようと研究していた魔術師が保管していた本を買い取り

ちなみにこの時、例の石人形の復活に失敗した魔術師は自分には魔法は向いていないと自覚し

魔術師の道を諦め、パン屋を営んでいた。最初は町の人たちは友好的ではなかったが

あの時、大した被害は出てなかった事と、この元魔術師が焼くパンは非常に美味しかったので

数年間のうちにすっかりあの事件の事は暗黙のうちに許されていた。買ってもらった本は、自分でも驚くほど理解ができ、砂漠にこぼした水のように本の知識を吸い込んでいった

その本を読破してしまったモリアンに両親は都会から本を取り寄せたり、取引で出かけた先で手に入れた本をモリアンに与え

その才能を伸ばす最高の環境を揃え続けてくれた

そしてさらに1、2年後、古代人の残したほとんどの秘術を身につけたモリアンは

その強大な力を人々の為に役立てようと決心したのである

「ほう。そりや偉いな」

「でしよう?」

「普通、すごい力を手に入れた奴ってのは、傲慢な態度で他人を見下したり

ひどい奴になると世界征服とか企んだりするのに」

「親の躰がよかったんですよ」

では具体的にどのような事をすれば世の中の為になるだろうか
平和な時代なら怪我人の治療や災害時の救助活動などに力を尽くせばよいが

当時は魔族との戦争が激化していた

となると、戦いの中で人を助けるのが最良だ

自分の強大な魔力を使えば、軍は魔族に簡単に勝つ事ができるだろう
そうすれば不本意な死を受け入れざるを得ない兵士は減り

自慢の息子や父、愛する恋人や夫の生還を喜ぶ人々の笑顔が増える・

.....

などという事は考えてなかった

「考えてなかったのかよ！」

「そりやそうでしょう。当時10歳ぐらいだった私にそんな達観したような事を

思いつけて言う方が無理ってモンでしょ」

「それもそうだ」

「で、具体的に何をしたかというと.....」

「あ、わかった。戦いでピンチになってる所に駆けつけて、『待て
いっ！』って叫んで注意を引いて

みんなが注目してる中で何かカツコイイこと語って

うるたえた魔族が『き、貴様何者だ！』って聞いてきたら

『貴様等に名乗る名は無いつ！』とか言ってたんだろ」

「全然違います」

光柱

モリアンは12歳になった時、自身の考えていた事を実行に移そう
と思っていた

世の中の為に戦う

それをするには具体的にどうすればいいか

やはり軍に入るべきだろうか？いや、軍はマズい

強大な魔力を持った自分が入れば、古参の軍属の魔術師は快く思わ
ないかもしれない

もしかしたら捕まって解剖とかされてしまつかもしれない

それに私力ワイイから、荒くれの軍人の中にいたら襲われちゃうか
もしれないし・・・いやん

「それは絶対ねーから安心しろ」

「なにおう」

解剖されない為に、目立つ事は避けたい

となると、やはり戦場に突如現れて魔族の部隊を攻撃し、すぐに逃
げるという方法が最善だと思われる

その為にはどこで戦いが起きるか把握する事が大切だ

そんなわけでモリアンは軍の中枢部があるイメンマ八という都市へ
と行き、軍の重要機密を盗み見することにした

参謀室や、会議室は当然ながら厳しい警備の中にあつた

しかし秘術を習得したモリアンの前では、警備など無いも同然だった

まずは秘術により、自分を透明にし、警備兵に見えないようにする
これにより、将官にでもならない限り入れないような所でも自由に
行き来できた

たまたま鍵がかかっている部屋もあったが、空間を跳躍する秘術で問題なく入り込めた

「なんか秘術って魔法以上に便利だな」

「私も実際使ってみるまで半信半疑でしたからね

本当に鍵のかかっている部屋の中に入れた時は驚いたもんですよ」

そうして手にした、大規模な戦いについての計画や作戦

必要経費や投入する兵力などが整理して記録されている重要書類には、驚くべき事実が記されていた

その大規模な戦いの決行日時は、正にこの書類を手にした日だったのである

それを知ったモリアンは侵入がバレないように、手にしていた書類を元の場所に戻すと

足早に参謀室を後にした

「あれ？仮に侵入がバレたとしても、その時は軍とまったく関係が無かったんだから

バレる可能性は皆無じゃん。片付ける必要は無かったんじゃないかな？」

「人の部屋に入って、散らかしたものを片付けずに帰るのは失礼でしょう」

勝手に入っという失礼も何もないんじゃないかなあ

そう思いながら、ちよつと感覚がズレた黒髪の少女を見やった

「で、急いで書類に書かれてた地点に走っていったのですが……」

「走って？空飛んだりワープしたりじゃなくて？」

「それを長距離やると走るより疲れるんですよ」
「疲れるんだ」

モリアンが戦場であるセンマイ平原についた頃、戦いは既に始まっていた

とりあえず平原全体を見渡せる高台に上り、双眼鏡を覗き、戦場を見渡した

東側には鋼鉄の鎧に包まれ、身の丈ほどもある大剣を手にした兵士達が整列している

鋼鉄の鎧の群れの中心には獅子が描かれている旗が掲げられている
どうやら東側が人間側のようにだ

西側には無秩序に群がっているゴブリン達が

「え？ゴブリン？ゴブリンって斧持っててあんま強くないあのゴブリン？」

「ええ、あのゴブリン。ちゃんと斧も持ってましたよ」

「俺でも簡単に倒せちゃうゴブリン対鋼鉄の鎧を着た兵士達じゃあ人間側の圧勝じゃん」

「それが・・・私がついた頃には先頭集団がぶつかり合っていたんですけど」

人間側のが押されてたんですよ」

「えっ、押されてたの!？」

「しかも人間側は3人1組で敵1体を相手にしてましたが押されました」

「人間弱っ」

押され気味と見た人間側の指揮官は、前線部隊に一時撤退を命じた

魔族側も損害が少なくなかったので、敵が退いていくのを見て同じく後退した

そしてゴブリンたちは再び無秩序な隊列を編成して突撃

負傷兵の治療や破損した武器の交換が済んでいなかった人間側は突撃の威力を抑えるため

傷の少ない兵に全身が隠れるほどの大きさの褐色の盾を持たせ、緩やかな円状に陣を組み衝撃に備えた

薄い灰色の塊が雄叫びと砂埃を上げながら褐色の楕円へと迫る

両軍がぶつかり合う正にその時、ゴブリンの群れの側面を巨大な光の柱が貫いた

光の柱が通過した場所は焦土と化し、そこにいたゴブリンは分子へと還元していた

生き残ったゴブリン達が反射的に、急に戦力の1割を地面ごと削り取った光の柱が放たれた方向へと振り向くと

そこにはたった一人、ろくに武装もしていない黒髪の人間の女が立っているだけであつた

不気味な恐怖心に駆られた指揮官の黄金に輝くゴブリンが、その恐怖心を振り払うかのように

黒髪の人間へと突撃を命じるとゴブリン達は斧を振り上げ、雄叫びを上げながらその方向へと走り出す

モリアンはそのまま立ちっぱなしのまままでいたが、ゴブリンが一定の距離まで近付くと

腕を振り上げ、体を捻らせながら宙へと飛翔した

人間が空を飛んだ。その事態にゴブリンたちはあっけに取られていたが

我を取り戻したゴブリンから己の手持ちの武器をその人間へと投げつけた

弓を持っているゴブリン達も次々と矢を放つ

空中で静止している人間の前方を無数の凶器が埋め尽くす。あれで

は逃げ場は無い。間違いなく殺った
攻撃を仕掛けたものは皆そう思っていたが、現実はその進まなかつた

モリアンがゆっくりと腕を交差させ、その数倍の速度で両側へと水平に腕を伸ばした

するとモリアンの体を巨大な半透明の球体が包む

その球体に放たれた凶器がぶつかった瞬間、数倍の速度で弾き飛ばし、その凶器を放ったゴ布林達へと襲い掛かった

自らの武器でゴ布林達は負傷していく

さらにその側面から優勢と見た人間達の軍が喚声を上げながら全軍で突撃をかけてきた

どんどん味方の兵が飲み込まれていく

その事態を見た黄金のゴ布林は勝機は無いと悟り、全軍に撤退命令を出した

撤退していく敵を見た人間側の指揮官は、負傷兵が少なくないこの状況では追撃は無理だと思い

突撃停止を指示し、傷ついた兵の救助と治療を命じた

自身は急に現れ、巨大な援護をしてくれた人物に礼をしようと戦場を探してみたが見つからない

前衛にいた兵にその人物を知らないかと訪ねてみると、意外な答えが返ってきた

敵の大多数を消滅させた人物は空に浮いたまま敵の撤退を確認するとそのまま消えてしまったという。例えなどではなく、本当に消えたらしい

他の兵に聞いてみても同じ答えが返ってきた

人が消える。そんな事があるのだろうか

いや、宙に浮き、敵の大多数を消滅させるなんて事自体が人間には到底不可能な事だ

ではあの人物は何者か

急に現れた謎の人物が侵攻してきた敵軍を消滅させる

その噂は瞬く間に人々の間に広がった

街中はその人物の話題で溢れかえっている

その状況を見たモリアンはローブを着て布で顔を隠し、酒場や広場でその話をしている人々に

「その人物は美しく長い黒髪をしていてスタイルがよく、素晴らしい美貌を持った女性らしい」という噂を流した

「なんでそんなわけのわからん事をしたんだ」

「せつかくだから真実を人々に伝えた方がいいと思つて」

「真実う……?」

「で、その結果その人物は世界を救うために降臨した女神だつて事になつて

私が女神として持ち上げられる事に……」

「ほーら言わんこつちやない。カツコつけて消えたりするから」

その後も戦場に度々顔を出し、圧倒的な力で敵を粉碎していった

魔族達はその力になす術も無く敗北し、人間達は差し出された勝利を甘受し続けていた

兵士の死が少なく済み、相手が撤退する

それは理想的な状況だったのだが、その勝利があつた戦場には一つの不思議な点があつた

戦いが起きれば武器は折れ、防具は砕ける

そうなつた武器は戦場では当然捨てられる。だが戦いがあつた翌日にその戦場に行ってみると

捨てられていた武器が全て消えているのだ

人々は女神の発した力により武器が消滅したとか、人の考えの及ぶ所ではない神々の意志により何か起きたただとか色々な予測が飛び交ったが、事實は違っていた

戦いが終わり、全ての兵士が故郷へと帰り、戦場から誰もいなかった夜

月の光に照らされて一人、戦場を歩き回っている人物がいる
それはその戦いでまたも圧倒的な力で敵軍を一撃の下に粉碎し、戦場から音も無く消えたモリアンだった

モリアンは目を凝らしながら戦場を歩き回り、捨てられている武器を拾い集めていた

そう、モリアンは廃棄された武器をこっそりと回収し、鍛冶屋や武器屋に売り払っていたのだ

「せこっ！」

「そうは言ってもあの時の私には他に収入が無かったんですよ
親に勉強させてもらった恩を返したり、家に生活費とか入れなきゃいけないかったし」

「生活費って………妙に所帯染みた話だな」

「そりゃそうでしょう。私だって霞を食って暮らすってワケにはいかないんだし」

「そうは言ってもな。その便利な秘術で何も無いところから食い物を作り出すとかできなかったの？」

「そんな事できるなら魔族は侵略戦争なんか挑んでこないでしょ」

「それもそうだ」

切札

戦いに出れば、どこからともなく現れるあの黒髪が部隊を一瞬で消滅させてしまう

たまに出てこないこともあったが、もしかしたら急に出てきて

あの光の柱でまた部隊を焼くかもしれない

そしてその光の柱が通過する場所は、今まさに自分が立っている地点かもしれない

その見えざる恐怖心が兵の心を圧迫し、実力を十分に発揮できずに人間の軍に押しつぶされていた

魔族は正に最悪の状況下に置かれていた

ではどうしたらこの状況を乗り越えられるか

答えは簡単だ。あの黒髪を倒せばいい

しかし言うのは簡単だが、実際にやるとなるとそれは困難を極めたなにしる奴は浮くのだから歩兵による攻撃は効果がない

弓兵による一斉射撃も試みたが、奴を包み込むようにして発生する半透明の球体によって矢は全て弾かれてしまう

魔法による攻撃も、同じ様に弾かれた

一度、空を自由に飛び回ることができ、接近戦能力、魔法戦闘能力に富んだ

上級魔族ガーゴイルのみで編成した精鋭部隊をぶつけてみたが結果は見事なまでに惨敗

たった5分で精鋭部隊の大半を失うという最悪の結果に終わった

完全に追い詰められた魔族の首脳部は、現在の状況を打開する斬新な方法を見出すべく

毎日のように会議を続けていたが、ロクな案を出せずに時間だけを空費し続けていた

ある日、いつものように結論が出ない会議をしていると、ある案が遠慮がちに提出された

その案を聞いた途端、会議に出席していた魔族の大半は蒼白な顔をして反対した

しかし、冷静に考えてみるとそれ意外に解決法は無い
仮にあつたとしても、早急にそんな理想的な案が出せるとは考えられない

多数決の結果、賛成多数でその案が採用された
忌まわしき禁呪法が公式に認められた瞬間だつた

「禁呪法？なにそれ」

「簡単に言えば、あまりの破壊力と危険性を持った制御困難な魔法ね
あんまり危険だから封印されて、誰も使っちゃいけないって事になつたらしいけど」

「へえ〜。よく知ってるね」

「秘術のお勉強をしている時にたまたま本に載ってたの」

「しかし魔法って色々あるんだな」

「あ、そうそう。念の為言つとくけど、今話してるのは実際にあつたことと

集めた情報から組み立てた仮定だからね

実際に魔族の会議覗いたり聞いたりしたわけじゃないから」

「そりゃそうだろ」

禁呪法を復活させるために魔族は一時的に全面撤退をせざるをえなかった

こうしてエリンに一時の平和が訪れたのである

魔族の再侵攻を危惧して、それに備えて自らを高めるべく修行を積み重ねていた一部の人を除いて

束の間の平和を満喫していた

「で、モリアンはその平和に溺れず、自らを高める修行に精を出していたってわけだね」

「え？いや、その間暇だったからレストランでバイトしてた」

「バイト！？」

「しょうがないでしょ」

戦いが起きなかつたら収入がないんだから

でも、そのおかげで料理の腕は上がったよ」

「すっげーどうでもいいな」

「しかし、私とてただ無為に時間を浪費していた訳じゃないの

近い未来、来るであろう決戦に向けてバイト代と、自分の持てる全ての魔力をつぎ込んで

この服と羽を完成させたの」

「ほう。ということとは、その黒い羽はただの飾りじゃなく、すごく強力な魔法武器で

その服はただ露出度が高いだけの服ってわけじゃなく、特殊な糸で編まれた魔法装甲とかってわけだね」

「え？羽はただ飾りで、服はただの服だよ」

「ええっ！？炎を無効化できるとか、そういう特殊効果とかついてないの？」

「ついてないの」

「何でそんなもんに魔力つき込んだんだ」

「付けた人の意思で羽はたかせるようにするのに凄く苦労しました」

「死ぬほどどうでもいいな」

「ちなみに服の方はデザインに苦労しました」

「銀河系一どうでもいいな」

そして6年後、実験と検証を繰り返して、少くない犠牲を払って禁呪法を実用段階までこぎつけた魔族達は

大軍を率いて再侵攻を開始した

ある地点まで進軍すると、人間の軍が出てきた

このまま交戦し、こちらが敵を押し続けければ、まず間違いなくあの黒髪が出てくるだろう

そうしたら奴に禁呪法をぶつけ、一撃の下に消滅させる

この時魔族が持ち出してきた禁呪法は、特殊な魔力増幅器を中心にして

10人の魔術師が一度に詠唱することで初めて発動に成功した純粹なる破壊の魔法だった

これを地上の標的に撃てば、一瞬にして1000以上の敵兵を葬り去ることができるだろう

しかし、この禁呪法はその余りにも高すぎる破壊力によって、それが通過した地面は回復不可能な痛撃を被ることになる

それを地上の敵に撃てば、同時に死の直線を作り出すことになる。資源を求めて侵略戦を挑んでいる以上、征服する予定の地を傷つけることは極力避けなければならない

その点、奴は空中にいる。地上への被害は少なくて済むだろう

最終目的を果たすために魔族の軍は前線に堅陣を敷き、それに隠れるようにして

魔術師達を後方に配置して、いつでも禁呪法を撃てるように準備させた

この時前線で、敵の目を誤魔化す役目をした兵は、6年前の無秩序な部隊とは違い

統率のとれた俊敏な動きをする兵士達だった

6年間のうちに兵士達に厳しい訓練を積み重ねさせて兵の質を高め

たのである

しかし6年間のうちに兵を鍛え上げたのは魔族だけではなかった
前線に出てきた人間の軍もまた6年間を無駄に過ごさずに訓練を続
けてきた精兵揃いだった

前線の精兵同士がぶつかり合い、戦いが始まった

兵力はほぼ互角だったが、禁呪法の部隊を隠さなければならぬ分、
魔族の方が不利だった

さらに魔族の不利を決定的にしたのは、一人の傑出した戦闘能力を
持つ戦士の存在だった

奇跡の魔術師、マウラス・グイディオンである

「おお、あの爺さんか」

「知ってるの？」

「えーっと……知り合いの友達の父親だったかな」

「複雑ですね」

傑出した力は、剣で布を断つかのように魔族の部隊を引き裂いてい
った

魔族の指揮官達はあの黒髪を倒したとしても、奴が新たな驚異と
して立ちはだかるだろう

ここは、はやいとこ奴を禁呪法にて打ち破り

今前線で縦横無尽に暴れ回っている敵に戦力を削られすぎないうち
に撤退をしたい

作戦を知る魔族は誰もがそう考えていた

が、しかし不幸にも想定外の事がこの場に起こっていた

いくら待っても例の黒髪が現れないのである

まさかこの作戦が見破られたのだろうか

有り得ない事ではないが、見破るには材料が少なすぎる

まさか奴は、我々が6年間出てこなかったという事実のみで看破しえたというのか

だとしたら、奴は人間達が言うように、本当に神なのではないだろうか

我々はそんな奴を相手にしてしまったのか

そんな無形の恐怖が魔族軍をほとんど包みかけていた頃、マウラスを始めとする精兵達に防衛網は崩され

陣の中心に乗り込まれ、打ち込まれた火炎魔法によって魔力増幅器は破壊。魔術師達もやられてしまい

禁呪法を使える可能性は消されてしまった。この時点で魔族は撤退以外の道は残されていなかった

こうして6年ぶりの戦いは人間の快勝で終わり、幕を閉じた

「いや、すごいな。敵の作戦を見破ってたのか？」

「え？まさか。あの時はたまたま風邪を引いてて外に出れなかっただけだよ」

「風邪え！？」

「うん。熱が37度5分ぐらい出て」

「しかも大した事ない熱じゃん。でも風邪引いてついてたじゃないかもし戦いに行ってたなら、禁呪法で吹き飛ばされてただろ」

「ううん。そんな事ないよ

禁呪法って言っても結局は直線的な破壊魔法だから、空間を捻じ曲げてそこに魔法を吸い込ませるか

それが自分自身を一時的に異空間に飛ばしてやりすごせばいいんだし」

「え、そんな事できんの？」

「秘術だからね」

「じゃあ魔族は6年も使って何やってんだ」

「アホ丸出しだね」

流言

その日魔族の部隊を壊滅し、敗走させるに至らせた功労者である精鋭部隊の兵士達に

一人一人に名誉勲章が贈られ、その戦果を祝う盛大なパーティが行われた

しかしそこには一番の功労者、マウラス・グイディオンの姿は無かった

戦いが終わった直後、マウラスは姿を消したのである

その場に居合わせた兵士の証言によると

マウラスは自分は裏切られたと言い、マナの満ちたムーンゲートへと飛び込んだらしい

裏切りとは一体何か。あの戦いの中で一体何があったのか

それを確かめる術はモリアンには無い

その日、風邪ひいて寝ていたからである

そして魔族を撃退してから一年の歳月が流れたある日、奇妙な噂が人々の間に流れ始めた

7年前、魔族の軍を圧倒的な力で撃退し続けた黒髪の女神が魔族に寝返ったという

その噂を聞いてモリアンは飛び上がるほど驚いた

だって黒髪の女神って自分の事じゃん

で、自分は最近魔族が攻めてこないからレストランでバイトしてたじゃん

なのに魔族に裏切ったってどういうことよ

誰よそんなこと言ってるの

濡れ衣を晴らしたいが、まさか自分が女神で、裏切ってないよーとか言ってるわけにはいかない

下手したら頭のおかしい奴だとか思われかねない

とりあえず詳しい情報を集める事にした

裏切りの情報を持ってきた人に訊ねてみると、その噂はタラというこの町から南にある都会で耳にしたという

その情報を得るとモリアンはこれからの行動を即断し、長期休暇届を出す

足早に自宅へと戻り、両親に都会に行つてくると伝えるとそれなりの金銭を持って公営の馬車へと乗り込んだ

馬車に揺られながらなぜこんな噂が流れたか考えを巡らせてみたが、特にこれといった考えが浮かばなかった

こんな事考えてもあんまり楽しくないので、これから行く都会はどんなものなのかと思いを馳せて楽しんだ

「のん気だな」

「えー、だって初めて行く街だもん。想像ぐらいするよ」

「その気持ちはわからなくてもないが、状況がねえ……………」

……………」

至る所に色とりどりの花が咲き乱れている

周りには白を基調とした色彩の大きなレンガ作りの建物が秩序ある配列で並んでいて

道路は磨かれた大理石で舗装され、埃一つ落ちていないほど清掃されていた

その上を、目が眩むほどの煌びやかな服と宝石が散りばめられた装飾品を身につけた人々が行き来している

恐らくこの住民達だろう

まるで童話の中の存在のような街。それがタラだった

「なんかタラってすげーな」

「首都とはいえ、あれほど飾りたてられた所だとは私も思わなかったわ」

「そんだけ金が有り余ってるんなら、銀行から札束2、3個無くなくても気付かないんじゃないかな」

「普通に捕まるよ」

空想のような風景にいつまでも見とれている訳にはいかない

それに、こんな所でボーっと突っ立っていたら田舎者だと思われるしまう

そう思うとモリアンは適当に道にそって歩きながら、当初の目的である濡れ衣の噂の元を探るべく行動を開始した

しかしどうすればいいのだろう

まさかその辺を歩いている人に

「すみません。自分女神とか言われてるもんなんすけど

自分人類を裏切ったとか噂されてんすけど、詳しいこと知らないっすか」

なんて聞くわけにはいかないだろう

神の名を騙って不穏な噂を流した不届き極まりない奴とか言われて捕まっても困るし

とりあえず健全な発想は健全な精神状態から生まれる

健全な精神状態になる為には、まずこの目の前にある美味しい料理を出しそうな店に入る必要がある

では崇高なる目的の為にはいたしかたあるまい。と扉を開いて店の中へと入っていった

一時間ほどかけて精神と胃袋を健全な状態にすると、さらに精神を充実させる為

この美しい街を見てまわり、素晴らしい衣料品や装飾品を手に入れる必要性が出てきた

さらにその後はロイヤルティーとケーキで精神を更なる高みへと・
・
・
・
・
・

「遊んでばっかじゃないか！」

「いや、違うよ。これは真実を探る為に必要不可欠な行為であって・
・
・
・
・
・

あ、そうそう。このネックレスはその時買ったやつなんだー

いいでしょ。でもあげないよ

「いらんわー！」

3日ほどかけて精神を最高の状態にすると、当初の目的を晴らす気になった

というわけで噂の真相を確かめるべく、高級そうなベッドの上で羽毛布団にくるまって考えをめぐらせた

火のない所に煙は立たない

噂が流れたのなら、必ず発火点があるはずだ

この火はどのような物か

深く考えれば、推理の野は無限に広がるので、ある仮定を立ててそこから歩を進めてみよう

何者かが面白半分で、もしくは強い憎しみの念に駆られて噂を着火したのか

いや、そうは考えにくい

人類の救世主として大勢の魔族を倒してきた「女神」に対する人々

の信頼は絶大だ

その「女神」が裏切ったという話を誰がするというのか
仮に言ったとしても、それを信じる者は何人いるか

しかし、何らかの証拠に基づいた噂ならば人々の信用を得ることは
可能だ

しかし「女神」である自分は裏切ってはいないので、この証拠は真
実ではない

となると、何者かによる捏造

しかしそうまでして噂を流して一体誰が得をするというのか・・・

ここでモリアンの頭脳に電撃が走る

そうか、流したのは人間じゃない。魔族だ

敵対している魔族なら虚実を作り上げ、噂を流す可能性は充分にある
恐らくこんな感じだろう

「女神」から人心を遠ざけ、危機感を募らせた所で魔族の誰かが「
女神」に扮して人間を攻撃

疑惑を確信に変えた所で大軍を率いてエリンに攻め込む

そうすれば「女神」は人間の前に姿を現し、人間達の為に戦いに挑
むだろう

しかし人間達はそうは思わない。魔族と共に自分達を滅ぼしにきた
と考えるだろう

人間達は自分の身を守るために「女神」を攻撃する。人間を守るべ
き「女神」は人間達には攻撃は出来ないが

身を守るためにやはり襲ってきた人間に反撃するだろう

両者が共食いで消耗した所で待機していた魔族の軍は一斉に攻撃を
しかけて両者を叩き潰す

こうすれば魔族は楽に敵を潰せるのだ

そうか。魔族はこれを狙っているのかもしれない

「げえーっ、すげえ策略。よくもまあこんなおっかない事を魔族は考え付くもんだ」

しかしよくこんな見破れたな」

「いやー、この考えにたどり着いた時は背筋が凍ったわ」

「ふうん……それよりさ、布団の中でこの考えに行き着いたんだよね」

タラ行く必要なかったら」

「……………」

「……………」

「そうそう、この話にはまだ続きがあるの」

「無視された！」

仕掛

魔族の策略を見破ったモリアンは、その策を成功させない為に行動を開始した

まずは4日ほどタラで観光を楽しんだ後

「はよ行動しろ」

魔族の本拠地に乗り込む決心を固めた

実家に戻り、まずは所々に金属の糸で幾何学的な模様が編み込まれている肩の露出した白い服

さらに腰に小さい箆のような毛がくっついている鎖を腰につけ、背中には黒い羽を装着する

戦闘用の衣装に身を包むと、消耗した魔力を回復させる薬品や小さな保存食を布のカバンに詰めた

そのカバンを肩から下げて出発する準備は整った

しかしここで思わぬハプニングが発生

魔族の本拠地にどうやっていけばいいのかわからないのだ

しかし方法はあった

なんてことはない。どうやって行けばいいのかわからないのならこちらで勝手に道を作ってしまうればいい

空間を跳躍して姿を消すことが出来るのだから、その応用で空間に穴を開け

その先を魔族の気配が強い場所に接続すればいいのだ

「え？そんな事可能なのか？」

「もちろん。私を救出する時、4つの封印装置に通じる扉を出したでしょ

あれもその応用みたいなもんだし」

とは言ってもまさかその辺に入り口を作るわけにはいかない
その入り口を逆に利用されて大軍で攻め込まれたら困るからだ
それに、何も知らない子供とかが好奇心を満たそうとする本能のま
まにそれに触れ
魔族の地へご招待。なんて事になったらもつと困る

どこかに適当な場所はないだろうか
人が寄りつかなくて、魔族が逆流しても、そうそう突破されないよ
うな複雑な道があるような所が理想的だ
地図を広げて、その上に指先を滑らせながら条件を満たせそうな場
所を探し始める
そしてある場所を指した所で指を止めた

放棄された廃坑。これだ。これこそが条件を満たした理想的な物件だ
昔はミスリルとかいう特殊な鉱石が取れたらしいが
今では鉱脈を掘り尽くされたらしく、破棄され
元々鉱山街として活気にあふれていた周辺の街も人っ子1人いない
という有り様だ
その街の名前は………バンホール

「え？バンホール？」
「知ってるの？」>/br>
「ああ、俺がここに来るのに使った通路もバンホールの鉱山なんだ」
「へえ。じゃ、最深部にでっかいカツコイイ扉あったでしょ
あれ作ったの私」
「あの悪趣味な扉か……でもバンホール今廃坑じゃないぞ」

「え、マジ？」

「うん。マジ。街も鉞夫で溢れかえってるぞ」

「じゃあもしかして新しい鉞脈が見つかったのかな」

「あと、その坑道、魔族の拠点みたいな事になってるぞ」

「うっそー。マジ？」

「うんマジ。どう考えてもその扉のせいで拠点が築かれたみたいだぞ入るのに魔族の作った通行証とか必要になってるし」

「ええ、完全に利用されてんじゃない。へこむなあ」

明かりのない放棄された坑道を、手のひらの上に浮かべた火球から発せられる光のみを頼りに奥へと進んでいく

不意に現れた侵入者を鳴き声で威嚇するネズミと

自分よりずっと大きな生き物の気配を感知してその場から飛び去る
コウモリ数匹に遭遇しつつ

最深部と思われる場所に到着した

途切れたトロツコの線路と、刃が欠けて破棄されたツルハシが転がっている

その先にある土と石の塊の壁に、秘術で作り出した小さな魔力の球をぶつける

土と石の塊に接触した瞬間、魔力の球は閃光と轟音を発しながら碎け散り、土煙を舞い上げた

その土煙が晴れると、壁があつた場所には反時計回りに回る黒い渦が出来ていた

魔族の本拠地につながる、作りたての通路だ

これを安定させるために扉を作る

右手をだらりと前に突き出し、手首を捻らせ、手をくいつと上げたその手の動きに連動して地面から二本の石の柱が盛り上がってくる完全に地面から柱が出ると二本の柱の頂点からさらに石の棒が出現

し、中心へと向かって伸びる
お互いがぶつかり合うとその棒は同化し、二本の柱をつないだ
さらに柱の内側から薄い板状の石が生え、開閉する部分となる
これで扉は完成した

「なんだその無駄に派手な扉の作り方は」
「え？いや、昔の秘術使ってた人はみんなこうやって扉作ってたよ
街歩けばそこらへんから扉がニヨキニヨキと」
「なんて嫌な街なんだ」

扉を開き、魔族の地へと足を踏み入れた
敵地では油断は禁物。いつでも戦えるように警戒しながら一步を踏
み出した
しかしその警戒は無駄なものとなる
一步。まさにその一步を地へ降ろした時、モリアンの体に電撃が駆
け巡るような衝撃が走った
敵の待ち伏せだろうか？だとしたらなぜ正確にここに来る事がわか
ったのか？

その思考を最後に、モリアンの意識は薄れていった

「え？と言う事は・・・」
「そう。私は魔族の地に入ったその瞬間に罠にかかり、そのまま封
印されちゃったの」
「マジで！？うつわダセー」
「いや、あんなの普通見破れないでしょ！なんで一步目でいきなり
罠があるの！おかしいでしょ！」
「それを差し引いても・・・わざわざ戦闘用にカツつけた衣装を着

て一步目で撃沈・・・プツ」
「い、このお！」

「冷静に考えてみて」

「どんだけダサかったか？」

「ちがうわ！魔族の仕掛けた罠について！」

「罠？えーっと」

モリアンが一步踏み出した瞬間に罠にかけたんだよな

なぜモリアンが魔族の地に行ったかかって言うと、変な噂のせいで行かざるをえない状況になったからだよな

その噂とは、女神が人間を裏切ったということ

モリアンを罠にひっかけるのが最終目標だったとすると・・・

「まさか・・・その裏切りの噂自体が、モリアンを呼び寄せるために撒き餌だったってことか？」

「そう。これは私の予測だけど、その罠を考案した人物は人間、魔族共に信じきっていた事実

私が神であり、人知を超えた存在だという事が嘘だと見破ってたと言う事になるの

もし本当に神で、戦いのある場所にしか現れない存在のなら、そんな噂におびき寄せられるわけがないから」

「げげっ！スケールのかい撒き餌を撒いただけじゃなく、そんな事まで見破ってたのか」

モリアンが人差し指を額に当て、さらに続ける

「さらに、私が魔族の地へ移動する際に空間を歪めて直接乗り込むって事も見破り

今までの行動パターンや秘術による空間の跳躍距離のデータを計算して、私が現れる場所をあらかじめ予測してたって事になるわね」

「げげげっ！見破るだけじゃなくてそんな事まで読んでたのかよ
もしかして魔族側には小さい頃に姉を皇帝の後宮に入れられて帝国
を滅亡させる事を誓った戦争の天才とか

歴史家志望で戦争嫌いだけどお金ないから軍学校に入って、歴史学
んでたけど

その歴史を学ばしてくれてた学部が潰れちゃって嫌々軍人にならざ
るをえなくなつた戦略家とかいるんじゃないだろうな」

「いや、そんなのはいないと思うけど・・・」

「いないのか」

「ついでに言つと、あの時私は秘術で攻撃を防ぐ強力なシールドを
張っていたから

罾を仕掛けた相手は簡単にシールドすら破る魔力を持っていてると
見て間違いないのよ」

しかし、強力な魔力を持つてしかもそんな策略を考え付く頭のいい
奴がいるのか？

しかも魔族軍の最高司令官はあの、弓が弱点だとかバラしてなんか
射られてた黒い鎧の奴だ

あいつが罾を・・・？いやないな。魔法使えそうになかったし、な
んか見るからにアホっぽかったし

あれの部下にそんな凄いのがいるとも思えないし・・・

今まで聞いた今回の事件に関係ありそうな人物の名前を一人ずつ思
い浮かべていった

これも違う。あれも違うと名前を次から次へと流して行つたが、あ
る名前が来た瞬間、その流れは止まった

これだ。こいつだ。こいつなら魔力、智略共に条件を満たしている

「邪神だ・・・」

「え？」

「邪神キホール。モリアンを罾にハメたのは十中八九こいつだ」

「キホール？知らない名前だけど、それは一体？」

「いや、俺もよく知らないんだけど、魔族の全てを取り仕切ってる
すっごい奴らしい」

その力は俺らをネイルさんだとすると、奴はフリーザ様ってぐらい
強いらしい」

「えっ!? それってメチャクチャ強いんじゃない?」

「うん。なんかメチャクチャ強いらしいよ。さらに邪神って言ってく
らいだからこいつはマジもんの神っぽいし」

「私みたいに周りが勝手に作ったインスタントな神じゃないのね」

「神ならあのすげえ策略も納得できるよな」

「本物の神ねえ・・・そんなのどうやって倒せばいいのやら・・・
でも」

そういうとモリアンはゆっくりと立ち上がり、手に魔力を集中させた

「今はこの場にいる敵を片付ける必要があるわね」

アナタも気付いてるでしょ? どうやら敵に囲まれてるみたい」

正直に言つと、んなもん気付いてなかった

しかしここで「え? そうなの」とか言うのはいかにもマヌケだ

ここは話をあわせるのが最善の策と見た

「ああ・・・こつも殺気を漂わせてるんじゃない、気付かないってのが
無理ってもんだな」

なんか前にもこんな場面あったな

前回は山勘で敵のいる方向を言い当てようとしたが見事に外した

なんとか俺の冷静かつ迅速な対処で対応できて、わかってなかった
事はバレなかったが

しかし今回はあてずっぽうで外す心配はない

何故ならこの部屋に続く通路は一つしかないからだ。ならば敵はそ
こから入ってくるしかない

フッフッフ。この勝負、俺の勝ちのようだな

ならば精一杯カッコイイ事してみよう

「そこだッ!」

そう叫びながら勢いよく体を捻らせ、バスタードソード（武器屋で拾ったやつ）を入り口の方へと投げた
空気を裂いて入り口の方へと飛んでいく
よし、唯一の心配は入り口の近くの壁に当たってしまうという事だったが、それはないようだ
ちゃんと入り口の方に向かって飛んでる

しかしその時、俺達の周りに入り組んだ光の線が中に描かれている
円、魔方陣が10個ほど出現した
その中から中身の無い甲冑、ゴーストアーマーが出現した
沈黙する俺。何やってんだこいつって目でモリアンがこつちを見てる
バスタードソードが地面に落ちたらしく、乾いた金属音が通路の奥から響いた
気まずい空気が流れている

止水

心中は純粹な怒りで満たされていた
自分達を包囲している中身のない甲冑どものやった、非人道的な行
為を許すことはできなかったのだ

ちゃんと道があるというのに、それを無視して部屋の中にワープし
てくるとは

なんと卑劣な奴らか！

お陰でかかなくていい恥をかいてしまったではないか！

たとえ神が許したとしても、俺の中に流れる熱き正義の血が許さん！

「貴様らアアアアア！」

怒りの雄叫びを上げながら俺は卑劣な甲冑の一体に襲いかかった

その姿は正に邪悪な悪魔に立ち向かう正義の騎士

もしくは、間違ったのを勢いで誤魔化そうと試みる変な奴の姿だった

拳がゴーストアーマーの兜に叩きつけられた

兜はそのまま衝撃を加えられた方向へとすっ飛んでいき、わずかな

空中飛行の後

乾いた金属音を響かせて床に落ちた

目の前には首のない甲冑が出来上がっている

なぜか「殺人事件発生」という言葉が脳裏に浮かんだ

「なんだこりゃ。見かけの割にはすげー弱いじゃん」

意外そうな表情をしながら感じたままの言葉を漏らすと、モリアン
の方へと向き直った

「あ」

こちらの方に視線を向けたモリアンが呟く

視線は正確には俺の後ろの空間を指している

なんだろうと、視線をその先へと伝わせてみる

「え」

その先には首のない甲冑が腕を上げて、立ち尽くしていた
その腕の先にはもちろん剣が握られており、目がないのにどうやって
いるのか知らないが
俺を正確に狙いすましていた
考えるより先に体が動く
反射的に後方へと跳躍。体を捻らせ、3回転宙返りをして着地
直後、俺がいた空間を殺意に満ちた金属の刃が通過した
正に紙一重の回避

なんてカツコイイ事にはならなかった
避けようとはしたが、バツチリ失敗して右腕を斬られた
少量の血液を滴らせると例の異常再生能力が働き、傷口は跡形もな
く消え去った

「こ、こいつら何で首を落としたのにまだ動くんだ？」
モリアンが目をこちらに向ける

「え？知らないの？このゴーストアーマーは魔力を原動力としてい
る半自動戦闘機械だから

飾り物の頭を落としたぐらいじゃビクともしないよ」
「ええ〜そんなのアリかよ。攻撃してもダメージが無いとか詐欺じ
ゃん。ズルじゃん」

「それをお前が言うか」

10体の甲冑が包囲網をじわじわと狭めてくる

「このままじゃフクロにされちまうぜ。どうするよ」

モリアンは動じた様子も無く、冷静な表情で口を開く

「ゴーストアーマーはあの腹にある赤い核を破壊するか、甲冑を粉
々に破壊すれば動かなくなるけど

粉々にするのは無理として、核を狙っても当然ガードするでしょうね
一体を狙っても後ろから他のが斬りかかってくるでしょうし」

「ええーじゃどうすんだよ。秘術とかでなんとかできないの？」

「できるよ」

「できるのかよ！じゃあなんとかしてよ」

「なんとかするには時間かかるから、ちょっと時間稼いでくれる」

「時間稼ぎね・・・まかせとけ」

そういうと俺はガーゴイルソードを握り締め、口の端を少しつり上げると、一言呟いた

「ま、時間稼ぎのつもりで敵を全滅させないよう、せいぜい努力するかね」

決まった。カッコいい。カッコよすぎる

さすが俺だ。たまらん

後ろでモリアンが「マジで何だコイツ」って顔をしてるが、そんなのは見なかった事にして

自分達を包囲している甲冑共に躍りかかった

金属がぶつかり合う音が響く

80センチほどの棒状の鉄が周りの僅かな光を反射しながら高い音を立てて床に落ちた

振り下ろされた俺のガーゴイルソードをゴーストアーマーが剣で受け止めたのだが

力任せに振られた重量のある鉄塊の一撃に剣の方が耐えきれず中ほどから折れてしまったのである

目の前にいるのは、武器を失い丸腰と化した敵
いける。

肌でそう直感した俺は、相手の胸部で赤くぼんやり光る核目がけて巨大な曲刀からトドメの一撃を繰り出した

が、その瞬間、後ろから他のゴーストアーマーに蹴飛ばされた
「ぎゃっ！」

間抜けな声を出して前のめりに倒れる

起き上がり、蹴ってきたひどい奴に向き直ると
沸々とわき出てくる怒りを雄叫びに変え、怒りの対象へと突撃した
剣と剣がぶつかり合い、火花が散る
さらに一撃を加えようと剣を振り上げる
するとまた蹴られた

「ぎゃっ！」

また間抜けな声と共にコケた

向き直る

斬りかかる

蹴られる

コケる

これを延々と繰り返していると、モリアンが自分の戦いの記憶の中
から

現状と一致する物を探り当て、叫んだ

「あ、あれは集団戦闘最終奥義、死の往復運動!!」

「ええっ!?!これ最終奥義!?!」

「気をつけて!その技は多対一の時に最大の効果を発揮する最終奥
義!

一度かかれれば死ぬまで蹴り続けられる恐怖の技よ!」

「怖ーっ!

しかしさすが魔族。えげつない技を思いつくな」

「え?その技は元々聖騎士と呼ばれる人間の戦士達の間で編み出さ
れた最強の技だよ」

「聖騎士ダッツ!」

なんとかしてこの状況を打破しなくては
しかしどうしたらいい

立ち上がり、反撃に出れば背後から攻撃される

その攻撃で倒れ込み、再び立ち上がって反撃に出ればやはり背後を突かれる

一方的な攻撃の無限ループ。正に死の往復運動

どうにかしてこの無限ループから抜け出す事が出来れば……

……

反撃すれば後ろから攻撃が来るんだから……

あれをこうしたら……

いや、待てよ

その時、俺の頭脳に稲妻が走り、状況打破の閃きが脳を叩きつけた
これだ！

見えたぞ！水の一滴！

立ち上がり、剣を握りしめて敵に突撃する

もちろん背後の敵がそれに合わせて蹴りを繰り出してくる

当たるか当たらないか。正にその刹那、俺は弾かれたように横へと
跳躍した

ゴーストアーマーの足は空をきり、その先にある別のゴーストア
ーマーの足に突っ込んだ

激しい音が響き、蹴られたゴーストアーマーの脚具は砕け

蹴った方もバランスを崩してよろめいている

その無防備となったゴーストアーマーの核を一閃

間髪入れずに足を砕かれた方の核にも斬撃を叩き込んだ

核を失った二体のゴーストアーマーは非音楽的な金属音を大量生産
しながら

床に崩れ落ち、ただの甲冑と化した

「見たか！死の往復運動破れたり！」

そう勝利の叫びを上げた俺の魂は黄金の闘気で燃え上がって……

……

いなかった

「なんか釈然としねえ！」

何故だ

敵の奥義を破って二体もいつぺんに倒したのに、何故気分が高揚したりしないのだ

やっぱアレか？今の奥義はただ反撃せずに逃げちゃえば助かるような技だったからか！？

というよりあれ本当に奥義か！？

あれ最初に考えて奥義にしようとか思った奴は一体何考えてやがったんだ！？

アホか！

というよりアホだ！

あ、わかった！

きつとあの技は本当は奥義とかじゃなくて、俺をからかうためにモリアンが適当に奥義とか言ったんだ！

うん、そうに違いない！だってあんなしょうもない技を使う奴なんかいるわけねーし

そのしょうもない技でやられるアホな奴なんているわけが……

……

「す、すごい！人間の軍が3倍の魔族に囲まれた時に強大な威力を發揮して

その3倍の敵を全滅させたあの奥義をああも簡単に破るなんて！」「チキショー！アホばかりだった！！

共鳴

崩壊しかけの精神を立て直し、モリアンの方へ振り返る

「秘術とかいうやつやつの充填はまだk……………」

俺は目に入ってきた光景に度肝を抜かれて言葉を切ってしまった
なんか大変な事になってる

モリアンの周りに金色っぽいオーラみたいなのが湧き上がってる

その湧き上がっているオーラの動きに合わせて、黒い髪が揺れている
背中が翼が大きく広げられていて、なんかちよつと体が中に浮いている

「魔力の充電？今終わったよ」

「見たらわかるわい！」

ともかくこれはスゴいぞ

見た目からしてもうスゴい魔法とか撃ちそう

こんなゴーストアーマー10体……………いや、俺が2体倒
したから8体か

8体ぐらいあつさり吹き飛ばしたりしそうだ

巻き添えにならないように後ろに下がるように言われ、さっさと下
がった

俺が背後に回ったのを確認すると、モリアンは両手を前に突き出し、
聞きなれない言葉で詠唱を始めた

ゴーストアーマー達が盾を構えながらじりじりと近付いてくる

あと20歩。その距離まで敵が近付いてきた瞬間、モリアンが目を
見開き、呪文の名前らしき単語を叫んだ

その瞬間、眩い光が放たれ、モリアンの手のひらから巨大な円柱状
の光が発射された

その光はゴーストアーマー達を包み込み、殺意を持った甲冑を一瞬
にして溶解した鉄へと変化させた……………

なんて展開を期待していたのだが、そんな事はおきなかった
モリアンが叫んだ瞬間、確かに光は発せられたのだが
突き出された両手から発射されたのは高熱の光る円柱ではなく
なんか小さい火の玉が弱々しく出てきただけだった
その火の玉は発射地点から少し離れただけで床に落下し、消えた
なんか散々盛り上げてシヨボいを出したモリアンが唾然としている
身構えていたゴーストアーマー達も固まっている
後ろにいた俺も固まった
部屋中が凍りついた

やがて俺の一声が沈黙を破った

「何してんのお前」

「えっ?・・・いや、こんなはずじゃ・・・」

「ふざけてるんですか」

「いや、ふざけてないふざけてない!」

そう言いながらモリアンは顔と手を激しく左右に振った

一見すると動揺しているようだが、状況を把握する能力は失っては
いないらしく

再び接近を始めたゴーストアーマー達を確認すると

こちらに振り向いて、俺の顔を見上げながら最良と思われる提案を
した

「なぜ秘術が発動しないか考えるのは後にして、まずはこの場から
逃げましょ」

「逃げるったって、どうするんだよ

周りはずっかり囲まれてるんだぞ」

「大丈夫。封印されてた時も空間を曲げて他人をワープさせる事ぐ
らいはできたんだから

同じようにワープで逃げれるはず」

「えっ?マジで?」

「じゃあさっさと逃げよ」

「じゃあワープするからこっちに来て」

「こっちにこいつって言うこと？」

「ひつつくってこと」

「ひつつく？くつつくの？」

「狙えないよ！」

「狙うことはない！」

1・・・2・・・3・・・！チャクラ・エクス

テンション！」

「シュートオオオオ！」

「て、違うでしょ！」

「自分が一番乗ってたくせにそんなに怒るなよ。頭刺すことないだろ」

頭に刺さったゴーストアーマーのものだった剣揺らせながら言った
「しかし・・・」

そう呟きながら、2人ともゴーストアーマー達がいた場所へと顔を
向けた

そこにはすでに自動で動く甲冑の兵はなく、部屋の壁や床が円柱状
に削り取られ

その傷跡の周りには鎧の残骸が散らばっている

ノリで言った「シュート」の声を出した途端

予想外にも俺とモリアンの手の間から巨大な光の束が発射されたの
である

その光は部屋の床や壁を削り取りながらゴーストアーマー達を飲み
込み、砕いた

「なんで手からなんか出たんだろ」

オーガニック・ウェーブ、アンチボディのチャクラ・ウェーブ・モ

「シヨンか？」

「それは絶対違うと思うけど」

「それと、なんか俺、さっき瞬間移動したり空飛んだりしてたよ
うな気がするんだが」

「気のせいでしょ」

「気のせいか」

急に大地が痙攣したかのような激しい揺れが襲ってきた

天井の到るところで、朽ちかけた箇所がその振動に耐えきれずに、
様々な大きさの欠片を落下させている

俺もその揺れで平衡感覚を崩され、小さく声をもらしながら尻餅を
つくつくと、慌てた声で何が起きてるのか尋ねた

「多分、この部屋がある………建物なのか洞窟なのか
知らないけど」

それ自体が崩れかけてるんじゃないかな」

モリアンは俺より優れた平衡感覚を持っているらしく

ふらつきながらも立ったままそう答えた

「崩れるっつーことは………」

まさかこういう場面に付き物の自爆装置が作動したとかか!？」

「いや、間違いなくさっきのシユートオオオオオで、こここの大事な
部分を壊しちゃったとかでしょ」

「あ、やつぱり?」

気の抜けた声を出していると、崩れ落ちてきた大きめの破片が俺の頭
に直撃した

すごい音がした

けっこう痛い

「ここはもう危険ね

はいいとこワープして逃げましょ。ワープするからひつついて」

「ひつつく?くつつくの?」

狙えないよ!」

「狙うことはな……」

あ、怒ってる

ワープにより脱出した先は、偶然にも俺がエリンから門をくぐってここに来た時に降り立った場所とほぼ同じ場所だった

まわりには相変わらず朽ち果てかけた廃屋が点在している

目の前の小高い丘の上を見上げると、薄い銅のような色の長髪が目についた

丘に備え付けられている階段を上りながらその長髪の所有者、ドウガルに声をかけると

向こうもこちらに気付き、杖を持った右手に力を入れ、椅子から立ち上がった

「おや、中の人は男さん。味方は連れてこれたんですか?」

味方?

あ、そうだった

俺はここに400人の勇士を連れてくる為に動いてたんだって

なんかモリアンの過去聞いたりとか、シュートしたりとかですっかり忘れてた

とりあえず、ドウガルに今まであった事を話した

「で、ここにるのが、その救出した女神」

「あ、どうも。私、人からは女神とか呼ばれてるモリアンというものです」

「あ、これはご丁寧にどうも

私は破壊の化身の魂として異世界から召還されたドウガルと申します」

なんだこの会話

「そついえば中の人は男さん。あなたすごいケガしてますねえ

魔族にやられたんですか? 一体どんなすごい魔族が……」

「色々あつたんだよ」

そう言いながら自分の頭に刺さった剣を引き抜いた
もちろんこの傷は、魔族にやられたワケではない

「しかし、なんと言いますか

女神様はずいぶん小柄というか、若々しいというか

なんかイメージと違う風貌をしていらっしやいますね」

「あ、そうだ

なんでそんな体になってんだ？長い間封印されてたせいで体が縮んだのか？」

3人の中で一番背が低く、明らかに幼く見えるが知識の点では傑出している女神は

その頭脳に考えを巡らせたが、確かな回答を見出せず、そのまま返答した

「さあ………？」

この体のせいで秘術も使えなくなってるし

やっぱり封印されてる時に何かされたのかも………

あ、それより」

「何だ？」

「今、長い間とか言ってたけど、私どれぐらいの間封印されてたの？」

「え？自分が封印されてたのに、わかんないの？」

「うん、封印されてる間、意識が無かったの

覚えてるのは、3人の戦士に助けを求めた時と、その戦士達がやら
れかけて一番重傷だった戦士を遠隔ワープで助けた時と

あとアナタに助けを求めたのが2回、封印装置を壊させる時に1回
計5回ぐらいしか意識があつたことがないのよ

感覚的には捕らえられてから5日しか経ってないような気分」

「5日て

現実はずっと時間経過してるよ」

「どのくらい？」

「えーっと、ちょっと待って
今思い出すから」

確かマウラスが魔族側についたのが約10年前だよな

で、モリアンの話だとその一年後に噂が流れて、見事に罠に引っか
かって封印された

となると……

「ああ、わかった

封印されてたのは9年間だ」

「へえ〜9年間……
年!？」

経過した年数を聞いた途端、モリアンは驚愕して言葉を失った
立ったまま半分気を失っているようにも見える

「何そんなに驚いてんだ？」

ん？待てよ……封印されたのが20歳の頃だから……

ああ、そうか。モリアン今年で30か」

あ、倒れた

騙詐

モリアンからすさまじい負のオーラが出てる

落ち込んでるようだ

ここは俺の素晴らしい話術によって元気を出させるのが得策というものだろう

「まあ、そう気を落とすなよ

知らないうちに30になったからってそう絶望することないだろ
その内いい事あるだろ

20代の青春は二度と戻ってこないけどな」

あ、モリアンがまたぶっ倒れた

「トドメを刺してどうすんですか」

「さて、これからの行動について考えましょうか」

絶望の淵から精神を蘇らせたモリアンが言った

ドウガルが何気なく発した

「肉体が縮んじやったんだから、そのまま成長したらまた青春期が来るんじゃないんですか？」

の一言であっさり復活しやがったのである

単純な奴め

「えーっと、これからの行動予定ってなんかあったっけ？」

「……………あ、確かグラスギブネンの肉体を破壊する事と
マウラスに真実を伝えてこちら側に引き戻す事か」

「そう、それぞれ」

「モリアンの秘術でグラスギブネンをぶっ壊したりできないの？」

「普通に無理だよ

さっき攻撃系の秘術撃てなかったし」

「じゃあドウガルは？」

「私も無理でしょうね。足悪いし」

なんか嫌な予感がした

先手を打っておこう

「いや、俺も無理だよ」

「えー？なんで？」

「いやいや、俺一人で魔族の基地をに潜入して

敵兵に気づかれずに最深部の目標を破壊なんてスパイみたいな真似、絶対無理だろ」

「じゃあ中央突破したら？」

「もつと無理だろ！」

とにかく破壊の方は当初の予定通り、400の勇士をこの地に呼び寄せて戦うのが一番だと思いが」

その方が俺すごい楽できるし

「じゃあマウラスの問題の方はどうしようか

400の勇士を連れてくるついでにシラさんを連れてくりゃ解決すると思うけど」

そう言っと、俺の目の前の二人は不思議そうな表情をして尋ねてきた

「シラさんって誰？」

「あ、そうか。二人とも知らないんだよな

シラさんってのは……ペラペラ」

「成る程、よくわかったよ」

簡単でいいなあ

「でも、その人をここに連れてくるのは危険じゃないかなあだってその人は戦士とかじゃなくて、ただの主婦なんですよ？」

「それもそうだけど、他に方法は無いしな」

「いや、マウラスの娘のマリーを連れてくれば解決するでしょうあの子は元々腕のいい弓使いだし」

マリー？誰だっけ？

……あ、あの弓使ってた子供か

「マリーってあのピンク色の髪なの？」

どこにいるかわかんないのに、どうやって連れてくんだよ」

「いや、すぐに連れてこれるよ」

封印されてる時に三人を呼んで、色々あってモルガントに斬られて瀕死のところを助け出したし」

「えっ？ そうなの！？」

「うん。私にもギリギリ意識があったから、封印されてる状態ですごく頑張ってワープさせたの」

「じゃあ、あの時マリーが消えたのはモリアンの仕業だったのか」

「妙に詳しいね」

「メモリアルアイテムで見たんだよ」

そんなこんなで、次の行動は決まった

まず俺は一度エリンに戻り、増援を連れて来る

モリアンはマウラス説得の為にマリーを連れてくる

それらを実行するべく動こうとした瞬間、ドウガルから異議の声が上がった

「なんだいきなり？ 特に問題は無いと思うが」

「いえね、女神様の行動には問題ないんですけど」

中の人は男さんの方には問題が発生したんですよ」

俺の方に問題？ 一体何が………

！もしかして増援を連れて来たら、サボる気満々だったのがバレたと言っのかッ！？」

これはマズいぞ

警戒心を強めながら俺は恐る恐る「問題」について尋ねた

「実は、たった今グラスギブネンの復活が近いという

気配というか、感覚のようなモノを感じたんですよ」

あ、なーんだ。俺の考えはバレてなかったのか

いやー、安心安心

………え？

「いや、ちよつと待った

復活の鍵である魂は今魔族の手元には無いはずだよな

だってそれは目の前に立ってるドウガルなんだし

なのに何故復活するんだ？」

「さあ………見当もつきませんが、もしかしたら、代替りのものを見つけたのか

もしくは魂無しで復活させる方法でも見つけたのかもかもしれませんね」
ううむ、それは大いにあり得る事だよな

マウラスのあのトンデモナイ魔力に、キホールとかいう邪神のもっとトンデモナイ魔力（見たことないけど）を合わせたら、そんなぐらいやってのけそうだ

「というわけで、中の人は男さんは増援を呼びに行かず、本拠地に単身で乗り込むのがいいと思います」

その言葉に口から心臓が飛び出すぐらいビビった

「えっ！？お前何いきなりおっかない事をサラリと言ってるのけてんだよ！」

「でも時間ありませんし」

「いや、増援呼んでくる時間ぐあいあるって！マジで！」
冗談じゃねー

スーパーヒーローじゃあるまいし、孤立無援の状態で魔族の軍隊を退けて

破壊の化身を撃破。なんて事ができるか

確実に死ぬわい

ここは俺の全能力をフル稼働させて、その最悪の展開を回避しなくてはいかん

まさに正念場だぞ。ここは

俺が生と死の間で粘っていると、一人傍観していたモリアンがいい考えを思いついたという表情をしてドウガルに耳打ちした

「……………ヒソヒソ……………騙して……………
……………で、ワープで……………」

「なるほど……………つまり……………ヒソヒソ」
「おいおいその二人、何を企んでるんだ
なんか物騒な単語とか聞こえたぞ」

「え？やだなあ。何も企んでないよお」
モリアンがニヤニヤしながら口を開く

「まずは援軍を連れてくるのが最優先事項だからねえ
キミは早いとこエリンに戻るのがいいと思うよお

ホラ、ワープホール作ってあげるからあ
くっ、なんだその口調はッ！

不気味な口調から怪しさを漂わせながら、右手を上げ、宙に円を描く指先の軌跡に光が残り、その光の尾と先が触れると、円内の空間が切り取られたように虹色に輝き出す
ワープホールの出来上がりだ

片手を突っ込んでみる
特に問題はないようだ

「ホラホラあ、早く入った方がいいよお」
クソッ！この口調に何かを感じるッ！
なんだこのプレッシャーはッ！

「なんか俺を騙そうとしてないか？」
「そんなことないよお」

「絶対だな
嘘ついたら針千本飲ますぞ」

「いいよお」

その言葉を信じて、俺はワープホールへ身を投げだした
しかしそれがいけなかった

同時刻

グラスギブネンが安置してある要塞、アルベイ最深部

各部署の兵の配置状況を映し出している長方形の水晶板の前に漆黒の鎧を着た戦士が立っている

水晶板の放つ微量の光が不気味に揺れ、鎧を照らす

魔族軍最高司令官モルガントは、水晶板上の配置図を見て、自分の配置した布陣に満足していた

「7階層全体に遊兵を作らぬように戦力を分散させ、どの部分から侵入されても即時対応できるように布陣

高火力の兵と防御に長けた兵を組み合わせる事によって、敵戦力を消耗させやすくする

兵の損傷が増えてきたら、各中級指揮官の判断に任せて自由に一時撤退をする事を許可し

負傷した兵を運びやすいように巧妙に隠された隠し通路も作り、衛生兵の配置も怠らない

これなら侵入したと報告があつた400の敵にも対応できる。完璧だ」

そう言うと、薄暗い部屋の中で一人で声を押し殺した笑いを出した
そんなわけで、背後の空間に現れた虹色の円には気付かなかったのである

ワープホールを抜けた先には、薄暗い部屋があつた

いや、薄暗いと言うより暗い部屋だ

光を放っているのは、長方形をしたでっかい板以外見あたらない
いったいここはドコなんだろう

エリンのどの辺だろう

よく見ると、光を放っている板の前に、黒い何がを着た誰かがいる
何だろうあれ。鎧かな

この暗さの中で黒いモン着てるなんて、気付きにくいじゃないか

向こうは光る板に夢中でこっちに気付いてないようだ

話しかけて、ここがドコだか聞いてみるか

「すいませーん」

「あ、はい」

お、こちらに気付いて返事したぞ

声からすると、男のようだが

「いきなりこんな質問するのは変ですが、ここドコですか？」

「ここ？ここはアルベイツという要塞の最深部だけど？」

「アルベイツ？」

「おや知らないんですか？アルベイツはこの辺じゃ難攻不落の要塞として知られてて

今、敵の強襲に備えているところですよ」

「へえ〜。敵の強襲に・・・大変だねえ」

「ところでアナタはどちら様でしょうか？」

「先に明かりをつけましょうよ」

これじゃお互いの顔も見れやしない」

「それもそうですね」

そう言うと、話していた相手は光る板から遠ざかった

足音が右の方へと離れていき、足音が聞こえなくなったと思ったら

小さな物音が聞こえ

部屋の中が光で満ちた

あ、やっぱり黒い鎧だ

全身黒とは、すごいセンスしてるなあ

しかし、あの鎧どっかで見ただことあるぞ

どこだっけな

確か過去の記憶を見たときに……………

その時、俺の脳が視界のモノと記憶とが一致する情報を見つけ
精神に強烈な警告を叩きつけた

「てっ、テメーはモルガント!」

驚愕のあまり反射的に発してしまった俺の叫び声に反応してモルガ
ントが振り向く

すると、モルガントも俺に劣らないほど驚き、同じように叫び声を
上げた

「きつ、貴様は封印装置を壊していた奴!」

封印装置ってのはあの黒い玉のことか?

誰もいなかったのになんで知ってんだらう

そんな事より目の前にモルガントがいて、ここはアルベイとかいう
要塞って事は…………

チクショウ! やっぱり騙された!

騙されて敵の懐に飛び込まされた!

モリアンのボケ! ロンゲ! 黒髪でしかもロンゲ!

俺一人送り込むとか何考えてんだ! 俺にどうしろってんだ! ハゲろ!

「貴様はここから遙か離れた封印装置のある洞窟にいたはずだ!

なのになぜここにいる!」

俺がモリアンを呪っていると、モルガントがなんか聞いてきた

なんでここにいたりとか、んな事どうでもいいだろうが

正直に「エリンに帰ってサボろうと思っただら騙されてこ
こにいました」とか言っところか?

いや、それはマズい。あつさり騙されたダサイ奴だと思われてしまっ
たのかしてカッコよく誤魔化さない…………

えーっ…………

「貴様も戦士ならば、その剣で答えを聞き出してみせるッ！」
モルガントを真っ直ぐ睨みつけて叫び、ガーゴイルソードを抜き、
構えた

決まった。完全に決まった

このカツコよさは未来永劫に語り継がれるだろう
セリフがなんか辻褄があっていない気がするが、そんな事は気にな
らないぜ

二秒後、俺は「敵陣の奥深くで、魔族の中で最強とか言われてる戦
士と1対1で戦う」

という最悪の事態を自分で作り出したことに気付いた

死闘

魔族最強と言われた戦士と、剣を構えて対峙している

クツソ、何でこんな事になったんだ

あ、モリアンのせいか。モリアンのアホー！

この戦いは間違いなく人類と魔族の命運を賭けた大決戦になるじゃねーか

今はお互いに殺気を張り巡らし、相手を一步も動けないようにしている

こんなもん出るとは思っても見なかったが、頑張って出そうとしたらなんか出た

人間やればなんでもできるもんだなあ

しかし、このままじゃ埒があかない

どうしたらいいんだ

このまま時間が過ぎてしまえば、要塞にウジャウジャいる敵が異変に気付き、この部屋に来そうだ

そうなったら最悪だ

俺の生存確率がすさまじい勢いで落ちてしまう

というか、絶対死ぬ

やはり生き残るには、目の前の最強の戦士を倒すしかない

あー、嫌だなー

こいつ最強って言うからにはすげー強いんだろうなー

強い奴とはあんまり戦いたくないんだよなー

だいたい、こっこののは異世界から世界を救うために来た勇者とかの役目だろうが

そういう奴はいないのか

待てよ。あの鎧には弱点があるんじゃないかなかったっけ

過去の記憶の中でマリーが………

あの鎧の弱点。その情報は俺の記憶の中に確かに存在しており、脳細胞は瞬時にそれを探し当てた

次は俺が勝ち誇ったように笑い声を上げた

笑いながら、弓を取り出す

「生意気なガキだ……」

これがなんだかわかるか？これはユミというカラクリ兵器でな
剣よりすごい威力なんだとよ」

そう言いながら矢を番え、引き絞り、放った

矢が空気を切り裂きながら、唸り声を上げて一直線にモルガントを
襲う

微動だにしない

矢が鎧の肩部に当たる

弾かれた

「えっ!？」

俺が驚愕の声を上げると、モルガントはまたも満足そうに勝ち誇り
ながら笑いだした

「この鎧の弱点が矢だと思ったか？そんな既存の弱点はとうに克服
したわ!」

驚きの事実が語られた

剣が効かない上に矢まで通さないだと？

じゃあどうやって倒せって言うんだ

「さらにこんな事もできる」

そう言つとモルガントは剣を構え、消えた

本当に消えた。どうなってやがる。どこに消えた？

「後ろだ」

そう呟く声が聞こえ、真後ろに殺気を感じた
剣が振り下ろされる

反射的に前に転がり、回避を試みた。

しかしモルガントの持っている長剣の長さが、飛んだ距離を僅かに
上回り

背中を斬られてしまった

「くっ、何だ今のは!？」

片膝をつきながら叫ぶ

「私は瞬間移動能力を持っていてな。どんな達人の後ろも取る事が
できるのだ

どうだ。まいっただろう」

くっそー、なんてすごい能力だ。これはまいった

わけねーな

瞬間移動とかモリアンがこれでもかって言うぐらい使ってたし
今時珍しいもんじゃねーな

でもやっつかいな能力だ

後ろ取られたら斬られちゃうじゃん

現に斬られたし

どうしよ

「この野郎！お前最強の戦士とか言われてんのにそんなセコい技使
って恥ずかしくねーのか！」

「別に」

精神面を攻めてみたけどダメだった

しかし、妙に背中が痛む

斬られた傷は、間合いや感触からしてごく浅い傷のはずだ

俺の特殊能力を持ってすれば、この程度の傷などすぐに完治するは

ずなのだが

背中に手を回し、斬られた所に手を触れてみる

赤い血がべつとりとついている

まさか、再生が行われていないのか？

そうだとしたら、一体なぜ？

そーいや、モルガントの持つてる剣、妙に派手でなんか変だぞ

まさかヤバいもんじゃねーだろうな

「やいモルガント。ずいぶん立派な剣を持つてるが、その剣は一体なんだ？」

「これか。いいだろう、冥土の土産に教えてやろう」

何カツコつけてんだこいつ

「これは邪を断ち、善を導くとされている伝説の神剣フラガラツハ貴様の持つているそんな曲刀などでは太刀打ちできんほどの代物だ」
持つている剣を突き出しながら自慢げにそう答えた

なんか派手な剣だと思ったら伝説の神剣ときたか

あんなセリフ素面で言っただけ恥ずかしくないのか

ん？待てよ。邪を断つ神剣？

「ちよつと待った」

「なんだ」

「その剣って邪を断つの？」

「そうだ」

「じゃあ善は斬れないの？」

「そうだ」

「じゃ、なんで俺斬られてんだ」

「邪だからだろ」

なるほど、俺は邪だったのか。納得・・・

「いや待てよ！俺どつちかって言っただけぞ！

むしろ凄まじいぐらいの善だ！聖人とか言われてもいいぐらい善だ
！」

「嘘つけ」

呆れた声であっさりと俺の意見は否定された

「嘘じゃねーよ！じゃあ何か、お前は善か！」

「その通り」

「じゃあその剣で自分斬ってみるよ」

「誰がそんな危ない事するか！」

「あ、そう言うって事はお前自分が邪だって認めてんだな」

「何を言うか！私は街で困ってる老人とか見ると真っ先に助けに行くようなタイプだぞ」

「うっせーこの邪悪野郎」

「なっ、邪だけじゃなく悪までつけるとは！」

人類と魔族の命運を賭けた大決戦は変な方向に向かい始めた

邪悪とか言ったらモルガントがなんか怒ってワープした

たぶん後ろにくるぞ。で、切りかかってくるぞ

攻撃方法がわかるなら俺にだってそれに合わせてカウンターを入れる事ぐらいはできる

なんか怒ってるし、もしかしたらよく効くかもしれないぞ

後ろの空気が揺れた

振り返る。背後にいるモルガントが神剣を頭上掲げているのが見えた
左足を軸にして半回転し、直線に振り下ろされる一閃を避ける

このまま向かってくる体に対して一撃を入れ・・・

あ、マズい。よく考えたらこいつ剣効かないんだ

だから剣しまっちゃって、今武器持ってない

あーでも、もう止まんないし

ええい、このまま素手でいったれ

右腕をモルガントの腹部に叩き込む

拳が直撃した瞬間、モルガントの体がすっ飛んで行き、壁に叩きつけられた

え、何これ。なんであんなに吹っ飛んでんだ？

「な・・・なぜ剣と弓に対する耐性に特化させたこの鎧の弱点が素手による打撃と気付いた！」

「そうだったんすか!？」

不意にかましたパンチであんだけ吹っ飛んだんだぞ

と言う事は・・・・・・

よっしゃ殺れる

「はーっはっはっは！死ねえ！」

壁際でよろめいているモルガントに全力で駆けていってまた拳を叩き込んだ

モルガントの体が宙を舞う

落ちてきた所をもものすごい勢いで乱打した

また吹っ飛んだ

今なら北斗神拳でも使えそうな気がする

「この野郎！こっちだってパンチの一つや二つ打てるんだよ！」

殴られ続けてたモルガントが怒って殴りつけてきた

モロに当たった

「グッハア！こいついいパンチ持ってやがる！」

人類と魔族の命運を賭けた大決戦が変な殴り合いと化した

二分後

俺とモルガントが武器を持たずに対峙している

お互いに構えを取り、相手の動きにあわせようとしていた

先に動いたのはモルガントだった

全身に赤い闘気を纏っている

腕に闘気を集め、それを小さな気弾と変化させ、体を傾けた

次の瞬間、モルガントは手の平に乗せている気弾を放つように腕を

突き出した

闘気の塊が巨大な柱となって俺に迫る

正に当たる直前、俺の体はゆっくりと動いた
残像を残しながら闘気の塊を回避する

それを見たモルガントは、驚き、声を上げた

「そ、その動きは・・・トキ！」

「ラオウよ、天に還る時が来たのだ」

ドドオン

シャキーン

テレレー テレレレレーレーレー

テレレー テレレレレレーレーレッツレ

YouはShock!愛でー空がー落ちてくーるー

YouはShock!俺の胸にー落ちてくーるー

あーつい心ー 鎖で アター アター ホアッター でもー今は

無ー駄だーよー

邪魔するやーつは・・・

「何遊んどるんだモルガント」

なんか変な状況から正気に戻ると、いつの間にか赤黒いローブを着
た初老の男が立っていた

鋭い目つきに白い頭髪に髭が見えた

間違いない。この老人は・・・

邪神

あゝあ、また嫌な仕事を押しつけられた

なんでも人間の軍隊が400人ぐらい来てるから、それを迎撃するために配置された兵達の戦意を高揚させるために例の女神の姿に変身して、演説みたいな事をやれとかモルガントに言われた

あの姿あんまり好きじゃないんだよなあ

無駄に露出度高いし

大体、女神ならもつと清楚な格好してればいいのにまったく、何を考えてんだか

そうブツブツと文句を言いながら邪神と呼ばれている者、キホールはノロノロと準備を始めた

こんな嫌な仕事を押し付けられるようになったのも、あの10年前だから9年前だかの出来事が原因だ

キホールは、小さなミカン農家に生を享けた

何事もなく成長し、成人すれば当然そのミカン農家を継がなくてはならないだろう

しかし、そんな人生で本当にいいのか？

自分の人生は自分で作らなきゃいけないんじゃないか？

成長期の子供には、まず思いつくようなありふれた考えだが

当時若者だったキホールには、動くのに十分な思想だった

そう思うといってもたつてもいられず、自分を都会に出してくれるようにと両親に頼み込んだ

最初は反対していた両親も、キホールの熱意と、子供が決めた事は精一杯させてやりたいという思いがあり

キホールが都会に出ることを許可した

都会は活気と派手さとチャンスに満ち溢れていたが、同時に黒く澱んだ一面も持ち合わせていた
現に都会に来てからわずか3日で御利益があるらしい壺と消火器を買わされてしまった

しかし沈んでいてもしょうがない。都会で一旗あげるために行動を開始する必要がある

キホールは魔法関係の能力に秀でていた

特に魔法の力を使った装置を作り出すのが得意で、田舎ではちょっとした有名人だった

当然、都会ではこの能力を生かして一旗揚げたい。出来れば大金持ちになりたい。と考えていた

そのためにまずは何かしらの魔法道具を作り出す必要があった
しかし、そんな物を作る財力も、設備も無い

僅かな金はあるが、ただでさえ魔法道具を作り出す為の設備なんてのは高いのに

現在戦争なんてしょうもない事をやってるもんだから、都会では税金としてその僅かな金まで取られてしまう

残るのはなんとか食べる分だけだ
設備が揃っていて、食いつぶくれる心配のない所に勤めるしかない

もちろん、そんな都合のいい場所とは、軍の研究室だった

正直、軍とかはあんまり好きじゃない

だいたい、なんで戦争なんてしてんだろ
そんな事してないで、仲良くすればいいのに

しかし、一旗揚げるにはそんな嫌いなものに寄らなくてはいけない
一旗揚げるためにしょうがなくやる。そう自分に言い聞かせて、軍に勤める事にした

ちょうど軍の研究室では人員を募集していて、応募したらすんなりと働ける事になった

最低でも食わせてもらう分は働かなくてはいけないので、頑張つて敵を殺す兵器について研究した

と見せかけてこっそりと他人の為になつて、尚且つ自分が潤うものについて考えた

そうして考え出したのが、どんな奴にも変身できる装置だった

正直、作り終わってからこんなもんなんの役に立つんだろう。なんて思った

理想の人物に変身するのが古来からの共通の夢だからだろうか？

でもこれ、他の人に見られたらなんて説明すりゃいいんだろう

正直に言ったら兵器作る気無かつたってバレてクビになっちゃう

そんな事を考えてたら、本当にいつも威張つてる戦闘要員の奴らが来て

「それはなんだ」「変身装置なんて何に使えるんだ」と質問された
とっさに「敵の主要人物に変身して、手をかく乱できます」とか
言ってしまった

自分でも感心するぐらいピツタリな返答だった

しかし、それがいけなかった

数日後、変身装置で本当に手をかく乱できるのか。なんて話題が
上がってしまった

実用テストとして、開発者の自分が実験する事になってしまった
最悪だ

騙してて、変身だつてバレたら間違いなく殺されちゃうじゃん

任務の内容は、ちょうど人間達の英雄であるマウラスとかいう爺さん
んが

人間達に追われてダンジョンに逃げ込んだので、突如現れた人間達

に与する女神に変身して

こちら側に引き込む。といった物だった

英雄のくせに追われるなんて、その爺さん一体何したんだろう

任務はなんとか成功した

というか、軍の中でなんかすつごい偉い地位にいるモルガントとか言う黒い鎧の人がほとんど説得してて

自分は最後の方で扇動しただけだった

しかし成功は成功なので、功績が認められて、個室が与えられ、あの程度自由な研究が出来るようになった

その中で、最初に作ったのは封印装置だった

作り出した当初は、簡単に魚が捕らえられるぐらいのが作れるといいなあ

といった程度にしか考えていなかった

しかし研究室では優れた材料が簡単に手には入りすぎた

それによつて製作意欲を刺激されたキホールは、半ば暴走気味に「魚を簡単に捕らえられる装置」の製作に取り組んだ

気が付いたら「魚を簡単に捕らえられる装置」は「封印装置」になっていた

なんか頑張ってたなら「封印対象の魔力を利用して封印力を作り出す」なんていう

とんでもない機能まで搭載してしまった

こんなもん作つたつてバレたら、また実験だとか言われて前線に放り込まれちゃう

なんとか手を打たなくては

でも眠いから、考えるのは明日のしよう。と思いきその日は就寝した

翌日装置を見に行ったら、なんか長い黒髪をした女性が封印されてた

すごくビビった

こんな知り合いは居ないし、何より驚いたのは、その女性の背中には漆黒の翼があった

漆黒の髪と翼を持つ女

まさか目の前で封印されているのは、ちょっと前に自分が化けた戦争と復讐の女神じゃないだろうか

変身した時とまったく同じ格好してる

どうしよう

とりあえず治安組織に通報しておこうか

早速近所の治安組織がある建物に行き

「魚を捕らえる装置を作ってたら戦争と復讐の女神が捕まりました」と言った

イタズラはやめるとか言われてつまみ出された

イタズラじゃないのに

よく考えたら、別に治安組織なんかじゃなくて、普通に軍に言えばよかったか

威張ってる戦闘要員に事情を説明して、どうすればいいか聞いてみたら「また研究室の奴らが頭のおかしい事を言い出した」って顔をされた

しかし、今は暇だからって理由で、部屋まで付いてきてくれることになった

付いてきたのは、その威張っている奴と、その同僚らしい巨体の兵士と、のっばの兵士だった

部屋に着き、その封印を見せてみると、その3人は声を失った

その反応を見て、やっぱりコレは女神なんだと確信した

もしかしたら違つかも。なんて考えてたが、そうはいかなかったらしい

とんでもないもん封印しちゃったなあ

すごい大騒ぎになった

なんて言ったって、散々てこずらされた相手の女神を封印してしまったのだ

騒がないほうがおかしい

そしてそんな封印をした奴は何者だろうという話題になった

ある日、ある一人の兵士が

「神を封印できるほどの力を持っているんだから、その封印した奴は同じように神なんじゃないか」

なんてことを言い出した

そんな噂が流れているとも知らず、いつも通りの日々を送っていたある日、前の任務で一緒になって、話してみたら気が合い、妙に仲良くなったモルガントと飲みながらしょうもない話で盛り上がったいた

そしてふとモルガントが「そっぴや自分、神じゃないかって噂ながれてるけどホントに神なんじゃないの」なんて聞いてきた

酔っていたのでノリで「いやあバレちゃったか。実は神なんだよ。

わはははは」なんて答えてしまった

それがいけなかった

その話をたまたま聞いてしまった兵士が「本当に神だったんだ」と勘違いしてしまい

聞いた話を言いふらしてしまった

噂は凄まじい速度で広まり、次の日気がつくくと神として崇められるようになった

その自体に直面した自分とモルガントは鳩が豆鉄砲くらったような顔をして啞然としていた

だれか止めるやつはいなかったのか

こうなつてはもう遅い

正直に本当は神なんかじゃないと言っても、強大な魔力を持つ女神を封印できるのは神である証拠だとか言われたり

さらに、古代から伝えられている予言の一節に

「異世界からの神が我々を滅ぼそうとした時、神が降臨し、我々を救うであろう」

なんてのがあるせいで、もう誰もが神だと信じて疑わなかった

誰だこんな無責任な予言残したアホタレは

はり倒してやる

なんかたまに「キホールはフリーザ様ぐらい強い」なんて噂まで流れてた

誰だそんな噂広めた奴は

そんなに強くなる事が可能なのか！

アホ！

ただ一人、神じゃないと信じてくれた・・・というか知っていたモルガントに

自分は神じゃないし、いざ違つたとバレたら大変なことになりそうなので

ここから逃げ出してはいけなйдらうかと相談した

しかし返事は否だった

今、自分が姿を消したら、いつの間にか神の虚像に依存しきつちやつた民衆が混乱し

世界は一気に恐慌状態。治安は悪化し、恐怖と暴力の支配する世界と化してしまう

神として誤魔化し続けるしかないと言われた

そう言われては逃げるわけにもいかず、神として過ごす事になった神としての生活は、たまに仕事で軍事関係のことをやるぐらいで、

特に今までとは変わらなかった
たまに何か勘違いしたのが「病気を治してください」とか頼みに来たぐらいで

しかし、望むものは神への貢ぎ物として何でも手に入るのも、物質的には非常に豊かだった

その暇と金銭を利用すれば魔法道具の研究なんかはやり放題だったので

神器を作るとか適当な事を言っつて、研究や開発をやりまくった

もちろん戦争に使う殺戮道具の研究じゃなく、平和の為になる物の研究だ

戦争している理由は主に食料や物資の需要に対するの共通が追いつかなかつた事にあつたので

物資の流通を潤滑にする為に、ある程度の距離なら一瞬で移動できる装置を作つたり

人間が攻めて来れないように結界の研究などをした

一度、モルガントに剣を改造してみてもか言われ

当時、研究の調子がすごく順調だったので調子に乗って凄く改造して凄まじい切れ味と魔力を持つ魔剣にしたりなんてした

作つてから気付いたが、これは完璧に戦争の道具だ

でもなんか捨てるのも忍びないので、完成品はモルガントにちゃんと渡した

冗談半分でその剣を、古代から伝わる邪を断つ神剣とか言つたらど

うだと提案したら、なんか上機嫌で賛成してた

まあノリで賛成したんだろ

邪を断つ神剣なんて恥ずかしい事をいい年して言えるわけないもんな

研究を続けていると、どうも封印した女神の強大な魔力が気になった
もし、この魔力を利用したら、もっと生活を豊かに出来る道具を作

れるんじゃないだろうか

魔力全部とは言わない

一部だけでいいんだよなあ

………ちよつと封印緩めて、魔力抽出しちゃおうか

少しならバレないよな

うん。イケるイケる

少し緩めた

よし、目覚めない

緩めた分だけ溢れた魔力を集める

おお、凄い純度の魔力だ

もうちよつと貰っちゃおうかな

高純度の魔力の魅力に負け、封印をまた少し緩めた

すると、女神のまぶたが僅かに動いた

まさか、目覚めさせてしまったか？

そう思い、警戒しながら眺めていると、次は指が動いた

次いで目が開いた

凄い速度で封印を戻した

危ない危ない

封印が解けたら大変なことになってしまう

なんと言っても相手は戦争と復讐の女神だから

もし自分が封印した張本人だとしたら消し炭にされてしまう

さらに、魔力を盗りすぎたせいかなんか背が縮んじやってる……

…というか、完全に幼児化してる

やったのがバレたら、消し炭どころじゃなくなるな

女神が目覚めたら死ぬほどマズい、というか死ぬので

まず封印制御装置を4つに分けて、4つ全部壊さないと封印が解けないように改造して

それを人里離れた洞窟の小部屋に、すごい距離を置いてバラまき
女神自体も、ここからとんでもなく遠い場所に運んだ
そして封印制御装置の一つにでも異常があった場合、すぐに警報が
鳴ってこちらにわかるように細工をした
これでひとまずは安心だ

しかし、女神が僅かにでも意識を取り戻したことによって、予想外
の自体が起きた

女神が意識を取り戻した僅かな間に、人間の熟練した戦士に助けを
求めてしまったのである

助けにきた人間達はやたら強くて、この近くまで攻め込まれたが
モルガントが機転をきかせて、なんとかギリギリのところまで撃退に
成功した

しかし、その攻めてきた人間達の中に、だいぶ前に魔族側についた
マウラスとかいう爺さんの子供がいたらしく

それを撃退したモルガントに対して滅茶苦茶怒ってた

怖いから「瞑想する」とか言って部屋に閉じこもって、ほどぼりが
冷めるまで待ってた

部屋の中では特にやることがなかったので、抽出した純度の高い魔
力で道具を作った

抽出した異常に純度の高い魔力は扱いが難しく、便利な道具に応用
するなんて事はできそうになかった

だからといって破壊兵器を作るのも嫌なので、逆に攻撃を防ぐシ
ールドを張る巻物を作ってみた

なんか、至近距離で街一つ吹き飛ばすほどの大爆発が起きてても防
げるのが出来てしまった

女神の魔力つてのはすごい

これで兵器作らなくて本当によかった

・・・おや、そろそろ演説の時間だ

回想するのはやめにして、モルガントのいるトコにさっさといかないと

えっと、確かアルベイトかという要塞だったか

闘機

目の前にいる男

間違いない。魔族の策略にかかり、軍を離反した英雄、マウラス・グイデイオンだ

「爺さん、あんたマウラスだね？」

念の為確認をとると、マウラスは急に名前を呼ばれたことに少し驚きつつも、肯定した

「確かに私はマウラスだが、なぜ私を知っているのかね。お嬢ちゃんあと私は爺さんではなくヤングだ」

「ほざきやがれ

いや、初対面だけど、俺はあんたの事はよく知っている

単刀直入に言おう

爺さん、あんたは魔族に騙されている！」

俺はさっそく真実を話し、マウラスのしている誤解を解こうとしたしかし、当然その場に居合わせているモルガントが

そうはさせんと言わんばかりに、話に割り込んできた

「そんな奴の言うことに騙されるなよマウラス

自分がされたことをよく思い出してみろ

人間なんかを信じたら、また裏切られて、今度は自身の命が奪われる事は目に見えているであろう」

「そっやって騙した張本人が何をぬかすか！

よく聞け爺さん、奴の言っていた事は全て偽りだ

だいたい、このモルガントとかいう奴は

自分の持っている剣を、邪を断つ神剣フラガラツハとか言っちゃうとんでもなく恥ずかしい奴だ

そんな奴の言うことなんか信用できないだろう！」

「な、なにを言うか！

マウラス、こいつは私の持つ善は斬れない神剣で思いつきり斬れた

奴だ

こんな邪の塊みたいなの奴の言うことに耳を貸す必要はない！」

「え？何のことですか？」

俺斬られてなんかいませんよ？

デタラメを言わないでください！」

「嘘つくなよ！さっき背中斬れてただろ！」

「え〜？斬れてませんよ〜」

そんなに言うなら証拠出してください！」

実際、斬られた傷は治癒が遅かったものの、俺の異常再生能力で完治していた

こんな小学生のような言い合いをしていると、マウラスが呟いた

「いや、知っているぞ」

「えっ!？」

俺とモルガントは、ほぼ同じタイミングで驚きの声を洩らすと、マウラスの方へと振り返った

「人間が私を裏切っていないなど10年前のあの日からずっと知っている」

裏切っていないと知っている？

じゃあ、何故魔族に手を貸しているんだ？

「まさか、人間達は自分を裏切ってはいないが、自分の妻子を殺したのは事実だ

だから諸悪の根源である人類は皆殺しにしてやる。なんて末期的な考えを持って

いるんじゃないだろうな？

それは違うぞ爺さん！」

「いや、別にそんな事は考えてない

そもそも、私がここにいる理由は・・・」

そう言いかけた時、マウラスの後ろの空間が捻れた

空間の捻れから、白い服に漆黒の髪と翼が見える

あの格好、モリアンか？

いや違う。モリアンはあんなに背が高くない

と言うより、現れたモリアンはどう見ても大人だ

ということとは・・・

俺が考えを巡らせていると、そのモリアンらしき奴は僅かに目を動かして、辺りを見た

剣を抜き、鎧に傷を作っているモルガント

同じように剣を抜き身で持っている魔族じゃない俺

そして俺とモルガントに向かい合うようにして立っているマウラス
それらを見て状況を把握したのか、モリアンらしき奴はゆっくりと
口を開いた

「人間がここまで来るとは、なかなかやるようですね

しかし、その行為がこの女神の意思に反する行為と知っての行動なのですか？」

俺はすぐさま反論した

「女神の意思？何を言ってるやがる

正体は割れてんだぜ、邪神キホール！」

そう言っただけで剣先を女神に化けたキホールに向けた

キマった

この時、俺はかなりカッコよかった

カッコいい人選手権とかあったら上位入賞間違いなしだ

キホールは少し慌てて「な、何を証拠に」なんて言ってきた
しかし俺はその問いかけに答えず、マウラスの方に向き直り、真相
をぶちまける

「よく聞け爺さん！こいつは女神モリアンなんかじゃない！

こいつは女神に化けた邪神キホールだ！

本当の女神は魔族が封印していたのを俺が救出した！

そして爺さん！あんたの妻子は殺されてはいない！ここに来る前に俺はあんたの妻、シラに会っているんだ！」

一気にまくし立てた

驚愕の真実だ

フツフツフ、さぞかし爺さんも驚いて・・・

「いや、それも知っているぞ」

「えっ!?!」

今度は3人同時に驚きの声を洩らし、マウラスの方へと目を向けた
マウラスが話を続ける

「妻や娘が殺されたという例の映像が嘘だとは見た時から知っていた
軍が私を殺そうとしているという情報も嘘だと知っている

そんな情報は私が軍に頼んで、流させたモノだからな

全てはこの時の為に仕組んだ事だ」

マウラスが鎖で天井に吊るされているグラスギブネンの方へと歩き
出す・・・

あ、ここにグラスギブネンあったのか

色々あって気がつかなかった

「この戦争を終わらせるにはどうすればいいか

答えは簡単だ。頭を潰せば終わる

末端の兵士をいくら倒しても仕方が無いからな

しかし頭を潰すにはどうすればいいか？まさか正面から行って潰せ
るほど簡単ではあるまい

ならば、裏切ったと見せかけて敵の懐に入り、一気に潰せばよい
その為にわざわざ戦いの終わり際に私の背中を兵の一人に撃たせ、
裏切ったと見せかけた

その後、その事をお前達魔族に伝えた。気が抜けるほどあっさりと
信じてくれたな

そして私はお前達の元で、伝説の破壊の化身グラスギブネンを甦ら

せた

魔族の頭であり、1年前私の娘を殺した魔族軍最高指令官モルガント、そして邪神キホール、お前達を殺すためにな！」

名指して殺すとか言われて2人ともかなりビビった

「貴様、その為に英雄でありながら我々に協力していたというのか！」

「なぜ自分まで！」

いや、なぜ自分までって、お前邪神で魔族の頭だからだろ

マウラスが10年間の計画を語り終わると、グラスギブネンの前で両腕を広げた

手のひらが赤く発光している

マウラスの足が地面から離れた。グラスギブネンに吸い寄せられるように宙に上がっていく

そのままグラスギブネン接触し、マウラスの体はその中へと入り込んだ

なんじゃありや、融合？合体？

その瞬間、青白かったグラスギブネンの肌は血色が戻ったようにくすんだ茶色へと変色した

腕が動き、体を縛っていた鎖を引きちぎり、轟音を響かせ地面に足をついた

天井を見上げ、咆哮を上げた

あっけに取られてただ啞然と状況を見ていた俺は、頭に浮かんだ一つの言葉を発した

「で、出た！超魔闘機グイディオんだ！」

「何それ」

「さあ、でも見た瞬間そんな単語が・・・

いや、そんな事より超魔闘機グイディオンよ！その力で邪悪な敵を粉碎せよ！

エレメンタルブラスターだ！」

別に俺が操っているわけではないが、ノリノリで指示とか出してみた
するとグラス・・・いや、超魔闘機グイディオンは口に閃光を発し
たかと思うと

モルガント、キホールが立っている場所へとその口からレーザーを
放った

俺が傍にいるのに

反射的に3人とも避けてなんとか難を逃れた

レーザーの当たった床はぽっかりと丸い穴が開いており、気化した
と思われる床の部品が湯気みたいに上がっている

うげー、なんて威力だ

「何やってんだグイディオン！俺にも当たっちゃうだろが！」

巻き添えにされかけて俺は怒って文句をぶつけた

「無駄だ。奴はグラスギブネンの魔力に取り込まれて意識を失い、

暴走している

いくら巨大な魔力を持っていると言っても、人間が破壊の化身を操
るなんて不可能だったんだよ！」

「暴走だつて？なんでそんな事がわかるんだ」

「だって自分、ちよつと道具作るためにグラスギブネンのパーツの
アダマントイトをちよつと拝借しちゃつて

かわりにその辺の石ころを置いといたから・・・」

「なるほど、そのせいで魔力制御回路がイカれてグイディオンは暴
走を・・・

つて、それ破壊の化身云々じゃなくてお前のせいじゃなーか！」

「そうとも言う」

なんだこの神

ん、待てよ

暴走つて言つと、普通の力よりずっと強力な力が出るつてのがお約
束だよな

と言つ事は・・・

「この調子ならお前ら絶対倒せるじゃん

んで、そのまま俺は苦勞せずに人間達の勝ちつてなるじゃん

ウヒヨヒヨイ、ラッキー」

「バカ言え。あいつ暴走した破壊の化身だぞ

魔族達を滅ぼした後は人間達を滅ぼしにかかるぞ」

モルガントが物騒な事を言い出した

「え、マジで？それ困るよ

なあグイディオン、お前人間滅ぼしたりしないよな？」

目の前の巨大な破壊の化身に話しかけると、こつちを向いて有無を

言わずレーザー撃つてきた

それを横に飛び、避ける

「殺る気満々じゃねーか！」

「だから言つただろ。人間達を滅ぼされたくないかつたら

ここで奴をなんとかして止めるしかない！共闘して奴を討つぞ！」

「そうだ！平和の為に協力しろ！」

「クッソー、マジかよ！なんだこの展開！」

変な連合が誕生した

善人

現在戦力

当方

モルガント（魔族最強の戦士）

キホール（邪神）

そして俺

敵方

グイディオオン（暴走）

一見すると、こちらの方が有利に見える

最強の戦士に神までいるんだ。負けるわけがない

「さて、どうやってアレを止めるんだ？」

俺の問いかけに、モルガントが答えた

「まずは奴の力がどの程度か探る必要があるな

私が仕掛けよう」

そう言うとモルガントはフラガラツ八を手に、一歩前に出た

なるほど

モルガントの鎧の能力なら、どんな攻撃も跳ね返すはずだ

攻撃されても平気なら、相手の力を試すのにはもってこいだ

更にあの妙に切れ味がいい剣と空間跳躍能力をうまく使えば、相手に

致命傷を負わせる事も可能

よし、頑張れモルガント

出来れば、あと一撃で倒せるって所まで弱らせるんだ

トドメは俺にまかせろ

モルガントが駆けた

グイディオオンの持つ、巨大な鉈のような二本の剣が振り下ろされる

モルガントが空間跳躍で消え、地面に二本の巨剣がめり込んだ
グイデオンの顔の前の空間が歪み、モルガントが現れる
頭上に構えた剣が頭部を捉えた
と思ったら、背中にある三本目、四本目の腕がモルガントを殴りつ
けた
すごい勢いですっ飛ば
あ、壁に突き刺さった

「ぐっ……ここまでか……」

トドメは任せたぞ……」

「いや、トドメってお前一撃も食らわしてないだろ！」

俺の叫びも虚しく、モルガントは壁に突き刺さったまま動かなくな
った

「げっ、死んだ」

「いや、死んではないと思うけど」

現在戦力

当方

モルガント（ヘタレ）戦闘不能

キホール（邪神）

俺

さあ困った

ヘタレが一体戦えなくなった

くっそー、派手な鎧着てるくせに使えねー

「こっとなったらキホールだけが頼りだ

さあ、滅びの波動とか出して奴を焼き払うんだ」

「んなもん出るか」

「じゃあメイオウ攻撃とかでいいや

メイオウ攻撃で奴を消滅させるんだ」

「だから出ないっての」

「え〜。神なんだからそんぐらい出せよ」

「何言ってるんだ。自分は神じゃない」

「神じゃないならなんなのよ」

「おらあ、ただの百姓だあ」

色々あつて神に仕立てあげられちまったんだあ

こんな事なら、田舎でミカンの世話さやってりゃよかつただあよ」

「何でいきなり訛ってるんだよ！」

こんな言い争いをしていたら、レーザーが飛んできた

レーザーは俺の手前の床に当たって爆発した

その爆風で二人とも吹っ飛ばされた

キホールがつまんない冗談言うから、グイディオンがツツコミ入れてきたじゃないか

「とにかくどうすんだよ。このままじゃ二人とも殺られるぞ」

いくら俺が驚異の再生能力を持つってるって言っても

あんな溶かしたり爆発したりするレーザーをまともに食らったら間違いなく死ぬ

そんなおっかない相手と戦ってたまるか

だいたいこんなところで壮絶な戦死をするなんて趣味じゃない

せめて致命傷を負って「今までさんざんな上官に仕えさせられてきたが、最後にこれ以上ない偉大な皇帝に仕える事ができたのだ

結構幸せな人生だったのかもしれん。これが逆だったら目も当てられん・・・」とか呟いているところに

自分を助けようとして戻ってきた少年兵にもう自分は助からないと言って

その少年兵が「せめて形見を下さい。命に代えても皇帝にお届けします」と言ってきたら

「そうか、では形見をやろう。お前の命だ。さあ、早く脱出しろ！」

とか答えて散りたい

「この状況を打開するいい方法とかないのか！
もうミサイルとか出せよ」

「だからそんなもん出ないって……..
いや、待てよ」

執拗にキホールを急かしていたら、何かを思い出したらしく、ローブの内側を探り始めた

「おっ、まさかあるのか？ミサイル」

「だからんなもん無いって

そうじゃなくて……..
あつた！」

キホールが喜びながら取り出した物は、なんか妙に小綺麗な巻物だった

「なにそれ？投げつけた相手を消滅させる巻物？」

「違うよ。これは捕らえてた女神から抽出した魔力で作った巻物で……..
」

キホールがそこまで言うと、ガイディオンが再びレーザーを発射してきた

つてか、なんでこんな状況なのに、のんびり喋ってた俺ら

それを避けて、ガイディオンの方を見ると

もう一発レーザーを撃とうとしているのか、口の辺りから光を放っている

連射すんなそんなもん

レーザーに当たったらかなわんと、ガイディオンの正面から側面に回り込もうとしていると

キホールが、その場から一步も動いていない事に気付いた

「おい、何突っ立ってんだ！はやく逃げないと死ぬぞ」

俺がそう言うと、キホールはこちらを向いてニヤリと笑い

と言ってもローブで顔見えないからよくわからんが、「まあ見てな

つて」と呟いた
グイディオンの口から放たれた、収束された魔力が一直線にキホールへと襲いかかる

あ、死んだな。間違いなく蒸発して死んだ

キホールに真正面からレーザーがぶつかった瞬間、そう思ったしかし目の前に広がった光景は、その予想と大きく違っていた石の床すら気化させるレーザーは、キホールの僅か30cmほど前で四方八方に分散し、無数の細かい光の粒子を飛び散らせている予想外の展開に驚いて、俺は慌て気味に「何今の!? 何その巻物?」と聞いた

キホールがこちらを向いて、問いに答える

「簡単に言えば、これはあらゆる攻撃を防げる便利な巻物だね理論上では街一つ吹き飛ばす爆発にも耐えられるハズだけどこいかんせん実験をしていなかったから防げるか不安だったいや、成功してよかったよかった」

「実験してない?」

神なんだから、そんな危ない物をぶつつけ本番で使わずに、適当な魔族を実験台にするとか

もしくは俺に試してない事を黙っておいて渡して、実験台にするか出来ただろうに」

「何言ってるの。万が一失敗したら、その実験台にされた奴は死んじゃうじゃないか」

大体お前だって、いくら初対面で元々敵同士だからって、実験台にして殺すなんて酷いこと出来るわけないだろ」

実際にキホールは、今まで作ってきた魔法道具は

まず自分に使って安全かどうか確かめてから、実用化していた

なんかこいつ邪神とか言われてるくせにイイ奴だな

俺をまんまと騙して敵の本拠地に送り込んだ、どっかの外見幼女の女神とは大違いだ

しかし、今はキホルルのイイ奴っぷりに感動している場合じゃない

「所で、その便利な巻物は俺の分もあるのか？」

「大丈夫、ちゃんと3人分ある」

そう言いながらロープの内側から巻物を2つ取り出す

「3人分？ここに居るのは俺とお前なんだから、2人分でいいんじゃないか？」

「ほら、そこに倒れてるモルガントの分も必要だろ

流れ弾に当たって大怪我したら大変だし」

あんな最初にカツコつけて気絶したヘタレの事も気遣うとは

ホントにイイ奴だなあ

俺なんか攻撃を上手く誘導して、どさくさに紛れてあのヘタレを始末しちゃおう

とか、少なからず考えてたのに

「でもこの巻物、名前がないんじゃないや少し不便だな

よし、女神から抽出した魔力で作ったんだから

女神のスクロールって名前にしよう」

でもネーミングセンスは無いらしい

決着

破壊の化身が動いた

巨大な鉞のような剣を、なぎ払うようにして力任せに振る

剣が俺の首めがけて、風を切る音を響かせながら襲いかかる

俺は右腕を少し上げた

次の瞬間、俺の右腕と奴の巨剣が激突する

轟音が部屋全体に広がった

グイディオンの持つ剣は、俺の腕に当たった部分が刃こぼれを起こしている

一方、俺の腕には傷一つ付いていない

グイディオンは剣では俺を破壊できないと判断したのか、その巨大からは想像できない程軽やかに跳び、間合いを開けた

そして全身の魔力を集中させた

恐らく、あの世界のあらゆる物を焼き尽くすレーザーを吐く気だろう
しかし俺は微動だにしない

やがてグイディオンは魔力の充填が完了し、口から破壊の光を放った
その光は俺を包み込み、周囲の石床を気化させ、やがて薄くなり、
消えた

その破壊的な魔力の塊が通過した場所には、腕を組んだ無傷の俺が、
口端に余裕の笑みを浮かべて立っていた

「世界を滅ぼす破壊の化身と言っても、所詮は過去の老人どもが造
った遺物

この霸王の敵ではない」

決まった

ニクいほど決まった

その姿は正に無敵の帝王

もし、世界カッコいい人選手権なんてのがあつたら、優勝間違いな

しだ

「つまらない事やってないで、さっさと戦いなさい」

その声が高揚した気分を急に冷まし、現実に戻された

声のした方へと振り返ると、キホールが呆れ顔でこちらを見ている
ロープで顔が隠れているので正確な表情はわからないが、多分呆れ
顔をしている

「だってさー、せっかく最強の防御力を手に入れたんだからさ
少しぐらい遊んでもいいじゃないか」

「別にいいけど、このスクロールには制限時間があるんだよ」

その言葉を聞いた瞬間、俺の精神は一瞬にして凍りついた

「え………、制限時間ってどんくらい？」

「えーっと、確か使い始めてから5分で魔力切れになるんだったか
な」

「5分!？」

さっきカツコイイ事してたのに使った時間が大体2分ぐらいだから・
………

残り時間は3分もないぞ

もし、このバリアみたいのが消えちゃったら、生き残れる確率は限
りなく0に近づく

というか、0になる

下手したらマイナスとかになるかもしれん

ええい、んなツマラン事を考えてる場合じゃねー

こうしている間にも、残り時間は少なくなっていく

考えるのは後だ。今は一秒でも早く攻撃を仕掛けるべきだ

「グイデオオオオオオッ!! 命よこせやアアアアッ!!」

吼えながら突撃した

ガーゴイルソードを振り上げ、頭を狙い、跳躍した

自分の全長ほど高く跳んだ俺を叩き落とそうと、グイディオンはまたも口からレーザーを発射してきた
それを気合と共に左手で弾き飛ばす
流れ弾が壁に当たり、気化した石の蒸気が上がった
剣を標的の額目掛けて振り下ろす
しかし剣速より僅かにグイディオンの反射速度が勝り、背の側にある三本目と四本目の腕に防がれてしまった
深々と剣が奴の腕に食い込む
俺は目の前に現れた腕を蹴りつけ、宙に舞って着地した

「防御されたか
だか今ので後ろの手は使いものにならなくなったと見える
次で殺れるな」

「いや、そうでもないぞ。奴の腕をよく見てみる」
そう言っただけキホールは俺が斬りつけた腕を指差した
一体何だっただけ？特に変わった所は……
え？何だアレ？

腕の傷口が沸騰したみたいに泡立ってる
その泡はしだいに弾けて消えていき、俺が斬った部分が見えてきた
キレイに治ってる

「なんか治ってるけど」
「治ってるね」
「なんで治ってるの」
「元々グラスギブネンには異常なほどの自己再生機能が備わっているんだ」
不完全体だと言っても、マウラスと融合した事によってその機能は損なわれなかったらしい」

「ええーっ、自己再生？何その反則能力。ふざけてんのか
そんなズルい能力持つてる奴どうやって倒すんだよ」

「まあ、弱点が無いわけじゃないんだけど」

「弱点？」

「そう、弱点」

キホールはグイディオンの肩の辺りを指差し、言った

「ほら、あの左腕の付け根を貫けば行動不能になるはず」

「へえ、それは剣持ってる方？それとも背中にある方？」

「剣持ってる方だよ」

「なるほど。しかし、何でそんな事知ってるんだ？」

あ、さては過去の英雄達があれば戦った時にトドメの一撃として入れたのがあの腕の部分ってわけだな？」

「いや、全然違う」

実はグラスギブネン作ってる時に、自分がこっそり材料ちよるまかしてたのがあの部分なんだよ」

普段ならお前何ちよるまかしてんだよ！とかつつこんでる所だが

状況が状況だからよくやったと誉めてやりたい

「あの部分は素材が違うせいで魔力の流れをギリギリ制御してるはずだから」

その部分に直接衝撃を与えるだけで制御系に異常がでて動けなくなり、逃げ場が無くなった魔力が爆発するはず」

「爆発すんのか・・・」

まあスクロールの効果があるから爆発しても平気だろう

ところで、ちよるまかした代わりにどんな素材を入れたんだ？」

あんなのを制御する物の代わりなんだから、きつと有名ですごい鉱石を使ったんだろ

オリハルコンとか黒曜石とか超合金ニューズとか」

「いや、その辺に落ちてた石ころ」

「石ころ！？」

「うん。石ころ」

「なんで石とすり替えたのにバレなかったんだ？」

「いやあ、バレないように表面をそれっぽく絵の具で塗ったら妙な

ぐらい似ちゃってさ

正直、いつバレるかヒヤヒヤもんでした」

「とにかく左腕の付け根だな

まあ、まかしとけよ。最強無敵となった俺様にとって奴の左腕を刺すなど赤子の腕を捻るも同然」

「あ、ちよつと待って。その前に問題が二つあるよ」

「問題？何だよ」

「深刻な問題と、もつと深刻な問題があるけど、どっちを先に聞きたい？」

「………じゃ、深刻な問題の方から」

「その持つてる剣を見てみ。刃が溶けてる」

え？ガーゴイルソードの刃が溶けてる？

おいおい、これは村長から貰った由緒正しい剣だぜ？

いきなり溶けるなんて事があつてたまる……

「って、溶けとる……！」

ガーゴイルソードの方に視線を落してみると、なんか刃の部分が溶解し、平らになっていた

ついでに刀身が半分ほどに細くなっている

「さっきグラスギブネンの腕を斬りつけちゃっただろう

あいつは体の骨が魔力を増幅して血液のようにして全身に循環させる為に、特殊金属アダマントライトで出来てるから

普通の金属で斬りつけなんてしたらポロポロになっちゃっよ」

「なんでそんな重要な事を先に言わないんだよ！」

「言う前に、命よこせやアアアアアッ！！とか言いながら突撃するからだろ」

「っ」

しかし、どうすりゃいいんだ

こんなになつた剣じゃ、弱点を刺すなんてできないぞ

それに弱点部分が石ころで出来てると言っても、魔力の血液が流れ

ているはずだから

普通の剣だと弱点に到達する前に刃が溶けきつちやいそうだなんかないのか

例えば伝説の剣とか・・・

「ん？待てよ

なあ、あそこに倒れてるヘタレの剣ならアダマタイトでも貫けるんじゃないか？」

「フラガラツハか。多分いけるよ」

「じゃあそれで行くとして、残りのもつと深刻な問題ってのは何だ？」

「えーつとね、もう5分経った」

「え？5分経った？何を訳のわからんことを・・・」

5分？あ、そーいやこの女神のスクロールの効果って制限時間5分だったっけ

なーんだ。効果が消えたただけか。いやあ安心安心・・・

「何だとオオオオオオオオオ！！！！？」

「落ち着け」

「落ち着けるか！なんでもう5分経ってんだよ！」

「だってさつきからずっと喋ってるし」

「普通こういう場合は時間が経っていかないってのがパターンだろ！2秒しか時止めれないのに7ページぐらい喋ってるとか！」

「現実はその甘くないんだよ」

「チクショー！」

あいつ俺らが喋ってる間は一步も動かなかったじゃないか！」

「そーいやそうだ・・・何で動かなかったんだろ」

まさか・・・いや、まだそうと決まったわけじゃないし・・・」

キホールが何かを考え始めた

その横で俺は絶望していた

どうすんだよ

攻撃無効がないんじゃ、レーザーに当たったら即死するじゃねーか
「急に持病の腹痛で頭が痛くなったから早退してもいい？」

「ダメ」

「だよな」

「ここで自分達が退いたら世界は破滅しちゃうんだぞ

平和な世界を守るため、正義と勇気の覚悟を決めるしかないんだ」

この野郎邪神のくせに何正義の味方みたいな事言ってるやがんだ

「とにかく、モルガントのところまで行って剣を取ってくるんだ
その間自分がグラスギブネンを引き付けておくから」

そう言くとキホールは背中白い翼を広げ地面を蹴り、飛んだ

再び動き出したグイディオンはキホールを標的と認識したらしく、
攻撃を開始した

口が光り、レーザーを発射する。それをキホールは急上昇して避けた
体を翻して小さな杖のような物を取り出した。先端からは4つか5
つ程の小さな雷が渦を作っている

それを降ると、そこから極太の電撃が走り、電竜となってグイディ
オンを襲った

電撃が直撃し、閃光が広がる

当たった部分は黒く焦げている

おお、結構やるじゃないか

このまま倒してくれねーかな

でもダメだろうな。どうせコゲてもすぐに回復しちゃうんだろう

モルガントの傍までこれた

ようし、じゃあこのへタレの剣を奪ってつと・・・

モルガントの手を無理矢理開かせ、しっかり握っている剣を奪おう
とした

するとモルガントが目を覚ました

「ん・・・？あつ！お前何してんだ！」

「うるせーボケ！もつと寝てる！！」

「へぶらあ！」

ブーメランのように鋭い右フックを叩き込んでモルガントを再び気絶させた

ふう、危ない危ない。妙な所で目を覚ましやがって・・・

あつ！しまった！このまま奴を起こしといて

「お前の剣じゃないとあの化物を倒す事が出来ない！平和の為に戦うんだ！」

とか言つて俺の代わりに戦わせればよかった！失敗した！俺のアホ！

体を揺さぶつても起きそうにないので、仕方なくフラガラツ八を奪い取る

うーん。なかなかいい剣じゃないか

さすが神剣とか言うだけの事はある

「ようし、剣が手に入ったぞ

下がれキホール！あとは俺がやる！」

フラガラツ八の鞘を投げ捨てて柄を握り締めると、グイディオンの方へと駆け出した

グイディオンがこちらに気付き、巨大な鉈のような剣を薙ぎ払ったそれをギリギリの所で跳び上がって回避

するとちよつと弱点の左腕の付け根が目の前に来る

そこに狙いを定めて、剣を握りなおして刃先が弱点の方へ向ける

「もらったアアアアアア！！」

そのまま剣を突き刺す

と、しよつとしたら他の腕が飛んできて吹っ飛ばされた

「ぎゃふん！」

「何してんだよ。普通に考えたら正面から行けば叩き落されるに決まってるんだろ」

「それもそうなんだけど、なんか変なテンションになって正面から・

あれ？剣どこいった？」

気付くとさっきまで持ってた剣がない

おかしいな。飛ばされた衝撃で落としちゃったか？

ふとグイデイオンの方へ目を向けると、そのちよつと上に剣が回転しながら飛んできた

あ、落ちてきた

室内に剣が刺さる軽い音が響いた

あ、左腕の付け根に刺さった

援軍

目の前には、俺の華麗なる剣技の前になす術もなく敗れ去り俺の愛剣フラガラツ八に弱点を刺された破壊の化身が立ち尽くしている

決して落ちてきたフラガラツ八が偶然刺さったわけではない
これで世界は救われた

世界中の愚民共は俺様の前に這いつくばって俺様を最強の英雄として後世まで語り継げ

なんて事を考えながら動かなくなったグイディオンを眺めていたら、
奴の指が少し動いた気がした

気のせいかな？動くわけがないよな。弱点刺して、運よく爆発せずに動かなくなっただから

うん。だからこの目の前に迫ってきている巨大な剣もなんかの幻覚……

「うわらば！」

巨大な剣で殴られてすごい勢いでぶっ飛んだ

幻覚じゃなかった！現実だった！

「どういう事だよ！弱点刺したのに動いてんぞ！」

「おかしいな。なんで動けるんだろう」

「おかしいな。じゃねー！！どうすんだよ！」

あ、いかん。こっやって話し込んでるとまた攻撃される……

再び来ると思われる攻撃に身構えた

が、何も来ない

むしろ攻撃どころか、また止まってる

「あれ、また止まった。何やってんだろうアイツ」

不意にキホールが叫んだ

「やっぱりだ！不完全なまま起動させたから活動限界が来たんだ！」

「活動限界だつて？」

「そう、活動限界。もう奴はろくに動く事すらできないはず」

「そんな制限時間みたいなのがあるなら、危険を冒さずにどっかに隠れて限界が来るの待ってりゃよかつたんじゃないか？」

沈黙

「まあ、それは置いといて」

置いとかれた！

「動けない今がチャンスだ！早くあの腕の付け根に刺さってるフラガラツハを掴み、そのまま腕を切り落とすんだ

そうすれば今度こそ完全に動きが止まるはず」

「え？動けないのにわざわざ切り落とすの？」

もう活動限界なんだからほっとけばいいんじゃない？」

ハッ！まさか、活動限界になったら中のマウラスが操縦桿をガチャガチャしながら動け動け！

つてやり始めて、暴走して、でっかい化物を喰ったりするのか！？」

「いや、そんな事にはならない」

ならないらしい

「活動限界が来たら動かなくなるなんてそんな単純なものじゃないんだ

限界が来たら循環している魔力の行き場所が無くなるから、使われない魔力がどんどん溜まってしまふ

早く不純物が含まれている部分を切り落として魔力の循環そのものを止めないと

溜まった魔力が飽和して大爆発を起こしてしまうぞ！」

「マジで！？なんでそんなに爆発しやすいんだよ！」

石ころか！石ころのせいか！？」

「もちろん爆発したら自分達もただじゃすまない

間違はなく消し炭になるね」

「ええっ、そりゃ困るよ

ええい、こうなったらやってやるぜ！」

そういうと俺はほとんど動かなくなつたグイディオンに向かって駆け出した

反撃してこないからいくらでも強気になれるぜゲへへへ

膝、腕、肩と奴の体を踏み台にして跳び、フラガラツハの刺さっている部分へと来た

そして柄を掴み、思いつきり下方向に力を込めた

グイディオンの腕が切り落とされる

その瞬間、閃光が目の前に広がった

「爆発したんですけど」

「そうだね」

「お前腕切り落としたら爆発しないとか言つたじゃん」

「あんなに力任せにやったら、そりゃ爆発するよ。相手は精密機械なんだから」

「あれのどこが機械だ」

腕を切り落として光つたと思つたら、大爆発を起こした

その爆心地にいた俺はその爆発にモロに巻き込まれた

キホールはいつの間にかバリア張つてて、無傷で済んだ

「俺だつたから黒こげになつただけで済んだから良かったものの他の奴だつたら間違ひなく跡形もなく消滅して死んでたぞ」

「いや、自分の常識だと黒こげになつても死ぬんだけど・・・」

「最強の救世主だから黒こげになつても死なないんだよ」

そう言う俺は体をふるふると揺すつた

コゲがキレイに落ちる

「そんな事よりあれを」

キホールが指差した先には、グイディオ・・・じゃなかった。マウラスが倒れていた

「あ、そっぴや中にマウラス居たんだつた
もしかしてあの爆発で死んだんじゃ」

「どうだろう。早いとこ確かめてみようか」

2人してマウラスにかけ寄る

顔色は普通だ。体にも特に外傷は見られないし、脈もある。呼吸も
ちゃんとしているみたいだ

「なんとか生きてるみたいだな」

「あ、ホント？いやよかったよかった

目の前で死人なんて出たら、夢見が悪くなっちゃうから」

キホールが自分の命狙ってた奴が助かってホッとしている

こいついい奴っていうかどっか抜けてんじゃないか？

さて、これからどうしよう

当初の目的であるグラスギブネンの破壊も達成したし、マウラスも
助かった

出て行くにも外には魔族ウジャウジャいるだろうしなあ

目の前に敵のボス2人いるけど、さんざん共闘したキホールと

「剣を取れ！これが最後の戦いだ！」とか言いながら殺しあうって
のも嫌だしな

そっぴやキホールと言えば、あの激しい戦いの中でも顔隠してる口
ーブ取れなかったな

どんなのが中に入ってたんだろう。なんか気になるな

「なあ、キホール」

「何？」

俺の呼びかけに、キホールが振り返って答える

「あんだだけ激しく動き回った戦闘でも、そのローブ脱げなかったけ
ど、何で？」

この問いに、キホールは急に狼狽し始めた

「え？いや、何でって言われても

どうでもいいじゃないかそんな事」

「そのロープの下にはただお前の顔があるだけだろう？
別に隠す必要はないだろう」

「いやいや、そんな人様に見せるようなもんじゃないし・・・
気にする事じゃないよ。ハハハハハ・・・」
怪しい

一体なぜこんなにも必死に隠す必要があるんだ

まさか今までのように、素顔は不自然なぐらい美形ってわけじゃないだろうな

いや、そんな事は有り得ない

その辺に石ころが転がっているかのごとく、美形がいてたまるか
しかし、この真実を暴く事こそが俺に架せられた運命
のような気がする

「キホール。もしそのロープの中にあるものが、こっつ・・・
頭に角が生えてる敵つい悪魔とか

触手とか生えてる異形の化物とかだったら、俺も大いに納得しよう
邪神っぽいからな

でも、もしその中身が色白の美少女とか美少年、あるいはイケメン

とかだった時は・・・」

「だった時は・・・？」

「お前を正義の名の下に処刑する」

「ええっ!？」

あまりの急展開にキホールもビツクリ

「さあ、観念してそのロープを取るのだ!」

そう言いながらロープの端っこを掴むと
体を捻らせて、その手を振り解こうとした

「や、やめろ!誰か助けて!」

「ウヒヤヒヤヒヤヒヤ」

ここは完全な密室。泣けど叫べど誰も助けに来ぬわ

「さあ観念するがよい」

キホールは手を振り解くと、なんとか逃れようと後ずさりしたが運悪く自分のローブの裾を踏んでしまい、派手に仰向けに転んでしまった

そこに俺がゆつくりと近付く

「よいではないか、よいではないか

ゲヘヘヘ」

「ヒ、ヒイイイイ！だ、誰かー！」

そう叫び声を上げた瞬間、キホールの横の空間に歪みが生じた

その歪みから、俺のよく知る黒い長髪が見えた

「待たせたわね中の人は男！

助けにき………」

空間の歪みから出てきたモリアンは、そこまで言って目の前の状況

を視認し、言葉が途切れた

部屋中の空気が凍りついた

帰宅

空間がまた歪んだ

モリアンが帰ろうとしている

それを慌てて引き留める

「わー！待った待った！帰るな！」

「え……。何か用ですか変態さん」

急によそよしくなった

「変態じゃねえ！」

「こんな場所であんな変態プレイをしておきながら何を今更

だいたい襲ってたあの黒ローブの方は一体誰なの」

「あれは邪神キホールで……」

「か、神を相手にあんな変態プレイを……!?!」

「だから違うって言うてんだろぅがアアアアアア!!」

俺は気を取り直して尋ねた

「そっいや、何でここに来たんだ？」

「何でって、そりゃあ助けに来たに決まってるでしょ」

「ほう、俺をこんな敵地のど真ん中に送り込んでおいて、流石に罪悪感に駆られたか」

「まさか。」

グラスギブネンの復活が迫っていたあの状況じゃ、滅多な事じゃ死なないアナタを送り込んで時間を稼ぐのは

大局的に見て正しい判断でしょう

現にグラスギブネンや魔族の大軍なんかものともせずに神様相手に変態ハッスルしてたし」

「変態ハッスル!? そんな隣の空き地にUFOが落ちてきたみたいなこと……」

はて、時間を稼ぐ？

あの状況で時間を稼いで何をやる気だったんだ？

まさか一人でコッソリ逃げる気だったんじゃないだろうな
そう質問したら、お前じゃあるまいし、と冷笑された

「ほら、私がマリー助けたって言ったの覚えてるでしょ？

だからマウラスを説得する為にマリーを連れて来たのよ」

「ああ、なるほど

で、そのマリーはどこに？」

「一緒に空間を飛んできたから、そろそろくるはず・・・
ほら来た」

そう言つてモリアンが指差した先には、先ほどと同じ様に空間が歪
んでいるのが見えた

その歪んだ空間から見覚えのある、両側で2つに束ねた銀色の長い
髪が見えた

ブラデイリだ

なんでブラデイリがここに？

ああ、そうか

確かブラデイリは女神の部下だとか言つてたな
きつとなんとなくついてきたんだ

「で、マリーはどこにいるんだ？」

俺が疑問を口にする、モリアンは不思議そうな顔をして答えた

「え？そこに居るじゃないですか」

「どこに？」

「だからそこに」

「そこにつて・・・そこにはブラデイリしかいないじゃないか」

「ブラデイリ？何を訳のわからない名前を・・・

そこにいる銀髪の女性がマリーですよ」

「どうも。ナオことマリーです」

ブラデイリが微笑みながら軽く頭を下げる

思考が一瞬停止した

「はあ!？」

何を言っているんだこいつらは？

確かにブラデイリのミドルネームはマリオッタだが、名と姓が違うじゃないか

そっぴやミドルネームって一体なんなんだ？

もし俺にミドルネームあるとしたら「人は」あたりか!？

せっかくだから「フォン」とかがいいぞ

ええい、もうわけわかんねえ

考えるより腐るほど浮かんだ疑問をぶつけた方がいい

「お前マリーってピンクの髪のはずだぞ！お前銀髪じゃねーか！」

「成長したらピンク色の髪が銀色になりました」

「名前はどうなんだよ！マウラスん家は姓がグイディオンのはずだぞ！」

「ブラデイリは母方の姓です」

「母方の姓使ってるのかよ！究極のメニュー担当者かお前は！」

「ってかなんで母方の姓使ってるんだよ！父親の作った芸術作品を片っ

端から壊して家飛び出したのか！」

「名前から辿られて魔族に見つかったら困ると思って……」

「ナオって部分は何だ！」

「名前3つ並んでた方がカッコイイと思って……」

「そんな理由かよ!？」

ええい、質問にスイスイ答えやがって

「じゃあその体は何だ！マリーは計算したら今10歳が11歳ぐらいのはずだぞ！」

お前の体どう見ても子供のそれじゃねーぞー！」

ブラデイリの背は平均的な成人女性より少し高いぐらいある

肌は妙に白く、不自然なほど全体がほっそりとしているが、無駄に乳がでかい

よーわからんデザインの黒い服を着ていて、なぜかノースリーブで

腕丸出し

胸元は少し開いてて、足の方の生地がなぜか薄くて少し透けてる
きつとこの衣装で男を魅了しようとか考えてやがるんだろうな
地獄で100回死ね

「それがよくわからないんですが、気付いたらこんな体になってた
んです」

「んな馬鹿な事があるわけ・・・」

「それについては私から説明するわ」

横で聞いていたモリアンが口を挟んだ

「あの時マリーを助けた時、思ったより傷が深くてね

このままでは出血が多くて死んでしまうと思って。

それで自然治癒力を高めて傷を塞ごうと、かなり頑張って魔力を放
出して封印されてる所から秘術を使ったのよ」

「うん。中々適切な判断だな」

「でも何を間違ったのか、傷が塞がったのはいいんだけど

体中の細胞が異常に活性化しちゃって、体が急成長しちゃってあんな
なことに」

「モリアンひでー！」

全ての事実を知ったブラデイリが、動揺しながらも口を開いた

「そんな理由があったんですか・・・私はてっきり自分が死んでしま
って

魂が漂っている所を女神様がお見つけになって、女神の使いとして
この体を授けてくださったのかと・・・」

「それはぜってーねーと思うけどな。大体モリアンは周りがそう言
ってただけで、本当に神ってわけじゃないし」

「ええっ!？」

この言葉にブラデイリはさらに驚いた

なんだ知らなかったのか?

しかしそんな理由があったのか

あの歳で神の使いとなつてしまつたつて思い込んでいたから、あんな不自然な喋り方をしてたのかなあ

きつとすごい苦惱とか気苦労があつたんだろうな

その苦惱からくる何かに俺はブラデイリに対する嫌悪感を感じていたのだろうか？

そう考えると、ブラデイリに同情と、頑張っていた少女に対する好感の念を抱かすにはいられなかった

「わきゃねえだろうがああああ！！！」

俺は自分の考えに自分で突っ込みを入れた

「えっ！？何が!？」

「いやこつちの話」

「あの一・・・」

完全に話題の輪から外れていたキホールが遠慮がちに声をかけてきた
いかんいかん。すっかり忘れてた

「自分、話がさっぱり見えてこないんだけど・・・」

「それもそうだよな。とは言つても今から全てを話したら時間かかりそうだし

それに今からマウラス起こすから、キホールはいない方がいいかもしれないぞ

もしキホールの姿見たらマウラスがまた

『貴様は娘の仇じゃああああ！！死にyあがre1as；1da
あ1sm；ホ。オオオオオオ』とか言いながら襲つてきそうだし

「発言はともかく、襲ってくるって事はありそうだね。そうなら話がまたこじれそうだし

じゃあ自分はモルガント連れて帰るね」

「うん。そうして」

キホールは方向を変えると、モルガントの方へと駆け出した

しかし、半分ぐらい行ったところで「あ、そうだ」と声を出してこちらを振り返った

「そういえばその剣モルガントのだよ。返して」

「ええー。このフラガラツハとか言う剣、結構切れ味よくっていい感じなんだけどな」

「パクっちゃ駄目か」

「駄目だよ。それじゃドロボウになっちゃやうでしょ」

「ドロボウになっちゃやうじゃあしょうがないな」

「はい、返す」

そう言う俺はフラガラツハをキホールに手渡した

なんか気の抜けた会話と空気だ

この場に女神、女神の使い、人間最高の魔術師

邪神、魔族最強の剣士、そして異次元からの救世主がいるとは到底思えない

じゃあね。とキホールは言い、倒れてるモルガントの傍に行つて道具を取り出し、それを地面に投げつけた

すると妙な色の霧がキホールとモルガントを包み込み、霧が晴れると2人は消えていた

感じはいいけど、不思議な道具をいっぱい持つてる奴だったなあ

「そういえばマウラスはどこに？」

ふと気がついたようにモリアンが尋ねる

「ああ、そこにグイディ・・・グラスギブネンの残骸があるだろうあそこにマウラスいるよ」

それを聞くと、ブラデイリは「えっ」と小さく声を上げてグラスギブネンの残骸に駆け寄った

物心ついた頃にはもういなくて、1年ほど前に少しだけ会った父親に会えたんだ

そりゃあ駆け寄るよな・・・

ん？待てよ

ブラデイリの方がわかってても、マウラスの方は娘だってわかんないんじゃないか？

こうして俺が召喚された理由となった事件は全て解決した
この俺の英雄的行動が後世の歴史にカッコよく残るといいなあ
女神を救い、この世の平和を守った伝説の勇者みたいな感じさ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5387d/>

MBNG FirstGeneration

2010年10月9日15時10分発行